

---

# 屑と天才と戦争嫌い

睡眠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

屑と天才と戦争嫌い

### 【Nコード】

N1986V

### 【作者名】

睡眠

### 【あらすじ】

幼い頃から”屑”呼ばれてきた少年。全ての人々から罵倒され、毎日罵声を浴びさせられていた。彼もそれを受け入れている。

そんな少年には、ある意外な素顔があった。

”天才だが戦争が嫌い”

頭の狂った戦争嫌いは、『試験召喚戦争』を行う文月学園で

どんな学園生活を送るのか？

頭の狂った”天災”が織り成す学園小説

## プロローグ 屑の始まり（前書き）

始めての方、そうでない方、睡眠です

結局始めましたバカテスの小説

主人公結構外道にしてみました

それが嫌いな方は読まないでください

作者は厨二病患者なのでそれも嫌いなら読まないでください

では、プロローグです

## ブローグ 屑の始まり

視点ー ???

『うぜえんだよお前!』

うん、確かにそうだね。

『どっか消えてくれない?』

出来れば消えたいよ。

『死ね屑が!』

屑で結構。寧ろ褒め言葉?

『勉強もしないで悪さばかりして!』

勉強つて算数と国語以外は必要なんじゃないの? 故に小学を卒業した時点で僕の教育は終了した。

『少しは ちゃんを見習いなさい!』

なぜそこでそいつの名前が出てくるんだ? 悪いがあんな奴を見習うぐらいならハゲになった方がマシだ。

『 くんが怪我したのになんで笑ってるの!?!』

なら逆になんで笑っちゃいけないの？

『この屑が！』

うん

『屑！』

うん

『死ねよ屑！』

うん

『どっか逝けよ屑！』

うん

『屑！』

『屑！』

『屑！』

『屑！』

何回も言わせるなよ。

僕は自分が屑って分かってるから、それ以上言う必要はないよ。

そう、僕は”屑”だよ。

なぜ人を傷付けるかって？

楽しいからに決まってるじゃないか。

なぜ他人の気持ちを平気で踏みにじるかって？

踏みにじった時の顔を見るのが快感なんだよねえ…

両親は君のことをなんとかしないのかって？

両親？ なにそれおいしいの？

少しは罪悪感はないのかって？

そんなこと僕に聞か普通？

どうして誰かが困っている時は離れて笑っているだけなのかって？

道行く人々全員を”助ける”ほど人間は生命体として出来上がっていないから、

そんなことをこの僕に期待するのはとんだお門違いだよ。

僕にとってはそんな人間染みた行動なんて馬鹿馬鹿しいんだ。

この僕という存在を作っているマイナスの感情は、本当に受け入れた感情だけだ。

悲しみも、憎しみも、苦しみも、痛みも、全て受け入れた。

だから、他の人にも分かって欲しいんだ。

悲しみも、憎しみも、苦しみも、痛みも、全て他人にも与え、僕の気持ちを分かってもらいたいんだ。

いわば一種の自己満足だね。

なぜそんなに狂っているのかって？

ハハハ、そんなの簡単だよ。

君達<sup>……</sup>が僕を狂<sup>……</sup>わせたんだよ





## プロローグ 屑の始まり（後書き）

いかがでしたか？

この小説の第一声が『うぜえんだよお前！』はどうでしょうね？

最初から酷い扱いを受ける主人公、この小説ではそれが通常です

ちなみに名前が で塞がれているキャラは主要オリキャラで、  
で塞がれているキャラは名無しモブです

## 今回の質問

これは作者が考えた読者に回答してもらいたい質問

回答は自由です。感想欄などで答えてくだされば嬉しいです

王道の質問ですが、一番好きなキャラは誰ですか？

ちなみに作者は須川です（なんてマイナーな）

異端者には死を！

く睡眠く

## 一問 屑とテストと振り分け試験（前書き）

書き置きストックその1

主人公の名前が登場します

多分今話で主人公がどんな人物かが理解できると思います

では、一話です

## 一問 屑とテストと振り分け試験

朝、目覚ましになる。

いつものことだ。

布団に寝転がったまま目覚ましを止め、  
再び布団の中に潜る。

いつものことだ。

自分の愛犬である柴犬の太郎たろうに顔を舐め起こされる。

いつものことだ。

ネーミングセンス無いって思った人、後で体育館裏に来てくれ。

僕の朝はいつも通り進んでいた。別に変わった様子もなく、  
特別おかしいこともおきない。

布団の中から起き上がり、頭を掻きながらリビングへと  
向かい、後ろから太郎が着いて来る。太郎以外は別に誰も  
僕の朝を出迎えてくれる者は居ず、一人で簡単な朝食を取る。

昨日買い置きしたコンビニのおにぎり。  
それを無愛想に食い、制服へと着替える。

これが僕のいつもの日課になっていた。

現在時刻は朝の六時。

学生にしてはかなり早い時間帯だが、僕にとってはこれが普通。

着替え終わると太郎は既にご飯を食べ終わっている。

こいつは食べるのが早いから助かるな…

玄関を開け、太郎を散歩に連れて行く。

本当はあの変なロープ的な物を  
付けないといけないんだけど、太郎は僕の言う事に忠実だから必要ではない。

外へ出る前に部屋の全体をしてみる。

僕のこのアパートの部屋は最上階の一番端っこ。

1LDKと一人暮らしには快適な空間だけど…

…我ながら殺風景な部屋だと思う。

リビングには旧式のアナログテレビにこたつ、  
数冊の小説が敷き詰められている本棚のみ。

キッチンには小さな冷蔵庫に食器が数種類。  
太郎のご飯用も含めても指で数えられるほど。  
また、その内の四割が太郎用という少なさ。

僕は料理技術が皆無のためフライパンなどは殆どない

廊下の突き当たりにあるのはこの部屋唯一の寝室、  
そして僕の部屋でもある空間。そこは多分このアパートで  
一番殺風景だと思う。

部屋にテレビは愚か本棚も置いておらず、ベッドすらない。  
あるのは畳である布団に机とタンス、そして参考書や  
教科書などを壁に積み上げた部屋の隅っこ。私物など殆どない。

唯一の私物はタンスの上に置いてある一つの写真だが、  
倒れていて手入れなどは殆どしておらず、埃を被っている。

もつと私物を入れた方がいいか？と時々思うが  
あまり欲深くないのでなにがよいのかが分からない。

太郎もいつも僕の布団の中で寝てるし寝る場所に困ったことはない  
しね。

そんなことを急に感じたが、僕はこれが気に入っている。

あまりごちゃごちゃしていないので落ち着くし、  
なにより部屋が広く感じるんだ。

玄関の鍵を閉め、歩き出し、そのすぐ横に太郎が続く。

しばらく歩くと、僕と同じく早朝の散歩をしている人物を  
見掛け始める。どれも老人ばかりだ。健康に気を遣っているのか？

「おや、君じゃないか」

すると、一人の年老いた男性が話しかけてくる。

「…藤さんですか。お早うございます…」

この老人は散歩をしている時に顔馴染みになってしまった

一人暮らしの人物、藤周蔵。妻に先に逝かれてしまい、

孫も息子も居ない寂しさを紛らわすために散歩をしているという。

藤さんから

したら僕は孫みたいな存在なのかな？

「今日も散歩かい？」

「運動させないと太郎が太るんで」

「そうかいそうかい。では、気をつけるんだよ」

そう言いながら反対方向へと歩いていく。

藤さんは僕と普通に接してくれる数少ない人物だ。

故に僕も藤さんのことは嫌っていない。

しかしその後は特に知り合いに会うこともなく、散歩を  
終わらせ家に戻る。

相変わらず、道行く人に睨まれながら。

「ふああああ……」

現在時刻： 午前八時三十分

教室の中は沈黙が流れており、鉛筆がカリカリと走る音しか聞こえない。

今日は生徒にとっては大事な日らしい。

”振り分け試験”といい、このテストでの成績が僕にとっての第二学年のクラスを決める。

つまり、この試験での成績が自分の二年生としての学園生活を決める試験なため、全生徒が熱心の勉強した上で試験に臨む。

そんな中、”例外”は必ず存在する。

僕もその一人だ。

「まずは…名前と」

名前： 仲野宮浪都 なかのみや ゑつと

今更だが僕の名前は仲野宮浪都。別段変わった名前でもない、



とても地味でよくありそうな名前だ。

名前とはテストでは一番大切な部分であり、これ一つで満点から零点にまで落とされることもある。これを書かなかったら多分社会じゃ生きていけない。

そんな大事な部分を僕は名前を書き入れ、適当な問題を見つける

73)

科目： 日本史

第二次世界大戦時に大日本帝国海軍の連合艦隊司令長官であり、ミッドウェー海戦時に大敗し、翌年ブーゲンビル島上空で米軍に撃墜され

戦死した軍人の名前を述べよ

答え：

この問題を見た瞬間、僕は思考をシャットアウトし、机に平伏した。

別に問題が難しい訳じゃない。いや、それ所かこんな問題は簡単だ。

僕が地机に平伏した理由はただ一つ。

問題が長すぎるんだよ…

こんなんじゃないやる気が無くなる。

運がないね、適当に見付けた問題がこんなものなんて。

僕はそのまま目を閉じ、意識を自分で吹き飛ばした。

「そこまで！ 全員、筆記用具を仕舞え！」

「ふぁ？」

教師から終了の声が聞こえ、目が覚める。

うーん、どうやら寝ている間に終わってしまったらしい。

試験時間は確か一時間ぐらいか？

そんなに寝ていたのか…

僕は白紙の解答用紙を教師に渡し、帰路へと歩いていく。

渡した時に教師にかなりビククリした表情をされたが、無視する。

「ふぁぁぁぁ… 多分、いや十中十でFクラスだね」

簡単に説明しよう。

ここ文月学園ふみづきがくえんには六つのクラスが存在している。

上から成績トップのAクラス、Bクラス、Cクラス、Dクラス、Eクラス、そして最下位のFクラス。

成績トップクラスのAクラスは最先端の設備で教育を受けられ、下に下りるほど設備が悪くなる。AとFでは天地の差があると言われている。

このテストでは点数上限が無いため、無制限に点が取れるからAクラスに入るには最低でも数百点は取らないといけない。

そんな厳しい世界の中、僕は白紙のまま解答用紙を出した。

つまり0点。

Fクラス入りは確定だな。

文月に編入して初っ端から零点とはな。我ながら関心だ。

「ふああああ…別にクラスなんてどうでもいいか」

「へえ、ついさっき試験を受けてきた生徒のセリフとは思えない台詞ね」

後ろから何者かが僕の独り言に答えてくれる。

「ただの独り言に答えるなんて、誰かは知らないけど相当盗み聞きに長けてるんだね。正直に言つと引くわ」

「フン、あんたならそう言つと思つてた」

誰だ？ 僕を知っているのか？

後ろを振り向くと、そこには僕と同じく真つ黒な黒髪を腰の辺りにまで伸ばし、  
背が僕と同じくらい高い女子生徒が立っていた。男子である僕と同じ背つて結構高いね

「あゝあ、君か…」

そして、僕の知り合いでもある。

「あゝあ」とはなによ。せつかく久しぶりに会つたのに」

「僕は絶対に会いたくなかつたんだけどね、長瀬」  
ながせ

長瀬流歌。ながせるか 僕の幼馴染でもあり、  
とうの昔に離れ離れになり、なぜか僕のことを嫌っている執念深い少女。

「なんで名字で呼ぶの？ 昔みたいに流歌でいいじゃない」

「君とそこまで仲が良かった覚えはないけど？」

「呼びたくないのも当然ね。だってあんた、今はもう皆から”屑”  
って呼ばれてるんでしょ？」

屑、か。

それが僕のあだ名。

曰く、勉強もせず、愛想の無い、無感情で冷血。  
他人の不幸を誰よりも喜び、好く、歪んだ人格。  
そして、近づく者全てを凍てつかせるようなオーラ。

故に”屑”。

「それになにか？ 僕はその呼び名に不満は感じないし、  
否定もしない。君もそうなんだろ？」 天才”さん”

顔に笑みを浮かべながら挑発的にそう呼ぶ。

これが彼女の呼び名。

成績優秀、運動も抜群、他人から見れば綺麗な  
顔立ち、そして僕以外には優しい性格。十年に一度の  
才能と名高く、僕とは正反対な人物。

そう呼ぶと少し怒りの表情を浮かべながら僕を睨んでくる長瀬。

あはは、こんなことで怒るなんて、天才さんも幼稚だね？

「あんたにそう呼ばれる筋合いは無いわ！」

「ククク、こんなことで感情的になるなんて、天才さんは酷く幼稚なのか？」

「屑”が言ってくれるわね…」

おおおお、怖い怖い。

やっぱり人間のこんな怒ってる顔を見るのは最高だよ！

「まあまあ、そう怒らないで。鹹かったのは謝るからさ。はい、ごめんなさい！」

ペコツと頭を下げる。

すると、益々怒りに満ちた表情になっていく長瀬。

あっはっは！ 楽しいなア！

「っ…！」

そのまま僕の目の前まで行き、頬を思いつきり平手で殴られる。ドラマで言う女の子が人を殴る時にやるあれだよ。

「（フー、フー、フー…）」

ああ…どうやら落ち着いたみたいだね。

「怒りが収まったかな？ はは、おかしいねえ、いつもの

”成績優秀者、皆から好かれている”長瀬流歌ちゃんはどこに行ったのかなあ？ あはは！”

立ち上がり、再び貶す様に笑う僕。

久しぶりだなあ、これをするの。

やっぱり人を怒らせたり悲しませたりするのは快感だよ…

「…あんたにこは乗せられない…！」

「でもさっきまで思いつきり乗っちゃってない？  
言ってることと行動が矛盾してるぜ、天才さん？ あはは！」

ギリギリと音が聞こえそうなほど拳を強く握り締める長瀬。

あはは！ こうゆう”天才”とか”完璧”とかって言われてる人間をこんな風に怒らせるのっていつやっても傑作だよ！

「…話が逸れたわね…あんた、テストの出来前は？」

「天才さんが僕みたいな屑にそんな事を聞いてどうするつもりなんだ？」

「黙って答えて！」

「おお怖い怖い。出来前は、全然かな？」

そう言うで一瞬「え？」って表情になる。

なにをそんなに驚いているんだ？

「全然ですって？」

「そう。僕は一問も答えられないままテストは終わった。まったく、一切勉強しなかった罰がここで来たか。これじゃあFクラス決定だね」

より一層強く僕を睨む長瀬。

なにかしたか？ テストの結果なんて僕の勝手だろ？

「あんた…どういうつもり？」

「と言いますと？」

「なぜあんたがFクラスなのよ。普通なら「はいストップ！ それ以上は言うな」

…やっぱりなにか企んでいるようね…」

なぜ僕はこんなに警戒されてるんだ？ あ、屑だからか。

「企む、ねえ？ 強いて言うなら僕は出来るだけ長瀬とは別のクラスに入りたかった訳よ？ それで天才さんのお前とはまったく

正反対のFクラスにすることにした。まあテストを受けるのも面倒だったんだけど」

もう怒りを通り越して呆れているようだ。



でも、どうやら落ち着いたみたいだね。

いやあ、こんな人目の付く所で僕を殴ったり大声出したりしてたからね。

周囲の視線がこっちに刺さる。僕も久しぶりだったから加減を間違えたよ。

「……」

「じゃ、話は以上かな？ 天才さん」

「…あんたにそう呼ばれる筋合いはないわ」

最後にそう言い残し、不機嫌そうに帰ってった。

あははは！ 僕程度の存在になにそんなにムキになってんの？

そもそも天才さんが僕みたいな屑になんの用なんだろ？

まあ凡才の僕には天才さんの考えなんかまったく分からないけど。

うーん、しかし序盤と性格もテンションもかなり

変わってるって感じだね。失礼、僕は朝は弱いんだよ。（低血圧）

さて、我が家に戻ってゴロゴロしよう！

え、勉強？

ハハ、寝言は寝て言って欲しいな

うーん、しかし、久しぶりでも物足りないなあ……

ま、楽しみは二年の時にまで取っておこうか！

## 一問 屑とテストと振り分け試験（後書き）

いかがでしたか？

主人公の屑っぷり全開ですね

今作の主人公の名前は仲野宮浪都です

名字の由来：

人格と正反対な名字を選びたかったです

ですので”みんなと仲の良い”の”仲”を入れて仲野宮なかのみやです

名前の由来： 主人公の行動に近い”浪人”の”浪”を取って浪都るくとです。”狼”にしなかったのは厨二臭かったからです  
作者は既に厨二ですけど

ちなみに今小説の多分唯一のオリキャラの長瀬流歌の名前の由来も一応書いておきます

名字： 某戦闘機ゲーム5のキャラから取りました

名前： 某心靈ホラーゲームのメイン主人公から取りました

犬の名前のネーミングセンスの無さは本当に無視してください（orz

ちなみにテスト問題の答えは山本五十六です。簡単ですね

今回の質問

連続投稿なので前回と同じ

～睡眠～

## 二問 屑と鉄人とFクラス（前書き）

原作スタートです

今回も主人公の扱いの酷さが分かります。何回も言いますがこれが通常です

ちなみにアニメではEクラスと戦い、Aクラスに直行しましたが、今小説では漫画と同じくDクラス Bクラス Aクラスと進みます。

流石にこれぐらいは覚えてるんで

では、二話です

## 二問 屑と鉄人とFクラス

振り分け試験を受けてから数ヶ月

文月学園は新学期を向かえ、一年は二年、二年は三年と進学していき、新しく新入生もやってくる

桜の木が美しく咲く中、不穏で”マイナス”な空気を放っている人物が道中を歩いている

桜の花びらが舞い落ちる幻想的な空間の中を汚しているように歩く存在、それがこの僕、仲野宮浪都

今日は文月学園第二学年の始まりだ

僕にとってはどうでも良いような学園生活

馬鹿馬鹿しいシステムを取り入れたこの学園に興味なんて欠片もない

僕はただ、他人を不幸に出来ればそれで良い

他人の悲痛な表情を眺めたらそれで満足

学力なんて気にならない

故に僕は、今年も毎年と同じように学業を一切行わない

その学生としてはぶっ飛んだ決心を胸に、僕は

文月学園の門へと向かう

門へと到着するや否や、周りの生徒達に睨み倒される僕。

僕はこの学園所かこの町では有名な存在だからね

勿論、悪い意味でだけど

「お早うっス、西村先生」

不適な笑みを浮かべながら僕は門の前に立っている  
筋肉質な教師へ挨拶をする

「ああ、仲野宮か。相変わらずだな」

西村先生も周りから睨み倒される生徒を見て  
気まずそうな表情をしていたら、僕だと分かっていつも通りに戻った

この人物は西村宗一<sup>にしむらねづいち</sup>。生活指導を担当しており、

恐らくは文月学園全校生徒から”鉄人”と恐れられている教師。趣味がトライアスロン

という”超”が付くほどの肉体派教師でその授業は”鬼の補修”と恐れられている。

そして、藤さん以外で僕と唯一”普通”に接してくれる人物

「それこそが僕のアイデンティティなんじゃないっスか？」

「そう考えるお前が心配になって来たんだが…それより、これを受け取れ。大事な物だから直ぐ確認しろよ」

西村先生から渡されたのは一つの封筒

この中に僕の教室が書かれているはずだ

まあ、100%の確率でFクラスだけど

「確認しなくてもどのクラスかは分かるんすけどねぇ……別に捨てていて良いっすよ？」

「それよりその挑発的な口調は止める。俺の前ではそんな仮面を被ったような接し方はしなくても良いだろ」

……西村先生は僕の”本性”を知っている人物でもある

この先生には困るな……なにもかも見破られてしまう

「……分かりましたよ。では、早速確認しておきます」

封筒を受け取り、中に入っている紙を確認する

仲野宮浪都      Fクラス

「ですよねぇ」

「まったく……お前は今年も去年と同じように過ごすのか？」

別の学校であつたにも関わらず、西村先生は僕の  
一年の成績や授業態度を知っていた



「じゃなきゃ僕じゃありません」

「その性格さえ改善できればお前も立派な生徒なんだがな…」

溜め息混じりにそう告げる

僕が真面目に勉強するって2012年の地球滅亡説よりありえない話だよ

「そんじゃ、僕はホームルームがあるんでこれで」

「ああ。お前もあの”バカ”のようにならないよう気をつけろよ」

「ある意味あっちの方がまだ”マシ”と思いますけどねえ…」

最低限の会話を交わし、僕は自分のクラス、Fクラスへと向かう

「ここが”Fクラス”ねえ……ま、僕が過ごすのには相應しい環境だと思うけど」

廊下の辺りで既に理解できるその設備の低さ

2・Fという札ですらもう既にボロボロで何時外れてもおかしく

ない

ような状態だった。木が腐敗している時点で取り替えないといけないんじゃないのか？

それを無視し、教室の扉を開ける

… 中也相当酷いね

黒板にはチョークの姿が見えず、机が卓袱台で  
イスは座布団という環境の悪さ。それ所か卓袱台も脚が  
ボロボロに腐敗していた

でも、机なんて使う機会はないから構わないけどね

僕が教室に顔を出すと、数人がこちらに向き、嫌そうな顔をした

中には舌打ちする者まで居る

ハハ、ざまあないね。僕だけど

教室の一番左下端の席を陣取り、鞆を枕代わりにして  
目を閉じる。これが僕の学園生活の基本。勿論、誰にも起こされる  
ことはない

「仲野宮くん」

「ふぁ？」

名前を呼ばれ、僕は睡眠から目覚める

僕を呼ぶなんて…今日は嵐でも起きるのか？

「はい、なんでしょう？」

担任と思われる初老の男性が僕を呼びかけた

ちなみに僕の周りに座っている人物は誰一人と居ない

「やっと起きてくれましたか。今は自己紹介をしている最中なので席順だと君が最後です」

自己紹介…か

別にみんなは僕のことを知っていると思うけど。勿論悪い意味で

「僕は仲野宮浪都。君達に名前と呼ばれる筋合いはないので仲野宮と呼んで下さい。僕は君達とは一切交流を持つ気はないので安心して下さい」

笑顔でそう告げる

『そつだそつだ！ てめえなんかとは誰も関わりたくねえよ！』

『屑が偉そうに言っんじゃねえよ!』

相変わらずの罵声

こんなの、以前と比べたら可愛いものだよ

「…最後に坂本くん、どうぞ」

最後に教壇に上がっている赤毛の生徒の番になった

僕は最後じゃなかったんだね

「このクラス代表の坂本雄二<sup>さかもと ゆうじ</sup>だ。

俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

ならお言葉に甘えて”代表”って呼ぼうか

「……さて、みんなに一つ聞きたい」

ん？ この後に及んでなんだ？

そして、その視線はクラスの全体を流れるように移していき、それをクラスメイト達が追っている

うーん、こうやって改めて見るとかなり酷い設備だね

カビ臭くて、割れた窓から通る冷たい隙間風

綿が殆ど入っていない汚れた座布団

古臭く、しかも脚がガタガタでボロボロな卓袱台

「Aクラスは冷暖房管理の上、座席はリクライニングシートらしいが…」

それって学生の教室じゃないよね？ なにその高級ホテル？ 旅行にでも来てるのか？

「不満はないか？」

『大アリじゃあー！ー！！！！！！！！』

僕は失笑しただけだね

座布団なら家から枕を持ってくれば済むし、いつそのことここに住もうか？

「だろう？ 俺だってこの現状に大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

これに乗じてクラスメイト達が一斉に不満を爆発させた

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ 差があまりに大きすぎる！』

『屑野郎だっってこと同じクラスなんだろ？ ますます酷いじゃないか！』

その中には僕の罵倒まで入っている。ハハ、その人になにか悪いことでもしたのかな？

「そこで代表としての提案だが、FクラスはAクラスに”試験召喚戦争”

を仕掛けたいと思う！」

試験召喚戦争……か

馬鹿馬鹿しいね。僕は不参加ってことにできないかな？

良い機会なので簡単に”試験召喚戦争”について説明しよう

まず、この文月学園は近年問題視されている学力の低下を防ぐため、世界初の新しいシステムを取り入れた。それが”試験召喚戦争”だ。

この試験召喚戦争は言わば学生のために”模擬戦争”だ

クラス同士で戦争を行い、勝ったクラスが負けたクラスの設備を入れ替えられる。例えばFクラスがEクラスに勝ったとすると。そしてEクラス

の設備がFクラスのものとなり、Fクラスの設備がEクラスになる。逆に上位クラス

が下位クラスに勝利した場合、負けたクラスの設備は1ランク下がる。つまり

上位クラスにとって戦争とはまったくのメリットの無いことになる

戦争とは言っても拳銃や兵器などの物騒なものではなく、試験召喚システムというシステムによって姿を現す、使用者を元に作られた”召喚獣”というポ モンのようなので戦うんだ

全長はたったの80センチ程度でその強さは文月で受けたテストの点数によって比例し、強くも弱くもなれる

そんな戦争紛いのことをここではやっている

…馬鹿馬鹿しい

こんな戦争紛いのことをやってたってなにになるんだよ？

僕はこのシステムが大嫌いだ

しかもFクラスは最上級クラスのAクラスに戦争を仕掛けようとしてる

幾らなんでもそれは無謀過ぎる。まあ、僕は参加しないから関係のないことだけどね

無謀なのはみんな賛成するみたいで、この意見に反論を出す者が沢山居た

『勝てるわけがない！』

『これ以上設備を落とされたくない！』

『姫路さんさえ居れば俺はもうなにも要らない！』

最後の人、それは本人の前では言わない方が良いんじゃないのか？

姫路って誰かは知らないけど

「安心しろ、このクラスには戦争に勝つことの出来る要素が揃っている」

へえ、こんなアホクラスがAクラスに勝てるっても？

「それを今から説明してやる」

そして、代表はクラスの生徒（名前を知らない）を次々と指名していた

偵察や暗躍、隠密に長けているというムツツリーニこと土屋康太くん

実力が学年次席レベルの姫路瑞希さん

女の子みたいな顔をしているが実は男の子で演劇部のホープと呼ばれている  
きのしたひでよし  
木下秀吉：くん？

小学校の頃は”神童”と呼ばれていた代表こと坂本雄二くん  
バカの代名詞でもある称号、”観察処分者”の吉井明久くん

うーん、幾ら学年次席がこのクラスに居てもAクラス代表、つまり主席には敵わないんじゃないのか？



観察処分者だつて物に触れるだけで他になんのメリットもないし

それに神童つて代表が呼ばれても今はそうじゃないんだろ？

小学校つてことは最低でも五年のブランクがある。それじゃあ戦力にならないと思うよ？

「そして最後に……」

代表が最後の生徒を呼ぼうとしたら、急に僕の方を見て、思いつき

睨んできた。僕がなにをしたっていうんだ？

睨み終わった後、心底嫌そうな顔をしながらその生徒の名前を呼んだ

「……仲野宮浪都、立て」

…はい？

なぜそこで僕なんだ？

クラスメイト達も同じく意味が分からず代表にクレイムを言っていた

『なんでそこでこいつが出てくるんだよ！』

『そうだそうだ！　せつかく良い気分だったのによ！』

『あんな屑なんてなんの役にも立たねえよ！』

みんな心底僕のことを毛嫌いしているね

それを僕はただ笑みを浮かべながら黙って見ただけだった

「みんな落ち着け！ 確かにこいつは屑と呼ばれているかもしれない。」

だがお前達は”何故”仲野宮が屑と呼ばれているのか分かるか？」

その問いに次々と回答者が出ていた

『他人の努力を馬鹿にする奴だからだ！』

『俺が上級生に喧嘩売られてた時にアイツは遠くで笑って見てたんだよ！』

『俺たちが必死に勉強してる中アイツは昼寝とかしてたしよオ！』  
と様々な意見が出てきた。どれも正解だけどね

「代表、僕は呼ばれる理由がさっぱり分からないんだけど。

君だって僕を呼ぶ前に睨んでいたじゃないか。毛嫌いしているのならなぜ？」

こんなに士気が最高潮なのに僕の名前を呼ぶのはある意味台無しだぜ？」

挑発的にそう言うのと、一瞬怒りそうな表情をしたが、深呼吸をして落ち着いていたみたいだ

僕の挑発に乗らないなんて、どこぞの天才さんよりは大人みたいだね

代表は一呼吸起き、僕や他のクラスメイトの問いに答えた

「それは、こいつが”天才”かもしれないからだ」

『はぁ！！！！？？？？』

この言葉に僕と代表以外の全員が驚きの声を発した

それを僕はただ笑顔を浮かべて見守っているだけだった

## 二問 屑と鉄人とFクラス（後書き）

いかがでしたか？

改めて読むと主人公の扱いが最悪ですね

F F F 団の人たちにも嫌われています

なんか読んでいると主人公が『めだかボックス』の球磨川に似てきている

のは気のせいですか？

## 今回の質問

連続投稿なので前回と同じ

～睡眠～

### 三問 屑と代表とストーカー（笑）（前書き）

ストックその4

バカテスってコメディで明るはずなのに、主人公の所為で暗い話しか書けない！

シリアスっていうにはそれっぽくもないし、明るい雰囲気でもないし、

なんたるこの微妙感？

では、三話です。はあ…

### 三問 屑と代表とストーカー（笑）

「それは、こいつが”天才”かもしれないからだ」

『はあ！！！？？？』

代表の言葉に全員が驚愕の声を上げた

それもそうだよ。勉強もロクにしないような  
屑が天才かもしれないんだもんね

『ふざけるな坂本！』

『こんな野郎が天才なわけないだろ！』

『あいつが天才なら全人類が天才だよ！』

「…代表、それはどんな根拠があつての発言なんだ？」

一気に質問の嵐が代表に降りかかる

言葉は慎重に選ばうね。じやないと罵倒の嵐が来るよ？

「皆落ち着け！ これは一つの可能性に過ぎない！

そもそもこれが本当かどうか俺には分からないんだ！ ただ、  
俺の可能性は全て確かめただけだ！」

へえ、僕が天才である可能性？ そんな行動は起こしたつもりはな

いけど？

代表の気迫ある言葉に皆が沈黙した

「あれはまだ中学三年の時だ。俺は一度だけこいつと同じクラスだったんだが、こいつの屑っぷりは相変わらずだ。授業でも寝てばかりでノートもクソもなかった。まあ俺も人の事は言えねえけど」

中学の時点で神童じゃなくなっていたんだね

「で、その年最後に大きなテストがあった。それはもう高校を受験できるかどうかに関わるテストだ。俺も珍しく真面目に受けた」

ああ、あれか。あれは正直かなり面倒だったね

いつもみたいにサボったら高校を受けられないし、流石に高校に行かないと生きて行けないよ

「結果はギリギリセーフ、合格点ギリギリで俺はテストを通過したんだ。そこで、疑問に思ったんだ。

”俺がギリギリなら仲野宮はどうなんだ？”って。

いつも通りアイツはテスト時間の一時間の最後の三十分はずっと寝ていたし、正直に言うとか受かってとは思わなかった」

そりゃそうだね。自分より酷い授業態度の奴が受かるとは思わないだろうし

「そこで俺はアイツのテストを確認したんだ。

テストが終わった後は後ろからテストを集めることになってるんだが、

ちょうど俺の席はアイツの真後ろだった」

うーん、そんなことは覚えていないな

ほんの数年前なのにもう忘れちゃったんだ

「結果は、俺と同じだ。仲野宮もギリギリ合格でも、俺はアイツの解答用紙を見て驚いた」

なにかおかしいことでもあったか？

「あいつは、始めの半分の問題だけ解いて提出していたんだ。このテストでの合格者の正解数の目安は半分。つまり、アイツは前半の問題は全て正解させたことになる」

代表の話にクラスメイト達は釘付けになっていた

そんなに僕の話が気になるのか？

「それだけじゃない。あいつの

テストの解答欄の残り半分の問題には全て

”消しゴムで消したような痕”がついていた。

しかも後で解答用紙を見せられたとき、全部それと

同じだった。つまり、アイツは開始三十分でテストを

全問正解の状態で終わらせ、さらに最後の半분을消す

余裕もあって、残り時間を確認にも使わずに寝ていた」



クラスメイト達全員が啞然としていた

まあ何人かは謎の覆面を被っているから表情が分からないけど

「中学最後のテストだぞ？ 勿論中学で一番難しいと言われていたし、誰一人と全問正解者は居なかった」

そこまで難しかったテストだったわけ？

うーん、中学の記憶はかなり曖昧だったからね

「それなのに、ここの屑野郎は勉強どころか授業もまったく受けず、恐らくテスト予習もしていない。そんな状態でこれほどの芸当が出来るんだ。この説は信憑性は極めて高い」

都市伝説みたいな言い方だね

「だから俺はこいつが気に入らないんだ。

勉強もせず、真面目にやる連中を貶す奴なのに、天才レベル。俺でも努力して神童と呼ばれていたつもりだ。なのになんの努力もせずこんな学力を持ってるんだ。ムカつくのは分かるだろ？」

それは僕に対しての嫉妬のつもりなのか？

「だが、戦力なるんならそれでもいい。仲野宮、

単刀直入に聞くが、この説は事実か？」

全員の視線が代表から僕に移る

うん、みんな期待の目で僕のことを見ているね

「そんなの、ガセネタに決まってるだろ」

僕の発言に全員が固まる

『『『は？？？』』』

「まったく、なにを言い出すかと思えば。

僕がそんな芸当が出来るわけがないだろ。僕は根っからのバカで屑、知力なんてあそこの吉田くんより低い」

「僕は吉田じゃなくて吉井だからね！？」

興味のない人は記憶できないからね

「惚けるのは止せ」

「嘘じゃないぜ？ 現に僕はFクラスに居る理由は単純に、回答できなかった所為だよ。これこそ僕の実力だ」

「ならてめえのその中学のテストはどう説明する？」

「信憑性の欠片もないね。僕のテスト結果は確かにギリギリの範囲だった。でも、それは回答できる問題を片っ端から問いただけで、前半の問題が簡単なのは当たり前だろ？」

笑みを浮かべながら挑発的に言う

うーん、代表はあまり乗ってこないね

つまらないなア…

『じゃあ消しゴムの痕は…』

クラスからそんな呟きが聞こえる

「あれは適当に答えを書いただけだよ。  
先生にこんな答えは書くなって言われそうだったから消しただけだよ。代表が見たのはただの見間違えだ」

段々と失望した目が見えてきた

あはは、あんなに期待した目が一変したね

『なんだよ！ せっかく屑野郎を見直したのによ！』

『せっかく良い気分になったのになんだよこのオチ！』

『坂本も勘違いも良い所だ!』

代表にまで怒りの声が向けられる

あはは、良い気味だよ!

うん、代表の怒りも爆発しそうだよ!

「そもそもこんなに多くの可能性があるのに  
なぜ僕みたいな屑を疑うんだい? 代表も馬鹿だねえ。  
あはは!」

『やっぱりこいつは屑以外になんでもねえ!』

『そうだ! このクラスから出て行け!』

『二度と登校してくるな!』

うん、かなりテンションが上がっていたから落差が激しいね

「...お前に期待した俺が馬鹿だった...」

代表も自分の発言の馬鹿馬鹿しさを理解したみたいだね

「でも、こんな屑が居なくても俺達には勝てる要素が十分にある!  
そこで! 俺達の力の証明のためにDクラスを落とす!」

再び士気を上げようと代表が煽りを掛ける

「こんな教室なんて嫌だろ!」

『当たり前だ――！！！！！！』

「なら全員筆を取れ！ 出陣だ！」

『うおおお！！！！！！』

クラスの士気はさつきとは比べ物にならないくらい上がっていた  
代表には統率の才能でもあるのか？

「それでは明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらおう！  
無事に大役を果たせ！」

あはは！ それって生贄ってことだね？

「大丈夫だ。連中はお前に危害は加えない。騙されたと思って行ってみろ」

「本当？」

「勿論だ。俺は友人を騙すような真似はしない」

この二人って友人だったのか？ そんな雰囲気は一切  
感じなかったけどね

「うん。使者は僕がやるよ」

完全に騙されてるね。下位勢力の宣戦布告者は大体  
ボコボコにされて帰ってくる。上位勢力にはなんのメリット

もないからね

吉田くんが教室を出て行くと、代表はニヤニヤと笑い出した

「とりあえず生贄は明久だが、こちらでは作戦を決めたいと思う。このクラスの中で”これだけは負けない”という教科はあるか？」

それを参考に部隊を編成したいと思う」

あ、今が丁度良いね

「代表、一言良いかい？」

「…なんだ？」

僕を見て一睨みした後、話を聞いてくれた

「僕は戦争に関してはまったくの無干渉だからね？」

そう言うときまで冷静だった代表は怒りの表情を浮かべた

「ふざけるな！ Dクラス戦は俺達にとっては重要な戦いだ！ これには姫路以外は全員出陣させる！」

「なら一つ教えてあげるよ。僕は振り分け試験の時は問題に一切答えずFクラスになったんだ。つまり実質0点。

そんなのじゃ戦えないよね？ 第一、僕は戦争がとても嫌いなんだ」

「なんだ？ 屑野郎も怖気づいたか？」

うん、安い挑発だね

「僕は戦争という概念が大っ嫌いなんだ。完全なる平和主義者だよ。ま、君達がそこまで言うなら出てあげるよ。精々瞬殺されないようにしてよ！あはははは！」

トイレと昼食に行くために教室を出る

途中で『二度と来るな！』が聞こえたけど、ここは僕の教室だからね？

視点ー 坂本雄二

相変わらず感じの悪い奴だ…

「あの、坂本くん？」

「なんだ姫路？」

「なぜ、仲野宮くんのことを嫌うんですか？」

そつえば姫路と仲野宮は初対面だったな

「仲野宮浪都。この町じゃ有名な屑野郎だ。アイツは他人の不幸を喜ぶようなイカれた頭を持ってやがるんだ。そんなアイツが俺は大嫌いだ。殴れるならとつくに殴ってる」

「吉井くんもですか？」

「さあな。アイツも仲野宮は嫌いなんじゃないのか？去年までアイツは普通の高校に通っていたらしいが、文月に編入してきたんだ。学費の安さに釣られたんだろ」

学費の安さでここに来るのが大半の奴だしな

「木下くんもですか？」

「わしは代表ほどは嫌ってはおらぬが、どちらかと言われると苦手じゃな」

秀吉も苦手な奴は居るのか

「美波ちゃんは？」

「ウチは…なんとも言えないわね。高校が別だったからあまり知らないんだけど、坂本とかの話を聞くと確かに気に入らない奴ね」

初対面の島田にまで嫌われたか

ざまあねえな



「そうなんですか…」

姫路は複雑な顔をしてるな

まあこいつに初対面で人を嫌うことはできないんだろう

「でも、あの説は本当だと思ったんだがな…」

「あんたの読みが外れるなんて珍しいわね」

「いつもの代表なら外すのはあまり見掛けぬな」

いや、あいつは絶対なにか隠してる

俺の勘だが

その時、教室の扉が勢い良く開くと、  
ボロボロになった明久が帰ってきた

「騙された!!」

「やはりそう来たか…」

だがこれで今日、Dクラスとの戦争が決まった

お前の生贄は無駄ではなかった、明久

「騙したんだね！ 雄二はこの僕を騙したんだね！」

「騙してはいない。俺はお前に嘘の情報を伝えたただけだ」

「世間ではそれを”騙す”って言うんだよ！

雄二、貴様はいつか僕が殺す！」

やれるもんならやってみろ

「大丈夫ですか、吉井くん？」

明久の無事を心配するのは姫路だけか

「あ、うん。大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「それより、今からミーティングを開く！ 屋上まで行くぞ！」

視点― 仲野宮浪都

もうお昼か…今日は勉強はしてないね

まあ、勉強してようがしてまいが関係のないことだけど

僕は一旦教室に戻り、鞆からコンビニで買っておいた御弁当を出す

今日もコンビニ弁当か…いつも通りだね

どこか人気のないところはあるかな？

幾ら罵倒に慣れてるとは言ってもさすがに365日中  
言われていたら疲れるよ

「相変わらずのコンビニ弁当ね」

「…君はストーカーかい？」

「誰がストーカーよ！」

校舎浦に行ったらなぜか再び会ってしまった長瀬さん

君は僕に発信機でも仕掛けているのか？

「僕になにか用でも？」

「フン、初っ端から試召戦争を仕掛けた馬鹿  
でも見てみたかっただけよ」

「それって遠まわしに僕に会いたいつて言ったのかい？  
あはは！ まだ僕になにか未練でもあるのか？」

貶すように笑う

僕たちは昔は”一応”友達だったからね

今では大分嫌われてるみたいだけど

やっぱり長瀬も他のみんなと同じなんだ

「誰があんたなんか…」

「ならどこか消えてくれないかな？」

僕はこれでも疲れていてね、一人が良いんだよ」

正直に言つと目障りなんだよねえ」

僕は今は長瀬を貶したりする気分じゃないし、  
用もないのに会いたくはないからね

「ッ…！ 別にアンタに言われなくても…！」

相も変わらず君の反応は面白いねえ」

残念ながら今は気分が乗らないけど

「じゃ、さつさと消えてくれないか？  
いや、消える。目障り」

「あんたが消える！ この屑が！」

なんてオリジナルテイのない台詞を…

「浪都なみのはなににも変わらないわね、五年前と」

「いや、僕はこれでもかなり変わったつもりだぜ？

その証拠にマイナスさが増していないかい？ いや、  
”狂った”って言った方が正しいかな？ あはは！”

ニコニコと笑いながら僕はそう告げる

僕のデフォルトの表情はニコニコだからね

「…あんたホント、どうしちゃったの…？」

悲しそうな顔を僕に向ける長瀬

そんな顔をして僕も僕は困るんだけど？

「なにが？」

「昔はあんなに優しくかったのに…」

僕の黒歴史を掘り返さないでくれるかな？  
そんな自分はもう捨てたんだけど

「なら君に一つ良いことを教えてあげるよ。」

人は変わるぜ？」

それだけ告げて、どこか別の場所へと向かう

途中でちょっとだけ泣いていたのが最高だったなあ…

悲しませたりするのってどうしてここまで楽しいんだろ？

でも、どこか人気のないところってあるのかな？

うーん…

よし！ 屋上に行こう！

### 三問 屑と代表とストーカー（笑）（後書き）

いかがでしたか？

最後の方は過去話のフラグ。回収するはまだまだです

しかし、この小説はなにがしたいのかが分からない…

主人公も中途半端に外道だし…なにがなんだか分からなくなってきた  
ましたorz

うーん、試召戦争になったら改善できる…かも？

### 今回の質問

得意教科はなんですか？

ちなみに僕はタグでも書いた通り日本史と世界史、さらには  
英語では自信があります。それ以外はまったく駄目ですけど

（睡眠）

#### 四問 屑と戦争とDクラス（前書き）

忙しくなる前にいっぱい投稿したい作者です

原作キャラたちの口調があまり理解できない…

おかしいところがあつたら遠慮なく指摘してください

いや、お願いします

では、四問です



## 四問 屑と戦争とDクラス

屋上は確か…ここだね

ドアを開け、屋上へと踏み入れる

「そもそもなぜEクラスじゃなくてDクラスなんだ？」

「姫路が居るなら真っ向勝負でもEクラス程度は勝てるが、Dクラスはそうは行かない。初戦は派手に景気良く勝てばクラスに士気も上がるし、なによりDクラスにはAクラス攻略の要素がある」

屋上には既に代表とその他のクラスメイト達が占領していた

うーん、これはちょっとタイミングが拙かったかな？

僕は屋上から出ようと再びドアを開けようとする

「待て仲野宮」

なぜか代表に呼び止められる

その声に全員がこちらに視線を移す

「…僕はただお弁当を食べるために人気の無いところを

探していただけで、決して君達の邪魔をするためではない」

「んなことはどうでも良い。とりあえず  
こっちへ来い」

言われるがままに代表グループの下へ向かう

数人が複雑な顔をしていたけど、大丈夫なのか？

まあ罵声が無いだけマシだね

「なんだ？」

「お前の部隊編成について決めたいんだが、  
なにか得意科目はあるか？」

「僕はテストを受けてないからまだ分からないよ。  
でも、強いて言うなら得にないかな」

基本勉強はしないからね

「そういえばお前は0点だったな…なら  
戦争が始まったら姫路と回復試験を受けろ。  
そこで点数を補給したら直ぐに戦線に向かってもらう」

はあ、やっぱり気が向かないな…

「りょーかい。ま、戦争は嫌い  
だけど真面目にやろうか。精々僕が  
来るまで瞬殺されないようにね」

「俺達を嘗めるなよ。ま、てめえなんか  
居ても居なくてもどうでも良いような屑なんだがな」

代表は僕のことを毛嫌いするんだね

懸命な考えだよ

「ちょ、坂本！　そこまで言う必要は……」

同じく赤毛の女子生徒が言う

彼女は僕のことを知らないのか？

「代表の対応は合っているよ。基本、僕に  
はなにを言っても良いし、僕も気にしないよ。  
慣れって凄いんだね」

最初の辺はかなりきつかったけどね

傷付いたりもしたけど、僕も成長したものだよ

マイナスの方向にだけど

「では、ご機嫌よー！　戦争頑張ってねー！　あはは！」

僕って笑ってばかりだね。面白いかったり馬鹿にする時  
しか笑わないけど

「あ、待ってください！」

でも、桜色の髪の子生徒に止められる

桜色って珍しいね

「なんだ？」

「あの、私、皆さんにお弁当を作ることに  
なつたんですけど、良かったら一緒にどうですか？」

…この子頭は大丈夫かい？ 病院に行った方が良いんじゃないのか  
な？

「君は病院に行った方が良いよ。僕を誘うなんて  
火星よりありえないことだから」

「失礼な！ 火星人は居るぞ！」

さつき生贄にされた吉田くんに抗議される

うん、君が生贄にされたのも頷けるよ

「吉田くんは本当の馬鹿だね。ここまで  
馬鹿なのは珍しいよ。大学の生物学の研究対象  
にでもなれば良いんじゃないのかな？」

「酷い！ 仲野宮くんも僕のことを  
馬鹿にするのか！？ 雄二と秀吉もなに  
”名案だ！” って顔をしてるの！？ それと  
僕の名前は吉田じゃなくて吉井だからね！？」

「俺も仲野宮の意見に賛成するとは思わなかったな」

「賛成しちゃ駄目だから!？」

「ま、そんなことよりお弁当の件なんだけど」

「無視か!？ 僕の抗議は全て無視なのか!？」

五月蠅いなあ…でも反応は上々、弄りがいのある人だね

「お断りさせてもらうよ。僕みたいな下等生物よりもっと良い人にお弁当を作りなよ。その方が食材のためにもなるしね」

丁寧にする。それでも僕は断る時は丁寧だからね

「…屑野郎が丁寧に断るだと？ なにを企んでいる？」

「雄二、毎回仲野宮が行動を起こすたびに疑うのは悪いと思うのじゃが…」

それこそが自然の摂理なんだよ、木下…さん？ くん？

ややこしいね

「なにも企んじやいないさ。それじゃあ、戦場で会おうか」

僕は屋上を後にする

うーん、しかし、なぜ行く所に誰か居るんだろう？

僕は磁石かなにかなのか？

「皆さん、こんにち…」

『総員、狙え！』

「ワオ」

教室の中に入るや否や、無数のカッターナイフが僕に向けて投げられる。

それを教室の扉を閉めて冷静に回避する

僕がなにかしたか？

「まったく、温かい挨拶だね。僕がなにかしたかい？」

『惚けるな！ 仲野宮浪都、既に調べはついている！

貴様は昼休みの時間、女子生徒を泣かせたそうではないか！

それは許せぬ行為だ！ よって異端審問会は貴様を処刑する！

須川会長、交戦許可を！』

ああ、あの長瀬との会話ね

どうしてほんの数分前のことを調べられるんだ？

『戦闘を許可する！ 総員、仲野宮を  
冥府へと送ってやれ！』

謎の覆面集団、もとい異端審問会、いたんしんもんかい通称FFF団が  
僕にカッターナイフを向けて突っ込んでくる

君達は黒人迫害集団のKKK団の真似か？

（数分後）

『貴様……これでは終わらんぞ』

『FFF団の真の恐ろしさは……これからだ……』

某三流悪役の台詞を吐き捨てると、最後の二人が地面に平伏す

うん、喧嘩を売る相手を間違えたね

伊達に柔道一級、そして合気道三級を取ってないよ

まだ初段は取れていないけど……高校生には難しいんじゃないのかな？

「お前：喧嘩強いんだな…」

教壇の前に立っている代表が引き攣った顔で言う

まあ、こんな貧弱体質のような見た目だからね

元々は少ない方だから、相手の力を利用したり  
体格の関係がない柔道や合気道を習っているんだよ

父親の影響もあつたけど

「父親が警察官だったからね。父さんに  
憧れて習い始めたんだよ」

「まあ、それより、お前は回復試験を受けて来い。  
姫路はもう行ったぞ」

あ、そういえばそうだったね



視点Ⅰ 姫路瑞希

これが回復試験…少々難しいですが、問題ありません  
早く終わらせて吉井くん達を助けないと

「すみませーん、遅れましたー」

「仲野宮くん、開始から既に五分も経っていますよ？  
早く席に着くように」

仲野宮くんが到着したみたいです

私の隣に仲野宮くんが座り、テストを受け取る

「うーん…」

しばらくテストを睨みながら、鉛筆を手でぐるぐると  
回しています。手が器用なんですね…

仲野宮くんが到着してから十分が経過しました

私も次々と問題を解いていきますが、仲野宮くんは  
ずっとテストを睨んだままです

「…ああ、暇だね。しょうがないね、テストやろっか」

開始からもう十五分も経ってますよ！？　今更テストを始めるなんて…

鉛筆を手に持ち、問題を解き始めます

最初の辺りは簡単なのか、スラスラと書き入れていっています

開始からさらに十分、問題も難しくなってきました

でも、仲野宮くんはペースを崩さずにスラスラと問題を解いている

私でも少しは考えてから問題を解くのに…凄いですね

相変わらずにニコニコ顔でテストを受けています

…なんでそんなに笑ってられるんでしょうか

仲野宮くんは皆から”屑”と呼ばれているのに、いつも笑顔で居ます

あんなに多くの罵声を浴びているのに…

思わず鉛筆を止めてしまう

…聞いても良いんでしょうか？

「あ、あの…」

「ん？ なんだ？」

「な、仲野宮くんは、なぜいつも笑っているんですか？」

「と言いますと？」

「その、いつも皆さんから怒られたりしているのに、なぜいつも笑っていられるんですか？」

そう言うのと、にっこりと私に笑ってくれました

「君は純粹だねえ、うん。そんな君にドロドロに腐った僕のことを教えてあげよう。」

僕は小さい時からこう呼ばれてきたんだ。罵声なんて日常だし、もうその時から慣れていたからね。

確かに最初の方は辛かったよ？ 何度も死にたいって思ったしね。実際に自殺しようとしたこともあるよ？

ほら、その証拠に僕の手首に切り傷があるだろ？」

「ひっ…！」

仲野宮くんが袖を捲り上げると、手首には痛々しい傷跡がありました

本当に自殺しようとして…

「でも、今となったらもう慣れたよ。ちなみに僕はニコニコとしてる訳じゃなくて、他人を見てると自然とこうなるんだよ。頭が狂ってるって僕は自覚してるしね。知ってる？ 頭が狂っている人は狂っているほど普通の人と見分けがつかないんだよ？ 僕は雰囲気が語っているらしいけど」

次々と自分のことを語ってくれる仲野宮くん

彼にも事情があるんですね…

「でも、こんな僕と違って君は純粹だよ。羨ましいほどにね。そんな僕からのアドバイスだよ。僕には関わらない方がいいよ。自分の身のためにもね。でも、純粹な君を見ていると本当に羨ましくなるよ。僕ってまだ幸せになりたいんじゃないのかな？」

それを告げると、仲野宮くんはテストに戻りました

…本人が言つと説得力があります

それより、早くテストをしないと！

吉井くんを助けないと…

視点― 仲野宮浪都

いやぁ、自分のことを話したのは初めてだよ

でも、姫路さんは本当に純粹だねえ

僕の話全部信じていたよ

ぶっちゃけると彼女のことなんて  
まったく羨ましくもないしね

どちらかと言うと彼女みたいな子は大嫌いだよ

人間の汚さをなにも理解していないような子はね

あの話なんて嘘が八割で真実が二割だよ

確かに僕は罵声には慣れているし自殺しよう  
としたこともあるよ

でも、幸せになろうなんて思っちゃいないし、  
彼女のことは微塵も羨ましいとは思わない

嘘を簡単に信じるなんて、純粹な子は本当に  
利用し易いねえ…これで姫路さんがこのことを

代表に言ったらちよつとだけ高感度が上がるかもしれないし、戦争への干渉も減らしてくれるはず。

「そこまで！ 回復試験は以上をもって終わります」

どうやら終わったみたいだね

姫路さんの解答用紙を見るとかなり埋まっていた

さすがは学年次席、凄いねえ

採点している先生も凄く早いけど

「貴方の現代国語の点数は… 339点です」

ワオ、高いね

三百点台なんて凄いね

「はい、ありがとうございます」

礼儀正しく一例して戦線へと向かっていった

仲間思いだねえ

「仲野宮くんの現代国語の点数は… あれ？」

驚いたというよりも戸惑いの表情を浮かべる先生

「どうかしましたか？」

「いや、ちょっと待ってください。もう一度採点し直します」

再びものすごい勢いでテストを採点していく

「…仲野宮くん、君の現代国語のテストは 点です」

うーん、やはりあまり良い出来ではないね

僕は現代国語は得意ってわけではないからね

「ありがとうーございました。じゃ、さよなら」

そのまま歩いて教室を出る

出来るだけ戦争はしたくないからね

最後に先生の啞然とした表情が印象的だったなあ

「そこまで！ 勝者、Fクラス！」

『うおおお！……！……！』

僕が着いた時はもう既に終わっていた

Fクラスの勝利という形でね

凄いな、二格も上のクラスに勝つなんて

僕は教室に戻って帰りの支度をする

「なあんだ、僕の出番なんて無いじゃないか」

それだけ言い残し、教室を後にする

『仲野宮浪都

《現代国語 352点》  
』



#### 四問 屑と戦争とDクラス（後書き）

いかがでしたか？

今回は主人公がちょっと温和？です

最後の辺は心の声が屑になっていましたけど

誤解生まないために言いますけど作者は明久と瑞希の関係は守ります。雄二と翔子の関係も守ります

#### 今回の質問

格闘技はなにかやっていますか？

ちなみに僕は以前言った通り空手を十年ぐらい続けています

今だに二級ですが…

（睡眠）

## 五問 屑と狙撃と異端審問会（前書き）

うーん、最近主人公が丸くなっている気がします

Bクラス戦では屑っぷりを全開にさせていただきます

後、今話ではチラッとだけですが拳銃の話が出てきます

その様な話を好まない方はスキップしてもかまいません。

物語はあまり進まないのです。多分拳銃の説明が出るのは今回だけです

では、五問です

## 五問 屑と狙撃と異端審問会

試験召喚戦争も僕が参加するまでもなく終わったので  
そのまま帰路に付く

良かったよ、僕は戦わなくても済んで

でも、久しぶりに真面目にテストを受けたよ

出来はイマイチだったけど

「Dクラス戦ご苦労だったわね」

君は大概は暇人なんだね

「また会ったね、ストーカーさん。またなにか用かい？」

「ストーカーじゃないわよ！」

「今の君には説得力が皆無なんだけどね、長瀬」

行く場所全て追跡されてる気分だよ

発信機なんかでも付けられてるのかな？

「ただ今年初めての戦争がどんなのか聞きたかっただけよ」

「Well, it's a long story actually. You see...」

「英語じゃ分からないわよ!」

言語の好き嫌いは良くないよ?

「B

...」

「ロシア語なんてもっと分からないわよ!」

「Perch? fate reclamis sulla lingua?」

「外国語はいい加減にして!」

あはは、反応はいつもいつも面白いなあ

ちなみに最初から順に訳してあげよう

《話せば長くなるが、実は...》

《戦争が始まると...》

《なぜ言語でそんなに文句を言うんだ?》

「分かったよ。日本語で良いんでしょ?

それともロシア語が良い? もしくはフランス語や

スペイン語、オランダ語も…」

「もう日本語で良いから！　ここは日本でしょ！？  
それよりなんでそんなに外国語を知ってるのよ！」

「自知識と好奇心」

「便利な好奇心ね！」

そういえば島田さんってドイツ人だったね。また今度  
ドイツ語で会話してみようかな？

「ま、僕は戦争には参加していないからなにも分からなかったよ。  
ずっと回復試験を受けていたからね」

「あんたが回復試験？」

「うん、僕の点数は0点だったからね」

予想外の点数に呆れる長瀬

僕には戦争なんかする意思なんて皆無だからね

これを毎回続けていたらきつと一生戦争に出なくなる

「浪都、あんたはいつまでそんな学園生活をするつもり？」

「一生」

「あんたが」　　”　なんか付けても気持ち悪いだけよ」

「君が付ける方がもっと気持ち悪いね…」

「五月蠅い！」

ホント、なにしに僕に会ったろう？

「それより浪都、実は…あれ？ 浪都？」

『これより異端審問会を始める』

いつの間にか拉致されていました

まさに一瞬で長瀬から離されてロープでぐるぐる巻きにされました

『被告人、仲野宮浪都（以下、この者を”屑”と称す）は

今日の昼食時間の間にAクラス生徒、長瀬流歌を泣かせるとい  
男として許すまじ行為を働いたにも関わらず、登校時間に会話を  
強要したと調べはついている。皆みなの者、このような  
行動は許すべきだろうか？』

『否！ 否！ 否！』

『よつて屑はこれより死刑に処す。  
これに皆は異議はないな？』

『『異議なし！ 異端者には死を！ 血肉と悲鳴の制裁を！』』

駄目だこの人たち、完全に頭が狂っている

その証拠に全員が何処からか大鎌を取り出している

見た目も含めると完全に死神だね

「あ！ そういえば須川くんは確か昨日女の子に告白していたね」

その言葉を言った瞬間、全員の視線が中央のリーダー格へ向いた

「な、ちょっと待てよ！ それについては事実などない！」

声もいつも通りに戻ってる

『総員、須川を狙え！ 我々の血の制約に  
背いた須川など会長ではない！ 判決を下せ！』

『『我々全員、相違なし！ 須川に血肉と悲鳴の鉄槌を！』』

「横溝お前！」

簡単に仲間に見放される須川くん

あはは！ 敵を攪乱させるにはまずリーダー格を討つ。

戦闘においては鉄則だよ

僕は異端審問会が残っていたカッターナイフを使ってロープを切り、家へと向かう

「ただいまあゝ、って誰も居ないか」

無人の自室へ戻ると、何気なく言ってみた

誰も居ないのは分かってるけど

「あ、お帰り」

ん？ 今声が聞こえなかったか？

「……ここまで来るともう犯罪の領域だね。  
なにか用かい、長瀬？」

何故か長瀬は僕の部屋の直ぐ隣の部屋の前に立っていた

住居まで調べて…僕になにか復讐の計画でも立てているのか？



「別にあんたについていった訳じゃないわよ。ここが私の部屋なんだから」

…What?

「……なに？」

「だから、ここが私の部屋って言ったでしょ。ほら、ちゃんと名札だって入れてあるし」

言われるがままに名札を見ると、確かにそこには長瀬の名前が書かれていた

「…なにを企んでるの？」

「なにも企んでないわよ！ お父さんとお母さんが大きな仕事が入って、私はしばらく一人暮らしすることになっただけよ！」

でもせめて別のアパートに行って欲しかったなあ…

「お父さんもお母さんも知り合いのあんたの近くで住む方が安心するって言ったのよ。二人共今のあんたの現状も知らずにね」

今の僕を知ったら間違いなく拒否するだろうね

「はあ、別に君が僕の近くに存在しようがしまいが、僕には関係の無いことだからね。勝手に部屋に入ってきたら殺すからね？」

極上の笑みを浮かべてそう告げる

不法侵入なんて洒落になんないよ。なにも盗む物なんて  
まったくないけど

「それは私みたいな弱い女の子の台詞よ!」

「?? そんなのどこにも見当たらないけど?」

「ッ……!! さっさと部屋に戻れ!」

「高校生のヒステリー…笑えるね」

そう言うのと急いでドアを閉める

閉めた次の瞬間、ドアに大きな”ドン!”という物音が響いた

十中八九僕のドアに回し蹴りを放ったね

器物損傷で訴える損害賠償金を請求することだって出来ると知って  
るのかな?

《ワン!》

太郎が僕の所へトコトコとやってきた

はあ…やっぱり犬って最高だね…

なんていうか、凄く和ませてくれるんだよ

僕のマイナスさが全て洗い流される気分だよ

僕の味方は太郎だけ…

「みんな、お早」

『総員、狙え!』

「ワオ」

教室へ入ると、無数のカッターナイフを投げつけられる

それを冷静にドアを閉めて回避し、”ガガガ”とドアに無数の力  
ツターナイフ

が刺さる。貫通して当たりそうなぐらいの勢いはあるけど、さすが  
にそれはないよね？

毎度恒例の異端審問会とのやり取り

「またまた温かい挨拶だね。今度はなにをしたっていうんだい？」

『惚けるな！ 仲野宮浪都！ 貴様、我々を欺くだけならまだし  
も、

Aクラス長瀬流歌の自宅に押しかけるなどという行動を起こした！

これは

最早死刑では軽すぎる罰だ！ 貴様には生きたまま永遠の苦痛を与  
える！』

ああ、あのことね。いや、それ以前に君達を欺いたことを

まだ根に持っているのか？ 得に須川会長くん、君からの殺気  
が一番強いよ？

『総員、武器を持て！ 戦の時だアア！！！！』

『うオオオ！！！！！！』

「皆、ちょっと待ってくれ！」

僕は今まさに僕に襲い掛かろうとしている集団を呼び止める

『なんだ？ 今更命乞いか？ 悪いが我々は弁解などは

受け付けない！ 学園の秩序を守るため、我々は非情でなければならぬ！』

「本音は？」

『女子に話しかけられるのが羨ましい！』

「うん、やっぱりね」

恐ろしいまでの嫉妬だ

「なら君達に情報を教えてあげよう！

実は、このクラスには僕以上の異端者が存在している！」

『なに？』

「その人物は、Fクラスの観察処分者、吉井明久くんだ！」

FFF団全員の殺気が一人の教徒へと集まる

その生徒も異端審問会に入っていたんだ！

「え？ ちょっと待って！ 僕はなにもしないよ！」

「惚けるのは良くないよ？

皆聞いてくれ！ この吉井明久は、我がクラスの最高成績者でもあり唯一の女子でもある姫路瑞希さんに、手作りのお弁当を作ってもらっているんだ！」



”異・端・審・問・会”

「ちょ、ちょっと待ってよ！ 確かに姫路さんは僕にお弁当を作ってくれるって言ったけど、後半の事は全部嘘だからね！？ 仲野宮くんの吐いた嘘だから！」

だが、異端審問会のメンバーは吉田くんの抗議に聞く耳も持たない

「吉田くん、僕は逃げることを勧める」

「全部貴様の所為だからだろ！ それよりなんでさつき嘘を言う時に限って僕の名前を正しく言うのさ！？」

『吉井イ明久ア！！！！！！』

「わあああ！！！！！！！！」

吉田くんは泣きながら全力疾走で走っていった

さて、僕もさっそく仕事に取り掛かるうか…

「ちょっと待ちなさい…」

持ってきた野球バグを持って教室を出ようとすると、突然もの凄い握力で肩を掴まれる

思わず振り返ると、そこには怪しげなオーラを纏った…誰だっけ？

「悪いけど、誰だっけ？」

「島田よ！ 島田美波！」

島田…ああ！ あのドイツ帰りの子か！

「それより僕になにか用かい？ いつも君なら吉田くんを抹殺するために出てるはずなんだけど」

「あんだ、吉井のことを話してる時、姫路がこのクラスで唯一の女子って言わなかった？」

「確かに言ったけど？ なにか不満でも？」

そう言つと、握力が段々と増してきて、ついには肩を握りつぶすのか？と思わせるぐらいまでの力になっていた

「ウチだって立派な女の子よ！」

あ、そういえば一応そうだったね

「はいはい、分かったから」

「ッ…!!」

益々怒ってきた



うーん、いい加減にしてくれないかな？

「Kannst du mich gehen lassen?」  
離してくれないか?」

「え? Sie kennen deutsch sprechen?  
n? (ドイツ語が話せるの?)」

「Ja, ich kenne eine Menge verschiedener  
Deutsch ist nur einer von ihnen  
n. (うん、僕はいっぱい

外国語が話せるからね。ドイツ語はその一つだよ)」

「へえ、あんた、ドイツ語が話せるんだ?」

「意外だろ?他にもスペイン語、アラビア語、ベトナム語、  
英語、ロシア語、ラテン語、後は…あ、フランス語も話せるよ」

色んな言語を覚えたからね」

だって、新しい言葉を覚えるのは楽しいんだもん

「そ、そう…凄いのね…」

「屑だと友達なんて勿論居ないからね。暇を持て余しているから  
色んなことが出来るんだよ」

複雑な顔をする島田さん

なにか拙いことでも言ったのかな？

「じゃあ、失礼するよ。僕にはすることがあってね。  
Auf Wiedersehen」(さよなら)」

外国語を話せる知り合いって良いよね」

今まで試す相手が居なかったから

視点― 吉井明久

まったく…僕は仲野宮くんになにをしたっていうんだよ…

《カラン》

ん？ なんだ？

一先ず校舎の前のグラウンドに立っていたら、突然なにかが目の前に落ちた

紙もついてるけど…

「無線機…?」

とりあえず取って耳にあてる

「…もしもし?」

『やあ吉田くん！ 逃亡を頑張っているかい?』

「この声は…仲野宮くん!」

僕をこんな状況に陥れた張本人!

『正解! さすがは吉田くん』

「僕は吉田じゃなくて吉井だから。間違えないでくれるかな?」

『それより、そんなこと言っても良いの?』

?? どういう意味で…

《ガン!》

「わッ!」

突然、大きな銃声のような音と共に足元の地面が少し抉れた

なにか弾のような物が埋め込んでいるけど…

『ちッ、外した』

「今のは仲野宮君の仕業なのか!？」

『そうだよ。よく避けたね』

飛んできた方向を見ると、

屋上に異端審問会の服を着た人影が見える

「まさか君も異端審問会に入ったのか!？」

『まさかあゝ！　僕はただFFF団と取引をしたただだよ』

取引？

「取引？」

『そう。君を仕留めるのを手伝ったら二度と襲わないと約束してくれたからね』

FFF団は手段を選ばないんだね

『ちなみに僕は今屋上で君のことを狙撃しているんだよ。』

使用銃はレミントンM40A3という軍用狙撃銃で、実弾が当たれば貫通すると同時に体が決り取られるよ？　まあ今はゴム弾しかないけど』

「そんな殺戮能力の高い銃なんて使うな！　いや、それ以前にここは日本だよ!？　銃刀法違反という言葉を知っているか!？」

『そんな細かいことは気にしちゃ駄目だよ。これは  
ブラックマ…ゲフンゲフン、特別なルートを使って手に入れたんだ』

「今絶対にブラックマーケットって言おうとしたよね！？  
なんでそんな裏社会の御用達みたいになってるの！？それに  
君って戦争が嫌いじゃなかったの！？」

『冗談だよ冗談。僕の親戚は軍人でね、

偶に撃たせてもらったり借りたりすることが出来るんだよ。  
今は僕の家保管してあるけどね。ちなみに使用許可書も  
所持許可書も持つてるよ？それに、銃を撃つ技術があるのなら  
例えどんな馬鹿げたことでも活用してみたくなるだろう？』

絶対正当な手段は使っていないね！

それに、そんな技術って日本じゃまったく必要ないから！

『それより、大人しく撃たれてくれるか？』

「撃たれてたまるか！」

急いで木の陰に隠れる

『あああ、実弾ならその木ごと貫通させて君を  
抹殺できるけど、残念なことにゴム弾だからね。  
僕の役目はこれでおしまいだよ。代わりに…』

すると、無線越しでカチャカチャと音が聞こえる

なにをするつもりで…

『あ、もしもし？ 須川くん？ 吉井くんを

発見したよ。場所はE地点5の3、その木陰に

隠れて狙撃できないんだ。至急歩兵部隊を向かわせてくれ。

ちなみに僕は行動の素早さが長所のD部隊を推薦するよ。

ターゲットが逃亡する可能性があるからね。うん…分かった。

僕はもう帰っても良いんだね？ りょーかい、では、良い狩りを』

…仲野宮アア！！ 貴様はやっぱり屑だ！！

それにこういう時だけ正しく名前を言うな！！

『今の会話は全て聞こえたでしょ？ ほら、逃げて逃げて！

あははは！ では、さようなら〜！』

その後、無線がブチっと消えた

そして、それに続くように数多くの足跡が聞こえる

………

「仲野宮アア！！！！ 貴様はいつか雄二と共に僕が殺す！！！！」

心の叫びを叫びながら僕は走り出す

視点― 仲野宮浪都

あはは！ うん、最高に面白かったよ！

久しぶりに銃も使ったしね。ちょっと腕が鈍ってたよ

しかし、叔父さん愛用の狙撃銃がこんなことで役に立つとはね

僕の叔父さんは元軍人で狙撃が得意だったらしいからね

その当時の愛用していた銃がこの銃らしいんだ

出来れば撃ちたくないけど

やっぱり銃は見るのが嫌いだ

それなのに僕の召喚獣には思いつきり銃が付いてるしね

装備を変えられないかな？

《仲野宮浪都くん、仲野宮浪都くん、至急学園長室まで  
お越しください。繰り返します、仲野宮くん…》

突然の校内の放送

僕が学園長に呼び出される？ 僕はまだなにも

していないつもりだけど…

うーん、どっつてよっ

よし、なら学園長も苛めちゃえ！



## 五問 屑と狙撃と異端審問会（後書き）

いかがでしたか？

今回は異端審問会といっぱい絡ませてみました

須川や横溝などのFFF団メンバーは大好きなんで

M40A3とはアメリカ海兵隊がレミントンM700をベースに改良を施して開発したボルトアクション式スナイパーライフルです。使用弾丸は7.62mm Nato弾で、スコープはS&D製のを使っています。

マイナーな改良を繰り返していくたびにM40A1、M40A2、M40A3、M40A5と変わっていきました。

軍用銃共通ですが当たると貫通ではなく吹っ飛びます。

例えば腕に当たるとします。ドラマ等では腕に穴が開いたりするだけで済みますが、実際は腕自体が吹っ飛びます。軍用銃とは殺戮に特化した銃なので、殺戮力を追求した故に当たるとヤヴァイことになります

とまあ、僕の自知識ではここまでです

こういう話が嫌いな方、申し訳ございませんでした

\* 作者はミリオタではなく歴史が好きなだけで、本を読んでいる時に出るちよっとした解説を記憶しただけです

## 今回の質問

苦手科目はなんですか？

ちなみに僕はダントツで数学と物理が苦手です。

根っからの歴史少年なんで

く睡眠く

## 屑のプロフィール（前書き）

なんとなくやってみました

ネタバレ防止のためにあまり明らかにしていませんが…

では、プロフィールです

\*ネタバレ注意！

\*八月二十九日 情報を追加しました

## 屑のプロフィール

名前 / なかのみやろうと  
仲野宮浪都

あだ名 / 屑 Or 人類の屑 Or 人類最低

誕生日 / 六月二十三日

年齢 / 16歳

家族構成 / 父親・母親・姉・自分・妹

父親 : 仲野宮 零都

母親 : 仲野宮 静音

姉 : 琴吹 雪音

妹 : 琴吹 彩音

得意科目 / 日本史、世界史、現代社会、古典、英語

苦手科目 / 数学、物理、化学、現代国語、保健体育

召喚獣 / 機動隊の装備と火器に機動隊の盾

見た目は普通の日本警察の機動隊だが盾を片手に

短機関銃をもっている。なお、銃は点数によって変わる

腕輪 / 超小型式爆弾

点数を二十点使用する度に一つ出現させられる。

表面には粘着性の塗装を施されているので相手にくっ付けられる。あまりにもサイズが小さすぎる

ためくつ付いていることすら相手は気付かない。

一度で多くの点数を使用するとその分爆弾を出現させられる。”爆破”と言うことで召喚獣がスイッチを取り出し、それを押させて起爆させる

特技／ ペン回し

好きなことOr物／ 大の愛犬家

嫌いなことOr物／ 猫

その他／ この小説の主人公

文月学園2年Fクラスに所属。現在はFクラス最下位の点数を誇っている。

性格は一緒に居れば一目瞭然、根っからの屑である。浪都を知っている人曰く、勉強もせず、愛想もない、無感情で冷血。他人の不幸を誰よりも喜び、嘲笑い、好く、歪んだ人格。そしてなにより、近寄る者を凍てつかせるかの如く冷たいそのオーラと視線。故に”屑”

本人もこの呼び方を否定することはなく、逆に共感している。昔からのあだ名で罵声を浴びさせられてきたせいか今ではまったく動じることはなくなった。幼い頃はかなり傷つき、自殺までしようとしたらしい。現在でも手首にはその痛々しい傷跡が残っている

そして、屑であると同時に根っからの平和主義者。

戦争が大嫌いで、この学園の醍醐味とも言える  
試験召喚戦争でも現在は未だに不干涉である。

京都府出身で心の底から怒りを感じると京都弁になる癖がある

父親は警察官だったらしいが、その所属や

階級などはまだ不明。そのせいか柔道や合気道  
などの心得があり、FFF団を僅か十五分で制圧  
するほどの実力。

Fクラスからは一部を除き全員に嫌われている

柔道：一級

合気道：三級

現在は愛犬の太郎と一人暮らし中

もう一匹犬を飼うか悩んでいる

父親は警視庁機動隊隊員であり、  
警視庁爆発物処理班班長の警察官、  
仲野宮零なかのみや れいと都警部

## 屑のプロフィール（後書き）

いかがでしたか？

プロフィールなのであまり言う事はありません

しかし、嫌いなものは猫とは…（笑）

～睡眠～

## 六問 屑とババアとBクラス（前書き）

今回はBクラス戦です

序盤はアニメ中心ですが、協定違反に辺りから数少ない漫画記憶になります。なにかおかしいことがあったら言ってください

やっと主人公の召喚獣が出せる…

プロフィールに追加しておきます

では、六話です



## 六問 屑とババアとBクラス

「ご機嫌よう、学園長さん！ あ、間違えました。  
ご機嫌よう！ ババアさん！」

ノックせずに学園長室の扉を開け、礼儀正しく挨拶をする

「訂正しなくても合っていたよ、クソガキ」

僕を呼び出した一応はこの学園の学園長の籐堂カヲルとうどう

まあ学園の皆からはババアって呼ばれてると吉田くんから聞いたけど

「そう呼ばれているという話を聞いたので、  
いけないとは分かっていましたが呼んでみました」

「お前さんが素直に罪悪感なんて覚えるか。  
呼び方なんてどうでもいいさ。それより、アンタから  
気になることがあってね」

僕から？

「僕の好きな異性のタイプですか？ それは残念ながら……」

「誰がそんなこと聞か！ まったく、お前さんはやっぱり  
あのガキ共とは一味違うね」

「お褒めにお預かり光栄です」

「誰も褒めちゃいないよ!」

違うんだ…

「はぁ…とにかく、これを見な」

一枚の紙を渡される

「ラブレターですか? 気持ちは嬉しいですが…」

「違うって言ってるだろうが! いい加減その子供染みた挑発は止めな!」

あはは! もうおちよくるのは止めようか。いい加減飽きてきたし

「へいへい。これは…グラフですね。なんですか、これ?」

幾つもの数字が書かれ、それを一つ一つ線で繋がれたグラフを渡された

「ここ数年のこの学園の平均成績さ。見ての通りかなり高いだろう?」

自画自賛、格好悪いね

「自画自賛は良くないですよ、学園長。あ、すみません、また間違えました。ババア長さん」

「合ってるって言うてるだろうが！とにかく、次はこれを見てくれ」

もう一枚の紙を引き出しから出し、僕に見せてくれる

さっきと同じグラフだけど、線がかなり低い位置にあるね

「これは？」

「お前さんのここ数年の成績のグラフさ。」

見ての通りかなり低い、学力最低レベルの馬鹿さ」

そんなことは百も承知だよ

「で、それがどうしたんですか？まさか僕を苛めるために態々呼び出したり…」

「そんなガキみたいなことをあたしがするか？お前さんには説明をしてもらいたいんだ、このテストの」

最後にもう一枚紙を出し、僕に手渡す

それは、Dクラス戦の時に僕が受けた現代国語のテストだった

「これになにか？」

「いや、別にこれに問題はない。こんな高得点は嬉しいよ。でも、こんな高得点がお前さんから出てきたのが、疑問に思っているんだよ」

確かに、ここ数年僕は一切真面目にテストを受けていないからね

毎回平均点が十点以下、大事な試験の時はさすがにギリギリ合格点に達しているけど

「それに、このテストでお前さんは一度もミスを犯していない、答えが全て完璧だったよ。異常なまでにね」

異常とは人聞きの悪い、僕はごく普通の屑ですよ

「それがなにか？」

「まだ惚けるつもりかい？ お前さん、本当の所、どうなんだ？」

「どう、と言いますと？」

「アンタは自分の学力を、いつまで偽っているつもりだい？」

なんだ、それだけか

「そんなの愚問ですよ、学園長」

「……どういう意味だい？」

「僕が真面目に勉強するなど愚の骨頂、決してありえない話ですか」

それこそが僕のポリシー

真面目に勉強はしない。絶対にしない

僕だつて一時期は猛勉強してたさ。でも、  
真面目に受けたつて異能者扱いされるのが関の山

周りの視線が怪奇の視線に変わるのははっきりと言って  
鬱陶しいんだよ。罵声は慣れても怪奇はなれていないからね

「その方針をどうにかできないのかねえ……」

「寝言は寝てから言ってください。話はそれだけですか？  
それだけですよねえ。じゃ、この後は異端審問会に任務報告が  
あるので帰りますね」

僕は部屋から出ようと、ドアを開ける

「ちょっと待ちな」

まだなにかあるんですか？

「まだなんか用ですか？」

「アンタ、零都<sup>れいと</sup>さんのことをどう思っているんだ？」

……このクソババア、なにを訊いてるんだ？

「父親。それ以上でもそれ以下でもありませんね。  
昔は憧れや目標などというくだらない事も考えていましたが、  
今となつては僕の人生での最大の黒歴史ですよ」

そう告げて、部屋を後にする

でも、父さんの名前なんて久しぶりに聞いたよ

「これより、Bクラスとの試召戦争を始める！」

『うオオオオオ！！！！』

始まったBクラスとの試召戦争。それと同時に  
一斉に教室から出るFクラス前衛部隊

僕もそれに続くように教室を出る

僕は今回はテストを受けたので、最前線での初陣部隊に組み込まれた  
総合点数はFクラス最低の307点。これだとBクラス相手じゃ  
一撃で終わるね

戦争での最前線での初陣部隊は幾つかある

アメリカ軍は戦場にまずアメリカ陸軍特殊部隊の”レンジャーズ”を送り込む。”レンジャーズ”は戦場ではどの部隊よりも先に出向き、彼等の活躍で優位にも不利にもことを進めることができる。その役目はかなり重要で、陸軍の間ではエリート中のエリートである。モットーは『Rangers Lead the Way』。(レンジャーズが道を切り開く)

そんなエリート特殊部隊な訳でもない僕は、なぜか初陣部隊に組み込まれた。一緒に居るのは吉田くん率いるFクラス数名

はあ、やる気が出ないな

「サモン…」

やる気のない発動キーを言うと、僕の前に一体の小さい生物が現れる  
姿は警察の機動部隊の装備に、機動部隊御用達の防弾盾

防弾ヘルメットも被っていて見た目は殆ど一般の機動部隊と変わらない

ただ一つ違うのは、盾と一緒に短機関銃を持っていることだけだ  
盾越しから撃つつもりなんだろう

でも、銃なんて使う召喚獣って珍しいからなんの役にも立たないん

じゃないか？

しかも、格好に似合わず点数だけ見ると弱いしね

「よし、開戦だア！！」

『うオオオ！！！！』

吉田くんの号令と共に、前線部隊が一斉に駆け出す

『フン、返り討ちにしてやれ！！』

それと同じく、Bクラスの連中も召喚獣を出していく

はあ、僕もやるか

すると、一人の生徒が僕の前に止まった

『Bクラス山浦、お前に数学勝負を申し込む！ サモン！』

数学か…僕はあまり得意ではないね

《Bクラス山浦雅太 数学198点》

《Fクラス仲野宮浪都 数学26点》

『なんだこの点数？ Fクラスの連中よりも低いんじゃないか？』



「逆に關心するだろう？」

『ヘッ、とんだ力モだぜ！ 行け！』

西洋風の鎧と剣を持った召喚獣が僕の召喚獣

に走り出す。うーん、かなりデフォルトされた召喚獣だね

所詮はモブキャラって感じかな？

剣を振り下ろしたが、それを盾で防ぐ

しかし、六倍ぐらいの点数差のせいか吹き飛ばされ、  
僅かながら点数を削られる

その僅かが僕の召喚獣には致命傷なんだけどね

《仲野宮浪都 4点》

鬼の補修は流石に嫌だな。また西村先生に  
学校での態度で口出しされるのも嫌だしね

『ヘッ、やっぱり雑魚じゃねえか』

「それってかなり悪役っぽい台詞だよ？ しかも、  
それってなんか正義の味方がバーンって飛び出してきて  
僕を助ける、って展開のフラグみたいじゃないの？」

『なに言ってやがる…止めだ！』

もう一度剣を振り下ろそうとする

いやあ、流石に今回は相手が悪かったね

「皆良く聞け！」

???  
なんだ？

思わず相手の召喚獣も動きを止める

「Bクラス代表の根本には、ガールフレンドが居る！」

なに！？

「しかも相手は、Cクラス代表の小山友香さんだ！」

なにイ!!!???

「しかも、手作りのお弁当を作ってもらっているそうなんだ!!!」

なアにイ!!!!!!!!!!!!!!

これって今朝僕がやった技？のパクリだよな？

すると、一瞬にしてFクラス前線メンバーが黒マントと黒覆面を被り、

大鎌を持ち始めた

「ゆうさあんウ……」

異端審問会の覚醒だね

FFF団メンバー一人がさっきまで僕が相手にしていた人を含め  
三人のBクラスメンバーにヨロヨロと近づいていった

『よくも一人だけ良い思いをオウ！ お前等にイ、独り身の  
辛さが分かるかアゝ！』

召喚獣まで異端審問会の制服？になつてるよ？

『なんだこいつら！？ 危険だ！ 全力で防除しろ！』

だが、その召喚獣がヨロヨロと三人の召喚獣に近寄ると…爆発した  
！？

《Bクラス山浦雅太 - 10000点 0点》

《Bクラス麻井直子 - 10000点 0点》

《Bクラス緒方秋斗 - 10000点 0点》

《Fクラス福村幸平 自爆 0点》

ワオ、一万点の道連れダメージって凄いね

「戦局は傾いたぞ！ 突っ込め！！」

吉田くんの合図と共に、FFF団メンバー全員が突っ込んだ

一人が爆発する度にかなりの人数を道連れにしてるね

「さて、この隙に僕は回復試験でも受けようか」

西村さんの補修は嫌だから、今度は全力でね

「これは…どういう状況だい？」

僕がFクラスの教室に戻ると、中はボロボロになっていた

鉛筆は折られ、消しゴムなどはボロボロになっている

「仲野宮か。俺がBクラスと協定を結びに行っている間にやられた」

Bクラス代表、かなり良い性格してるね

うん、僕こつゆうことが出来る人って好きだよ？

無論僕は異性愛者だ。僕は人格的に気に入ったよ、Bクラス代表を

まさに現代の人間の汚さを表したような人だ

「これじゃあ補給もままならん。お前も補給を受けに来たのか？」

「ああ。でも、僕は心配無いよ」

ポケットから鉛筆一式と消しゴムを出す

「それ…」

「僕って勉強しないだろ？ だから筆箱とかは必要ないからポケットで持ち歩いてるんだよ」

そんなの買ってもお金の無駄だしね

「そうか。ならさっさと受けてとつとと

前線に戻ってこい。ただでさせてめえは役立たずなんだ」

言ってくれるね、代表

でも、否定はしないよ

「じゃ、お言葉に甘えて。先生！ 回復試験を

お願いしても良いですか？」

「教科は？」

別になんでも良いんだけどねえ

「じゃあ、比較的不得意な数学でお願いしまーす」

「なんで不得意な科目を態々…で、では、回復試験をします」

僕は皆より一足先に、回復試験を受けた

「うお、なんだ？」

僕がBクラスの戦地に行こうとすると、なぜかCクラス前で人だかりが出来ていた

ツチノコでも出たのか？

近づいてみる

すると…

「ちょっと吉井！　どうにかしなさいよ！」

「どうにかって言ったって、僕に四人も相手しろと!？」

猛スピードで吉田ちゃんと島田さんがこちらに向かって走ってくる

その後ろにはBクラス生徒四名

「あ！ 仲野宮！」

島田さんが僕に気付いたのか、吉田くんと一緒に僕の後ろに隠れるように立つ

『よし、追いつめたぞ！ さっさとこいつら片付けて坂本の首を取れ！』

うわ、なんという小物台詞

「なんで僕の後ろに？」

「補修は嫌なんだよ！ 鉄人の補修はどうしても嫌なんだ！」

「僕は君達がどうなろうと知ったことじゃないんだけどね」

この前は気持ち悪いとも言われた サイン

「仲野宮くんはやっぱり屑だ！」

「ありがとう、最高の褒め言葉だよ」

「褒めてない！」

あああ。まあいいや

「しょうがないね。今回は特別だよ？」

僕は正面にまで迫って来ている四人に向き合う

「ねえねえ、僕たちみたいな雑魚は無視して代表を追った方が  
良いんじゃないのか？」

『それはお前等を追っている途中で気付いたんだが、ここまで来た  
なら倒したいんだよ』

「じゃあ交渉決裂つと。実力行使だね。  
Fクラス仲野宮浪都、君達四人に数学勝負を申し込むよ。サモン」

『ヘッ、Fクラス程度が強がるな！ サモン！』

それぞれの点数が表示されていく

《Bクラス長谷川和彦 215点》

《Bクラス谷口直人 178点》

《Bクラス中川次郎 161点》

《Bクラス内村修司 183点》

うん、中々の点数だね

得に最初のBクラスの人、二百点越えだよ？



数学が得意なのかな？

でも…

『『『『なッ！！！？？？』』』

「仲野宮くん…」

「嘘でしょ…」

僕には及ばないね

《Fクラス仲野宮浪都 417点》

吉田くん達も含めて全員が僕の点数に驚愕していた

「数学はちょっと苦手だね、あまり良い点数じゃないよ。」

まあいいや。君達を蹴り殺すには丁度良い点数だね」

召喚獣が短機関銃にマガジンを入れる

「論理的に君達全員を銃殺してあげるよ」

満面の笑みでそう告げる

## 六問 屑とババアとBクラス（後書き）

いかがでしたか？

最初の辺はアニメ、後半は漫画です

しかし、主人公の召喚獣が機動隊とは…

どのような装備が知りたいのであればWikiなどで調べてみてください

過去話のフラグをもう一度組み込んでみました

ちゃんと回収できるかどうか…

## 今回の質問

教師の一言でイラッと来たことはありますか？

僕は数え切れないほどありますね。殴りたいと思う時もあります

～睡眠～

## 七問 屑と戦争と戦争嫌い（前書き）

今回は重い話です

バカテスの雰囲気皆無です

好まない方はスキップしても構いません

あまりというかまったく進まないの

後、今回で連続投稿は終わりです。もう一方の小説と同じように、書きあがったら投稿する、という更新になります

では、七問です

## 七問 屑と戦争と戦争嫌い

「論理的に銃殺してあげるよ」

そう告げ、短機関銃の引き金へと召喚獣が手を掛ける

『ひ、怯むな！ 幾ら点数が高くても総合的には俺達の方が上だ！ 囲んで討つぞ！』

リーダー格の生徒の合図と共に、全員の召喚獣が僕の一体を囲み始める

多対一では良い作戦だね。それこそが多対一の利点なんだから

「もう作戦会議は済んだかい？ ま、どんな作戦を立てても君達みたいな雑魚が勝つことは永遠に無いんだけどね！ あはは！」

遠慮もなく引き金を引き、一人の召喚獣へ弾丸の嵐を与える

避けようとしてるけど、弾丸の銃口初速ってどれぐらいか分かってるの？

弾丸の速度は銃の種類によって違うけど、

今の僕の召喚獣が持っているのはH & a m p ; K M P 5 K  
という短機関銃で、銃口初速は400m/s

とても人間の反応が追いつける速度じゃないよ

案の定、命中率はフルオートで悪かったけど、かなりの数の弾がその生徒の召喚獣を蜂の巣にする

《Bクラス谷口直人 0点》

「戦死者は補修ウウ!!!」

何処からとも無く西村先生が現れ、さっき僕が倒した生徒を連行していく

『谷口！ クソ！』

これで残り三人だね

空になったマガジンを出し、別のを入れる

『とにかく動き回れ！ あれでも片手だ、そこまで命中率は良くないはずだ！ 動き回ってさえいれば当たることはない！』

うん、正解だよ

確かに片手で毎分800発も打ち出せるMP5Kだと当て難い。それに加えて盾越しだからね。視野も狭い

でも、それを期に僕に接近しようとするのは…

『お前の首、もらった！』

失敗だね！

一人の召喚獣が接近してきた瞬間、盾で思いっきり殴る

機動隊が犯人鎮圧に使う基本攻撃だよ

そもそも機動隊はあくまで犯人の”逮捕”が目的で  
SWATと違い殆どの場合には犯人を生かして捕らえる。だから  
機動隊は火器なんて殆ど持たず、格闘で鎮圧するからね

逆にSWATは犯人を生かそうとはするけど、銃の発砲許可を  
貰うと殺傷させる場合が多いね。アメリカは得に物騒だと聞くし、  
それは驚きではないけどね

《Bクラス内村修司 32点》

『ちッ、こいつ、召喚獣の操作が上手いぞ！』

『待て、慌てるな！ まだ負けた訳じゃない！ 突っ込め！』

三体の召喚獣が僕に向かって突っ込んでくる

全員が剣を向けて凄い剣幕で警察官に突っ込むって、  
それってどうかな？

銃を乱射するが、これといった決定打も与えられず、接近を許して  
しまう

ちなみにさっき乱射した時にマガジンを一個使い切ってしまった

やっぱりMP5Kの15発という小さい弾倉は多対一じゃ不向きだね

「あ……」

さっきまで三体の猛攻を防いでいた盾が弾き飛ばされた

『盾が無くなったぞ！ 殺れ！』

これはちょっと拙いね

でも、接近戦が拙いのは変わらないよ！

目の前まで迫ってきた一人の召喚獣の胸ぐらを掴み、  
担ぐように背中に貼り付けて…力いっぱい振り下ろす！

『なッ！？』

《Bクラス内村修司 0点》

「ねえねえ、君達知らないの？ 日本警察は全員が  
柔道や合気道の心得を持っているんだよ。犯人鎮圧の  
ためにね。だからそんな近づいたら駄目だろ？ はつきり  
と言うと、真ん中の君、リーダー失格だね。警戒もせず  
突っ込んでやって、全滅することも考えなかったのか？  
うん、全て君の所為だよ。ほら、他の三人も全員君の  
ことを憎むよ？ あはは！ 生涯ずっと三人の人間に  
憎まれながら生きるんだね！ あははは！」

今言ったことは全部嘘だけだね



まあ、僕には他人の考えなんて読めないから

ちなみにさっきの業は背負い投げ、という一本背負いを  
もうちょつと簡単にしたような業だよ。

『あああああ……あああああ』

啞然としながら座り込んでしまう真ん中の生徒

確か、数学で二百点台を出した生徒だっけ？

残った一人はどうかして真ん中の生徒を励まそうとする

僕はこんな茶番劇に付き合うほど人間として出来上がってないよ？

僕は慰めようとしている生徒の召喚獣へと近づき、腰の辺りを  
持つ。そして、その体勢のまま後ろに振り向き、足でアイツの  
足首を思いっきり払う！

『あー！』

気付いた時にはもう遅い

《Bクラス中川次郎 0》

払い腰、一本！

さて、残りは…

「君だけだね」

最後のリーダー役っぽい生徒だ

「うーん、やっぱり退かなかったのが君達の運の尽きだったよ君が調子に乗るからだね」。全部君の所為だ」

またまた全ての罪を押し付ける

うん、この落ち込んだ顔を見るのが最高だよ！

達成感が凄い！ 嬉しいな！

ククク、もっと痛ぶってあげるよ

「まずは一発」

召喚獣の腰から一丁の拳銃を取り出し、セーフティを外した後、長谷川くん（確かこんな名前だったはず）の召喚獣の太ももを打ち抜く

召喚者本人は相変わらず地面を向いたままだけど、召喚獣は地面に這うように動き回る

あははは！ 例え召喚獣でも苦痛の表情を見るのは快感だよ！ まるで僕のマイナス感情が浄化されてる気分だ！

《Bクラス長谷川和彦 184点》

可哀想に、あんなに点数が高くなきゃもうとつくに

終わってるのに。でも、久しぶりの喧嘩だよ、簡単には終わらせない

「次」

地面に這っている召喚獣のわき腹に蹴りを入れる

うん、どこから見ても不良が通行人をボコボコにしてる光景にしか見えない

《Bクラス長谷川和彦 170点》

「まだまだ」

今度は拳銃で右腕を打ち抜く

これって本当にラブコメディライトノベルの二次創作か？ それには

似合わないグロテスクでえげつない光景だね

《Bクラス長谷川和彦 142点》

「もっともっと」

僕の意味と関係無しにバンバンと背中を撃っていく召喚獣

僕と気が合うね、僕の召喚獣だからかな？

《Bクラス長谷川和彦 38点》

うーん、もう飽きたね

これ以上はもう一撃で戦死しちゃうし、  
もう苛めるのに飽きたからね

止めと行こうか

「じゃあ、さようなら」

拳銃から弾倉を引き抜き、腰の付いているベルトから  
別の弾倉を入れ、弾をロードする

そして、拳銃を相手の召喚獣の額に押し付けて…

《バン！》

引き金を引いた

うん、凄い止めの刺し方だね。僕も感激だよ

《Bクラス長谷川和彦 0点》

「戦死者は補修！」

それと共に、西村先生の補修室に連行される

目は虚ろのままだね、最高だよ

ククク、久しぶりの苛め

しかも召喚獣だからなんの犯罪にもならない

まさに完全犯罪！なんちゃってね

「全部終わったけど、なんで一度も僕を助けてくれないのさ？」

さっきまで存在自体を忘れていた二名と向き合う

吉田くんと島田さん

「な、仲野宮くんの点数を見た時、助けなんて要らないかな？って思っちゃったんだよ。しかも最後の人にはえげつないことをしていたし。」

決して君を生贄にして逃げようとなんかしていなかった！」

「自分の目的を喋っちゃってるよこの人。ねえ島田さん、吉田ってどれだけバカなんだい？ なにを基準にすれば良いか分からないんだけど」

「そこまで言う必要はないだろ！」

「そうね…猿でも基準にすれば良いんじゃないかしら？」

「島田さんも！？」

それは猿に失礼だよ、島田さん

「Es ist nicht unh?flich, einem Affen oder nicht？」

（それは猿に失礼なんじゃないのかな？）「」

「Ich sicherlich tun（確かにそうね）」

吉田くんをからかうためにドイツ語で話し、島田さんもそれに乗ってくれた

「Wenn es etwas anderes, was?（なら他になにかあるかな?）」

「Nun, ich nicht gut Toka Raupen?（じゃあ、芋虫とかで良いんじゃないの?）」

「Es ist eine gute Idee!（それは名案だ!）」

吉田くんはなにがなんだかさっぱりみたいだね

うん、もっと困ってくれ

「じゃあ、今から君の認識は芋虫に決定したよ」

「ちよつと待って!?! なにをどうしたら基準の話から僕をなんの動物で認識するかの話になるわけ!?!」

「芋虫は喋る物じゃないよ? とにかく五月蠅いから口を閉じてくれ。口を閉じろ。息をするな。呼吸をするな。口に出すな。鼻息もするな。酸素を取り込むな。二酸化炭素を出すな。存在するな。死ね」

暴言を短機関銃のように乱射する

吉田くんは暴言を受けた！

効果抜群だ！

吉田くんは倒れた！

「二人共酷いよ…」

「まあまあ、そう落ち込まないで」

「貴様の所為だろ、仲野宮！」

吉田くんはガラスのハートの持ち主なのか？

それならバラバラに切り落として砕いてあげたいよ

二度と修復できないように粉末状にしてね

でもそうすると貴重な生贄が無くなってしまっ

「それより、アンタ…」

「ん？」

島田さんがジーっと僕のことを見つめている

なにか顔にでも付いてるのか？

「なにか？」

「どういづつもりよ、あの点数！」

ああ、あれのことか。確かに真面目にテストを受けた状態では初めての戦闘だったね。敵があっさりと負けてくれたけど

「そうだよ仲野宮くん！ 四百点越えなんて普通に出る点数じゃないよ！ しかもあの時出来が悪いって言ってたじゃないか！」

確かにあの点数は僕としては悪かったよ。でも、あれは僕の数学での全力だからね。苦手科目だとやっぱり400点ギリギリだった

「アレこそが僕の数学での限界だよ。あまり良い点数とは思わないけどね」

「仲野宮くんの成績基準はいつたいつたってんだよ……」

「時が来れば分かるさ。それじゃ、僕は戦場に戻るよ。君達も早くしなよ？」

Bクラスへと向かう

うーん、戦局はどうなってるかな？

2・F異端審問会が大半の前線部隊を道連れにしてくれたけど、流石に四つもクラス差があるからね。多分かなりの人数が戦死してると思うよ



「あ！　そういえば言い忘れていたよ！」

クルッと吉田さんと島田さんに向きなおす

「なによ？」

「君達が今ここで見たことや聞いたことは絶対他言無用だからね？」

これ大事です。これ大事です。大事なことなので二回言いました

「なんでよ！　アンタが前線に出てくれればかなりの戦力になるし

…」

「島田さん、だからだよ」

「え？」

吉田くんは分かってるじゃないか

「そう。僕は戦場に行くのがどれだけ嫌だか君に分かるか？

僕は兵器みたいな扱いは受けたくない。ましてや戦争紛いのことでね」

「アンタ、なんでそこまで戦争を嫌いの？　これって本当のとは全然違うし…」

「戦争であることに変わりはないんだよ。だから僕は  
試召戦争が嫌いなんだよ。君みたいな子供が出てくるから」

島田さんは典型的な文月学園出の生徒だよ

戦争を軽く見てる

「こんなことをしているから生徒達が戦争の間違った考えを持つんだよ。こんなに軽々しく”戦争”と口にしてるしね。

君達は戦争ってなにか知ってるか？ 国と国の殺し合いだよ。

第二次世界大戦を例に挙げてあげるよ。

日本の主の対戦相手は米海軍と空軍だ。これは日本がアメリカの真珠湾を奇襲攻撃したからによる参戦だったからだよ。

開戦当初は日本も勝利を重ねていた。航空機だけで戦艦を落とすという

戦争で画期的な戦闘方法を始めて行ったことで有名だよ。でも、ミッドウェー海戦

での大敗と山本五十六の戦死の影響で日本は戦局的にも経済的にも追い詰められていた。

そこで日本が起こした行動はなにか知ってるかい？」

「神風攻撃……」

吉田くんが呟くようにそう言う

確かゲームが好きだったそうだね。それで知ってるんだ

「そう。日本は零戦機を使って神風特殊攻撃隊を編成したんだ。爆弾を積んだ零戦を使って戦艦や空母に体当たりという馬鹿げた作戦だ。」

でも、それだけじゃない。あまり知られていないけど、日本はこの馬鹿げた神風攻撃よりさらに酷い作戦を行っているんだ。

それは、桜花っていう兵器だ」

「桜花…？」

やっぱりあまり知られていないね。まあ、日本は神風の方が印象的に残っているからね

「そう。桜花っていう兵器が運用され始めて。その内容は…」

ここで間を入れて、威圧感を出しながら言う

「…人間爆弾だよ」

「え…？」

「うそ…」

嘘じゃない、紛れも無い事実だよ

「ロケットのような形をした爆弾の中に操縦席を内蔵して、いわば操作できる爆弾だよ。陸上攻撃機の中に積まれて敵艦船の上空に行つて、人を乗せたまま落とすという恐ろしい兵器さ。もちろん搭乗員の命は無い」

あまりにも衝撃的な内容に言葉を失う二人

うん、どうやら僕が戦争が嫌いな理由が分かってきたみたいだね

「それだけじゃない。陸上攻撃機ってなにか知ってるか？」

その名の通り敵を爆撃するための戦闘機だよ。でかく速度も遅い、航空機には格好の的だ。この意味が分かるかい？」

分からないよね、平和な時代に育ってる人は

「桜花は敵艦船にたどり着く前に殆どが落とされたんだ

殆ど自殺行為に等しい

攻撃機が一つ落ちる度に数十人の命が失われる。攻撃に成功した桜花なんて殆ど居ない。護衛の零戦も少なく、それどころか護衛まで打ち落とされる始末だよ。まったく、馬鹿げた作戦だと思わないか？」

事実、桜花の戦死者は神風での戦死者に近い

あまりに成功率が低かったから中止されたが、もし

神風のように終戦まで決行されていたら間違いなく

神風以上の戦死者を出しただろう

しかも、米軍の博物館では桜花のことを” B A K A B O M B ” っ  
て呼んでる

アメリカもこの作戦は馬鹿げたことだと思っているんだよ

「他にも” 回天 ” や ” 震洋 ” などの ” 人間兵器 ” があるけど、話を

聞きたいかい？」

僕はそう訊いてもなにも言わない二人

「僕が言いたい意味が分かるかい？ 戦争とはそういうものなんだよ。

こんな子供だましな遊びじゃなく、人命なんて二の次、いや、三の次ぐらいだった」

僕が話し終わっても言葉を発しない二人

あはは、さっきまで戦争に関してはなんの知識もない人がこれを聞くと確かにキツイね

ちよつとやりすぎたかな

「ちなみにアメリカのアフガニスタン紛争の関与時に日本の自衛隊も

数十名が送り込まれているのは知ってるよね？ でも、兵士じゃなく

自衛隊の医薬機関の方達だ。つまり、戦闘とはかけ離れた医者が、戦地

に出向くって意味さ。お陰で殉職者は少なくはなかったよ」

その中にも僕の従兄が居るしね

楽しかったなあ、従兄と居る時は…

「僕の従兄もその一人さ」

「「！！」」

驚いた表情をする二人

「だからアンタ…あんなに試召戦争に出たくないって言ってたの…」

「別に僕の従兄が戦死したから戦争に出たくない訳じゃない。それだと銃なんてとくに破棄してるさ。僕の従兄の死は間接的に関わっているさ」

「間接的？」

「君達は知る必要はないね。」

で、これで分かってくれたかな？ 僕がこの成績のことを言われたくない理由」

「う、うん。分かったよ。ごめん、仲野宮くん。こんなことを話させて…」

吉田くんに謝られる

僕に謝る必要なんてないよ。ただ分かってくればそれで良いんだ

「別に良いさ。じゃあ、僕はもう教室に帰るから。さつきは戦場に行こうかなとは思っていたけど、もう気が向かないね。精々負けないように頑張ってくれよ？ あはは」

いつも通りにつこりと笑い、二人を後にする

うーん…久しぶりに長々と話したね

でも、歴史は好きだし話すのも楽しかったからね

じゃあ、僕は我がFクラスの勝利を祈りながら昼寝でもしようか

まあ、半分は嫌がらせでもう半分は面白半分だけだね

あれ、それって真面目な部分って無くな？

## 七問 屑と戦争と戦争嫌い（後書き）

いかがでしたか？

主人公が戦争嫌いな理由、その氷山の一角を見せました

まだまだ過去話には入りません

第二次世界大戦の知識とアフガニスタンの知識は全て作者の自知識からです。もし間違っている点があったら指摘してください

神風特殊攻撃隊 航空機が爆弾を積んで敵艦船に  
体当たりする戦法。戦死者およそ6000以上

桜花 一式陸上攻撃機で敵艦船の上空まで行き、  
切り離して落下させる有人ロケット

回天 水中魚雷に操縦席を内蔵させ水中から  
敵艦船に体当たりする戦法

震洋 モーターボートに爆弾を積んで敵に  
夜間攻撃をする戦法。16〜22歳の少年兵  
が決行。戦死者はおよそ1636名

## 今回の質問

一番”好き”な授業はなんですか？ 成績は問いません



ちなみに僕は日本史と世界史の授業が大好きです

く睡眠く

## 八問 屑と呼び名と愛犬家（前書き）

毎日更新がこんなにも早く終わった…

残念です

今話では主人公の意外な一面が見れるはずですよ

では、八話です

## 八問 屑と呼び名と愛犬家

『勝者Fクラス！！！』

「んがっ？」

大きな物音が響いたと思ったら、誰かの雄叫びと共にそれが聞こえた

Fクラスの勝利

本当に勝っちゃったよ、Fクラスが

どんな手段を使ったかは分からないけど、マトモな手段じゃないことは

確かだね。だって、大きな物音の後になにかが崩壊するような音が響いたんだよ？

しかもそれに加えてガラスが突き破る音も聞こえたし、絶対に犯罪行為擦れ擦れのことをしたに違いない

「やつぱり僕の手伝いは必要無かったね。いや、それ所か」  
「余計なお世話だ！」って言われてもおかしくないよ」

僕は基本、馬鹿で勉強のできない屑で通ってるからね

吉田さんと島田さん以外はみんな僕のことを馬鹿だと思ってるから。いや、観察処分者の吉田くんには前から

馬鹿とは思われていないと思うけど

でも、実際は僕の点数って吉田くんより酷いんだよ？

総合科目は300点台という誇るべき学園最下位の地位

さて、僕も一応は自分のクラスの勝利の様子でも眺めようかな

「根本、お前がコレを着て今言った通りに行動したら  
それだけでも許してやって良いぞ」

根本くんの前に出されたのは一着の女子制服

あ、あれを着るつもりなのか…？

ちょっと、いや、まったく似合わないと思うんだけど

「ふざけるな！ 誰がそんなものを…」

流石の根本くんも着たくないのか拒絶しようとする  
と、Bクラスの生徒からボディブローが炸裂した

「グッ!!??」

『『『Bクラス全員で実行しよう!!!』』』

相当嫌われていたんだね、根本くんは

まあ、僕もお互い様だけど

「うわあ、君達もとうとうそんな趣味まで持つようになったんだね。

正直に言つと引くよ。変態だね。近寄りたくないぐらいだ」

「へっ、それはお互い様じゃねえのか、仲野宮？」

それもそうだね、坂本代表

「Fクラスの勝利、おめでとう」

「とても祝福してるようには聞こえねえな」

「受け取り方は君達しだいさ」

それより、良く僕だと気付いたね、代表は

「フン、回復試験を受けた後直ぐ瞬殺された奴が言っじゃねえか。ええ？」

随分と喧嘩腰だね。機嫌でも悪いのか？

あ、僕だからか

「勘違いしないでくれ、僕は確かにあの後一切戦っていないが補修室送りにはされていない。ま、首の皮一枚繋がったってことさ」

本当のところは四人と戦っていたんだけどね

まあ、あんな小物ぐらい倒したぐらいじゃ誇れないよ。点数だって苦手科目なだけあって低かったしね

「腰抜けの弱虫みてえに逃げ回ってたか。無様だな」

「解釈はどうぞご自由に」

腰抜けだって構わないさ、今まで言われてきた”死ね！”よりはマシだしね

アレは心の底からの殺意だったから

「ゆ、雄二……」

「ん？　なんだ明久？」

吉田くんがちょっと弱気になりながら代表に話しかける

「その、あまり仲野宮くんを悪く言わないでくれるかな？　彼だって、事情とかがあるかもしれないし……」

あらら、僕ってそんな捉え方をされてるの？

もしかして二人共僕は根が良い奴だと勘違いしてるの？

駄目だなあ、ソレは。僕は根っからの屑だから、  
そんなのは一切無いよ

よく漫画とかでは敵キャラが味方側に付くってパターン  
があるけど、そんな感情なんて僕には皆無だよ

少なくとも、他の皆は思っちゃ居ないね

「…明久、お前とうとう頭がイカれたのか？」

「なんで僕が頭のイカれる直前だったみたいない方をするの！？  
完全に正常だよ！ なんの問題も無い普通の人間だよ！」

「芋虫じゃなくて？」

「庇ってあげてるのになんでそんな事を言うのさ！？」

事実だからじゃないの？

「まあいいさ。とにかく、こんな奴なんぞ居ても居なくても  
関係のねえことだ。これは今回で証明できたな？」

まあ、もし僕が居なかったらあと二人の戦力、しかも数学での  
主戦力の島田さんを失うことになっていたけどね

「そんなことは無いさ！ だって仲野宮くんが  
居なかったら今頃僕らは…」

そこから先は吉田くんの言葉が途切れて聞こえなかった

それもそのはず、島田さんが後頭部を殴り飛ばしたからだ

「な、なにをするのさ島田さん!？」

涙目で島田さんに訴える

「ちよつと手が滑っただけよ」

「ちよつと滑ったのが右ストレートの体勢に…」

僕も突っ込もうとしたら顔面に裏拳を喰らった

「そ、そんな馬鹿な…僕が反応できなかった？」

自惚れている訳じゃないけど、腐っても柔道一級と合気道三級だからね

その僕が反応できないとは、何者だ島田さん？

「おい島田、どういうつもりだ？」

「本当にちよつと滑っただけよ」

強引だなあ、まったく

『おい！ 根本の準備が出来たぞ!』

Bクラスの生徒から始まりの合図が来る



ああ、見たくないな

見たら石になる！って感じだよ

「クソ…屈辱だ…」

で、出たアア！！っていうのは冗談で、実際はそのままのイメージだった

根本くんが制服を着た、そんなイメージだ

まあ、子供には少々強烈だけどね

「うん、この僕でも目が腐り落ちそうだよ。悪いけど失礼するね」  
逃げるように教室を出る

多分目を消毒剤で浸さないといけないね

急いで帰路へ着く

行ったか…

根本の登場と同時に手で目を覆い隠し、教室を出て行った仲野宮

アイツでもさすがにアレは強烈だったか

それよりも…

「ムツツリーニ。ちょっとこっちへ来てくれ」

さっきから写真を撮っているムツツリーニを呼ぶ

あんな写真、ムツツリ商会じゃ売れるとは思わねえけどな

「……今は忙しい」

「いいからこっちへ来い。ちょっと頼みたいことがあるだけだ」

こいつしか出来そうにないしな

Fクラスの情報屋、ムツツリーニしかな

「……なんだ？」

「なに、お前には簡単だ。仲野宮浪都についてなんでも良いから調べてきてくれないか？」

ムツツリーニにとっては造作でもないことだろ、人を調べるぐらい

それでもアイツは試召戦争の時に敵地へなんども偵察や情報を調べてきたんだ

インターネットという便利な物もあるし、ムッツリー二ほどの腕があれば簡単だろ

「…………なぜ急に？」

「明久と島田が怪しかった。あいつのなにかを隠そうとしていてな。

とにかくなんでも良い、できるだけあいつを調べて来い」

「…………承知」

伝え終わると、再びカメラを取ろうとムッツリー二は人混みに戻る

さて、仲野宮の件はこれで大丈夫だ

後はAクラス攻略を考えねえとな

視点― 仲野宮浪都

「で、君達は僕になんの用かな？」

「別に…」

「ちょっとぐらい良いじゃないか」

何故か僕と同じ道を歩く二人の生命体、いや、人間

吉田くんと島田さんだ

今はもう学校外だよ？ 故に僕はもう学校生徒との関係は次の朝まで断ち切られたことになるんだ

「ストーカー罪で訴えちゃうよ？ ただでさえ既に一人のストーカーが居るんだ、これ以上増えると強行手段を行わなければならない」

銃で脅すとか、取り押さえて警察に突き出すとか

「だあかあ、ストーカーじゃないって言ってるでしょ！」

「…かと言いながら僕と同じ道をいつの間にか歩く君には説得力が皆無なんだよ、長瀬」

「うわっ！？」

いつの間にか存在していた長瀬に驚きの声を上げる吉田くん

「えっと…誰ですか？」

「私は「隣に住むストーカーさんだよ。あだ名は長瀬」逆よ！  
私は

Aクラスの長瀬流歌。こいつとは知り合いよ」

「それほど親しい仲だったか、僕ら？」

「知り合いで親しすぎるって……」

それぐらい僕たちの関係は蒼白な物になっているんだよ

「浪都はいつもこうよ。慣れなさい」

君でも慣れていないのに他人に慣れると？

「でも、名前で呼んでるならそれなりに仲が良いんでしょう？」

「あはは、冗談は止してくれ。それを聞くだけで  
頭がイカれそうだ。あ、もうイカれてるか！ あはは。  
うん、昔はそうだったけど、今となつちや赤の他人さ。  
長瀬の短い思考回路だと呼びなおすのが面倒なだけ  
なんじゃないのかな？」

「……浪都って時々心から傷付くようなことを言うよね」

涙目になりながら先を急ぐように僕らを追い越した

あはは、なにをそんなに悲しそうにするのかな？

君だってこの状態の方が本望なんだろう？

「な、仲野宮くん！ 後を追わなくてもいいの？」

焦った表情で僕に訊いてくる吉田くん

「ん、なんで？」

「いやだって、アンタが泣かしたんでしょ！」

それがどうして後を追うのと繋がるのかな？

僕に謝れとでも？ 別に僕には罪悪感なんて無いし、あの程度で泣くような長瀬が悪いのさ

「それが？ 生憎と僕の感情は麻痺していてね。罪悪感とかを感じないんだよ」

「あ、あんなにかわいい女子を泣かしたのに、って痛たたたた！  
！！

痛いよ島田さん！ 僕の間接はそっちには曲がらな…ああ！！！！」

”かわいい”という言葉を発した途端に関節技を決め始めた島田さん  
中々上手いね。格闘技とかをやっているのかな？

「ま、ウチもこんなことで取り乱すような子供じゃないから。我慢してあげる」

それは攻撃する前に言う台詞だよ？

「それより仲野宮くん」

「なんだい？」

今回は質問が多いな

「仲野宮くん」って呼ぶには余所余所しいから、君のことを浪都って呼んでいいかな？ もう他人では無いし」

うーん、確かにそうだね

まあ呼び方なんてどうでも良いけど

「別になんでも良いよ、吉田くん」

「だから僕の名前は吉井明久だって！ まだその呼び方は変えないんだね！？」

この呼び方は一生変えるつもりはないね

「じゃあ、吉井。アンタもウチのことは美波って呼びなさいよ。ウチもあんたのことは”アキ”って呼ぶから」

なんでここで島田さんが入ってくるんだ？

「え、でも島田さんは…」

「なによ、駄目って言うの？」

拳をゴキゴキと鳴らしながら訊く

いや、それは訊いているんじゃないくて”脅迫”って言うんだよ

「わ、分かったよ、美波」

うん、これは異端審問会は黙っちゃいないね

明日が楽しみだよ。フッフッフ

「あ、それと、ウチもあんたのことは名前で呼ぶから、  
アンタもウチのことは名前で呼びなさいよ」

「断る。名前で呼ばれるのは構わないけど、  
僕自身が名前で呼ぶのはお断りだね」

そこまで仲良くなるつもりなんて一切無いし、  
なにより馴れ馴れしくて仕方ないんだ

あ、僕はここまでだね

自分のアパートが見えてきた

「じゃあ、僕はここまでだ。また明日。出来れば会いたくないけど  
ね」

「最後の最後でなによ…」

「長瀬さんが言ってた”慣れる”が難しく思えてきた…」

まあ、精々頑張つてよ。僕は応援なんてしないけどね

僕は二人を後にし、マンションの階段を上る



ここは古くてエレベーターが無いからね、上にかかるだけで  
ちょっとした運動になるよ

「ただいま」

《ワン！》

ドアを開けて第一声が太郎の鳴き声だった

普段は大人しいけど僕が学校から帰るといつも  
テンションが上がるんだ。数分で収まるけど

「よしよし、良い子にしてたね」

頭を撫でながら穏やかな口調で言う

うん、学校の人に見られたら恥ずかしさで死にたくなる

「よし、じゃあご飯にしようか！」

冷蔵庫からはコンビニ弁当を取り出し、棚の中からは  
ドッグフードを出す

ドッグフードは太郎の皿に乗せ、自分はお弁当を食べ始める  
食卓には僕一人だけ

そう、一人

この孤独には随分慣れたものだよ

でも、今年になって寂しさが段々と増してきた  
なぜなのかな？

まあ、しばらくしたら元通りに戻るでしょ

やっぱり新しい犬でも家族に加えようかな？

ちなみに”飼う”とは言わない

犬は家族！ ペットではなく家族だ！

故に家の中では自由にさせたい

そう、犬とはペットではない！

相棒でもあり、兄弟でもあり、家族でもある！

やっぱり柴犬をもう一匹引き取ろうかな？

それとも道に捨てられた子犬とかも拾おうかな？

まったく、酷いことをするものだよ

犬を捨てるなんて神をも冒瀆する行為だ！

犬は人間と同じぐらいエライ！

これを聞いた大半の人は僕が狂っているっていつことを再認識したらしいね

なんでだろう？

## 八問 屑と呼び名と愛犬家（後書き）

いかがでしたか？

明久と美波とは仲が良くなり始めている主人公

でも本人はまだ一線置いているつもりだそうです

主人公の異常なまでの犬への愛着心はどうでしたか？

作者も同じ風に考えてますよ？

犬はペットではない、家族だ！

## 今回の質問

学校の休憩時間はなにをしていましたか？

ちなみに作者は友達に数々の豆知識を言っていました

一時期はあだ名が”クソチビ”から”無駄知識”へと変わりました

（笑）

～睡眠～

## 九問 屑と勝負とAクラス（前書き）

今回からAクラス戦です

そして、数少ない漫画記憶を搾り出しながら書きました

うーん、なぜアニメと漫画がここまで違うんだ!?

では、九話です

## 九問 屑と勝負とAクラス

「皆、ご機嫌よー」

『総員、ねら…』

その後を聞くまでもなく、扉を閉める

直後、ドアに無数のカッターナイフが突き刺さる

ここ数日、毎日こんなことが起きるね

偶には別の攻撃方法を思いつかないと対策を練られるよ？

「いつもいつも温かい朝の挨拶をありがとう。  
今度はどんな理由かな？」

『いつまで惚けるつもりだ、仲野宮！ 貴様が  
先日、我々の血の制約を破り女子生徒二名と一緒に  
下校し、またその内の一名を泣かせたという情報が入っている！  
そのような不届き者を放っておいて  
良いのだろうか？』

『『否！ 否！ 否！』』』

『ならば総員、武器を持て！ この者を  
血祭りに上げ、見せしめとして学校の校舎に吊るせ！』

なんてグロテスクな事を提案するんだろっ、須川会長くんは  
それってラノベ漫画でやっていい行為なのか？

FFF団メンバー数十人が武器を持ち、僕に向かってくる

あはは、懲りない人たちだね

（十分後）

『貴様…覚えている…』

『FFF団の真の恐ろしさは…これからだ…』

まるで冒険漫画の悪役者のような捨て台詞を残し、気を失った

うん、前回より五分も時間を短縮できたよ

そろそろ初段を取ってみようかな？

「とまあ、柔道の試合を見終わったことだし、  
ホームルームを始めようと思う」

何事もなかったかのようにホームルームを進める代表

完全無視か、懸命な判断だね

「まず、お前達に感謝を述べたい。正直ここまで来れるとは思わなかった。だが、お前達のお陰で俺達はこの学園の歴史に残るようなことを成し遂げることが出来る。見せてやるうぜ！ 学力なんか全てじゃねえ！」

『そうだ！』

代表の演説にいつの間にか復活したFクラス生徒が賛同する  
やっぱり凄い統率力だ

「俺達に必要なのはこんな卓袱台じゃねえ！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『そうだ！ 良いぞ代表！』

「そして、Aクラス戦のことだが、俺は一騎打ちで勝負しようと思っ  
っている！」

一騎打ち？ だからか。一回勝てばそれで済むしね

一番勝率が高い

『一騎打ち？ 誰と誰がやるんだ？』

「もちろん、俺と翔子だ」



翔子？ ああ、Aクラス代表のことか

名前で呼び合う仲なんだね

『おい待てよ！ 坂本じゃ学年主席には勝てないぞ！  
なぜここで姫路さんを出さないんだ！？』

それは僕も同意見だね

幾ら昔は神童と呼ばれた代表でも学年主席には勝てないから

総合科目が4000点台で、一科目の平均点が400点に相当する

他人から見ればとても高い点数だね

「皆、落ち着け。俺は必ず勝つ。翔子に打ち勝ち、俺達Fクラスが  
Aクラスの設備を手に入れる。俺を信じる。かつては神童と呼ばれ  
た俺の  
力を、お前等に見せてやる！」

『『『うオオオオオ！！！！！！』』』

クラスの士気は最高潮になった

このクラスはやっぱり元気だけが取り得のようなクラスだね

「で、具体的な説明だが…」

あまりしつかり聞いていなかったから覚えてないけど、  
確か召喚獣での戦闘は行わず、純粋なテストでの点数を競う

そつだ。科目は日本史、小学生レベルの問題で、テストは百点満点の上限あり、という条件らしい

そんなの、満点に決まってるじゃないか

でも、代表の話によるとそのAクラス代表は”大化の改新”の年号を

必ず間違えるらしい。昔に嘘を教えたそつだ。汚い手を使うね

「あの、坂本くんは、霧島さんとは仲が良いんですか？」

姫路さんが代表に聞く

小さい頃に教えたつて言うのなら、それなりに仲が良いんじゃないのか？

「ああ。俺と翔子は幼馴染だからな」

その言葉を発した瞬間、Fクラス男子全員の眼が赤く光つたのは気のせいではないと思う

「総員、狙えエエエ！！！！！！」

吉田くんの雄叫びと共に、Fクラス男子全員が大鎌やカッターナイフといった数多くの凶器を代表に向けている

ついでに僕も覆面は無いが参加している

「なッ！？　おいなぜ明久の号令で全員が俺に凶器を向ける！？」

「黙れ男の敵！ Aクラスの前に貴様をこの手で抹殺してくれる！」

吉田くんが面白い表情で代表に殺意を向けているね

僕はいつものニコニコ顔で包丁を構えてるけど

笑顔で包丁を構えるなんてどこかのホラー映画で出てきそうだよ

「俺とアイツはなんの関係も無い！ もう昔の話だ！  
それと仲野宮ア！ てめえはなに笑って見てやがる！」

愚問だよ、代表

「面白いからに決まってるじゃないか」

「てめえはいつか明久と一緒に殺してやる！」

やれるものならやって欲しいものだよ

「あの、吉井くん？」

さっきまで男子のようすに怖がっていた姫路さんが口を開いた

「ん、なに？ 姫路さん？」

「あの、吉井くんは、霧島さんのような女性の方が、好みなんですか？」

「え？ ま、まあ、キレイだとは思っけど……ちょっと待って！  
どうして

姫路さんは僕に攻撃態勢を取るの！？ 美波もそんな物騒な物を投げようとししないで！」

それを聞くや否や姫路さんはファイティングポーズを取り、島田さんは

とても危なっかしい物を投げつけようとしている

女性の嫉妬とは、恐ろしいものだね

「とにかく！ 俺がアイツに教えた”大化の改新”がテストに出ていたら、俺達の勝ちだ！ そして、俺達の机は……」

『システムデスクだ！！』

代表が纏め上げて皆を落ち着かせる

ちえ、本当に攻撃はしないんだ

「よし、明久！ Aクラスに宣戦布告するぞ！」

とうとうやるんだ

今回は吉田くんを生贄にするんじゃないで、Fクラス主戦力全員で行くそうだ。ま、そうじゃないと吉田くんが袋叩きになるけど

「うん！」

代表、吉田くん、木下……くん？、土屋くん、島田さん、姫路さんがAクラスへと向かっていった。うーん、幾らなんでも真っ向勝負でFクラス代表が

学年主席に勝てるとは思わないな。最上位と最下位がぶつかるのは無謀だ。

大剣とシャーペンがぶつかるようなものだよ

まあ代表のことだ、なにか勝てる要素のある秘策で容易してるんだろ

うーん、そういう勝てる希望とかは粉々に潰したいんだけど、生憎と

僕はFクラスだからね。その願いはかなわない

でも、一騎打ちでも一応はクラス全員がテストを受けたらしい

まだ一騎打ちを承諾するとは決まったわけじゃないからね

僕も今回は真面目にテストを受けた

前回のBクラス戦のテスト中は凄く暇だったんだよ

数十分も寝たりボーっとしたりを繰り返していた

そんなに退屈になるなら真面目にテストを受ける方が時間を潰せるからね

真面目とは言っても、勉強は一切しなかったけど

あくまで自分の自知識だけで挑んだんだ

ま、それでもそれなりには点数は取れるけどね

お、代表が帰ってきた

数分ぐらい経つと、代表ご一行様が帰ってきた

表情は少なからず満足気ってことは、なにか良い条件でも貰ったのかな？

『おい、坂本が帰ってきたぞ！』

『どうだった？』

「少々予定に変更があつたが、条件は殆ど飲んでくれた。  
お互い一対一の試召戦争の五回勝負、三つ勝てば俺達の勝ちだ。  
開始は十時、Aクラス教室で対決だ」

最初の予定とはちょっと違うね

でも、まだ代表は自信満々の表情だ

まあ、三回勝つだけで良いんだから

なら候補としては…姫路さんに代表、後はBクラスで活躍したって聞いた土屋くんか？ これで三本。もし僕が出たら四本だけど、そ

れは

天地がひっくり返ってもありえないね

僕は基本、馬鹿だからね

「では、Aクラス対Fクラスの試召戦争を始めます！」

Aクラス担任の高橋先生の号令と共に、最上層対最下層の戦いが始まった

会場はAクラスの教室

Fクラスの生徒とAクラスの生徒が観客として立会いながら、お互いに選ばれた五人を並べている

ちなみに僕は観客の集団とは別にこの豪華な教室の高い壁の一番上にある窓の枠に座っている

上るのは苦勞したけど、見晴らしは素晴らしいものだよ

寝転べるし、ポジションもバレない

サボる時はここに来ようかな？

「では、一人目の方は出てください」

初戦がいよいよ始まるね

Aクラスはビン底みたいなレンズの眼鏡を掛けた女子生徒、  
佐藤美穂さんが出てきた

女子生徒が多いね、男子生徒は居ないのか？

「明久、出番だ」

初戦で吉田くん？ どう考えても捨て駒扱いだと思うよ？

「え、僕！？」

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

負ける方にね

僕は吉田くんが負けるのに三百円賭けるよ

「ふう、僕に本気を出させてこと？」

「ああ。もう隠さなくて良い。お前の全力を見せ付けてやれ」

あれ？ コレって漫画とかでよくある、”実は弱かったキャラ



がラスボス級に強かった”って展開なのか？

だとしたら点数は一科目1000点とかそんな馬鹿げた数字も期待して良いんだね？

「吉井君、でしたっけ？ あなたまさか……」

「そうさ、僕は今までまったく本気を出しじゃない」

段々不安な顔になっていく佐藤さん

お、これはかなり期待できるね

「それじゃあ君は……」

「そう、今まで隠してきたけど実は僕……」

お互いの召喚獣が出てくる

そして、徐々に点数が露になっていく

「……左利きなんだ」

《Fクラス吉井明久 物理62点》

《Aクラス佐藤美穂 物理389点》

「勝者Aクラス」

瞬殺だった

まさかの出来事のAクラスFクラス問わず全員が固まる

「このバカ！ テストの成績に利き腕なんて関係ないでしょうが！」

いや、それは違うよ島田さん？ もし利き腕じゃない方でテストを受けると字が汚すぎて不正解にされちゃうよ？

「痛い！ フィードバックで痛んでるのに、さらに殴るのはカンベンして！」

そういえば観察処分者は召喚獣の痛みが少なからず本体にも伝わるんだね

「とりあえず捨て駒野郎はほつといて…」

「今捨て駒って言ったね！？ 雄二は僕のことを捨て駒って呼んだね！？」

やっぱり僕を信じていなかったんだ！」

「勿論俺は信じていたさ。お前が負ける方にな」

あ、それ僕も同じです

「貴様に左手でのフックを喰らわせてやる！」

だが、このやり取りを無視して高橋先生は続けた

「二人目の方、前へ出てください」

「……」

すると、沈黙を守りながら立ち上がったのは、  
Fクラスの情報屋、ムツツリー二こと土屋くん

「じゃあ、ボクが出るよ。一年の終わりに転入してきた工藤愛子で  
す、よろしくね」

Aクラスからは緑髪の子生徒が出てきた

髪はかなり短く切っていて、一人称も”ボク”というなんとも  
男の子らしそうな人だ。一年の終わりってことは僕とは面識はないね

「教科はなににしますか？」

「……保健体育」

保険体育？ さすがはムツツリー二と呼ばれることはあるね  
得意科目もその通りだよ

「土屋くんだったけ？ 保健体育に随分自信があるんだね。でも、  
ボクだって得意  
なんだよ？ 君と違って、実技でね」

なんて女子らしくない台詞を言うんだろう

ほら、周りの男子生徒が全員ダメージを受けているよ？

僕はまったくの無傷だけど。こういうことには興味が微塵もないか

らね

「その君、吉井くんだっけ？ 勉強が苦手なら、保健体育ぐらい教えてあげるよ？ 勿論、実技でね」

かなり大胆な誘いだね。FFF団の人なら泣いて喜ぶんじやないのかな？

「フ、望むところ……」

「アキには永遠にそんな機会なんてないから、保険体育の勉強なんていらないわよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

その誘いに乗ろうとした吉田くんを、島田さんと姫路さんが制する

その制し方ってかなり酷いよ？

あらら、吉田くんが泣き出しそうだ

「早く試合を開始してください」

さっきからずっと喋ってばかりだったから高橋先生が試合を進めるように指示した

これは戦争の時間であって談笑の時間じゃないからね

「はい、サモンっと」

「……サモン」

なんで土屋くんはいつもなにか言う時は”……”を付けるんだろう？  
見た目が暗そうだからかな？

土屋くんの忍者のような召喚獣と、工藤さんの大きな斧を持った召喚獣が対峙する

工藤さんのセーラー服に大きな斧って、凄くミスマッチだね

「バイバイ、ムッツリーニくん」

工藤さんの召喚獣が土屋くんの召喚獣に向かっていく

迂闊だね

「……加速」

そう土屋くんが呟くと、いつの間にか土屋くんの召喚獣は後ろへ下がって斧を避けていた

速いね、アレが土屋くんの”腕輪”の能力なんだ

良い機会なのでここで”腕輪”について教えてあげよう

”腕輪”とは、一つの教科で400点以上を出した生徒の召喚獣に付く物で、それぞれに新たな能力を追加する

この土屋くんの場合、”高速移動”が能力だね

勿論、僕にもあるよ

能力の内容は秘密だけど

「……加速終了」

土屋くんが再びそう呟くと、召喚獣が相手を斬り裂き工藤さんの召喚獣がバタンと倒れた

《Fクラス土屋康太 保険体育572点》

《Aクラス工藤愛子 保険体育446点》

なんだろう、400点台って普通の人にはとんでもなく高い得点なんだけど、土屋くんの点数を見たらそんな気が吹っ飛んだよ

「そ、そんな……このボクが……！」

相当自信があったのか、かなり落ち込んでいるね

「勝者、Fクラス」

一先ずは一勝

後二回勝利すればFクラスの勝利だ

「三人目の方、前へ出てきてください」

「あ、はい！ 私です！」

Fクラスからは姫路さん

「なら僕が相手をしよう」

対するFクラスは眼鏡を掛けた男子生徒

ようやく男子が出てきたよ

しかもこの人は…

「やはり来たか、学年次席」

学年三位だった男、久保利光

姫路さんが振り分け試験を途中退席したため、  
学年次席まで上がった運の良さだけの次席だよ

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

久保くんが答えた

さすがは一応の学園次席

総合には自信があるんだね

「ちょっと待った！　なに勝手に…」

「構いません！」

「姫路さん…」

吉田くんが口出ししようとするが、姫路さんがそれを制する

「「サモン！！」」

《Aクラス久保利光　総合科目3997点》

《Fクラス姫路瑞希　総合科目4409点》

ワオ、凄い点数だね

これって主席さんと同じぐらいの点数なんじゃないのかな？

結果は姫路さんの圧勝。そりゃ、四百点も差があるからね

「クッ……姫路さんは何時の間にそんなに強くなったんだ…？」

ここまで差がつけられた上で負けたから悔しさが相当あるようだ

「私はこのクラスが好きなんです。人の為に一生懸命頑張るよう  
な、

このクラスが大好きだから、頑張れるんです」

……その言葉に僕はしばらく思考させられる



あははははははは！！！！！！！！！！

うわ、良くそんなに恥ずかしいことを言えるね！

後少しで吹きちゃうところだったよ、あっはっは！！！！

それにさあ、人の為に一生懸命じゃなくて、皆自分の”自己満足”のために頑張ってるんだよ

” 自分は良いことをした、だから良い人なんだ ” っていう  
自己満足をねえ！ そんなことも分らないんだ？ あはははは！

いやあ、ここまで純粋な人は滅多に居ないよ。傑作だ!!!

人間のドロドロとした汚く黒い部分をまったく知らない！

クククク、ああ、まさかこんなところで笑わせてくれるなんてね

と、まあ現在は二対一でFクラスがリードしている

「では、四人目の方、出てきてください」

次が勝負どころだね

「あたしが出るわ」

Aクラスからは我がクラスの木下秀吉の双子の姉、木下優子

「儂が行こう」

Fクラスからは木下…くん？が出てくる

兄弟対決かあ、うん、面白そうだよ

「ちょっと待って優子」

その時、Aクラス側から木下さんを止める声が聞こえる

しかも、かなり聞き覚えのある声が

「なに、長瀬？」

Aクラス三位、長瀬だ

「この勝負、私が出ても良いかしら？」

「え、良いけど…」

長瀬もとうとうバトルジャンキーの交戦派になったのか？

駄目だなこれじゃあ、Aクラスが軍事政権化しちゃうよ

「ありがとう。でも、私の相手は悪いけど貴方じゃないわ」

木下くん？を退かせる

まったく、礼儀が悪いな

こういう時は敬語を使って”すみませんが、別に相手をしたい人物が居るので、

申し訳ありませんが退いてくださってもよろしいでしょうか？”と丁寧と言わないと

これじゃあ社会に出ても生きていけないよ？

「え？ ちょっと、長瀬、なにをするつもり…」

木下さんが困惑した顔になる

自分の弟がぶちのめされるのが見たいのかな？

「私の相手は…」

そして、一瞬眼を閉じてから、パツと僕が居る窓の枠へ見上げ、不運にも僕と目が合う。まさかとは思うけど…

「そこで自分は関係ないからって高みの見物をしてるアンタよ！  
仲野宮浪都！」

そう叫びながら僕に指差す

『『『はあ！！！！？？？』』』

周りは、得にFクラスから、驚愕の声が上がる

僕はただそれをジッと微笑みながら見てるだけだった

ククク、なあんだ

見に来て正解じゃないか

## 九問 屑と勝負とAクラス（後書き）

いかがでしたか？

ちよつと詰め込み過ぎたと思います

雄二の演説とAクラス四戦はさすがにやり過ぎました

漫画を無くした以上、試召戦争編に長居するわけには行きませんか  
ら、

出来るだけ早く終わらせたいです

まだ二、三話は続くと思いますが

## 今回の質問

学校では部活をやっていましたか？ それとも帰宅部ですか？

作者は吹奏楽部です

（睡眠）

## 十問 屑と天才と仮面被り（前書き）

今回で主人公の学力の全貌が明らかになります

まず、かなりやつちまった感があります

後、勘違いを生まないために発言しますが、僕はバカテスが大好きです

キャラたちも全員好きですし、とても面白いと思います

だから、一部のキャラの扱いが酷くても勘違いしないでください

では、十話です

## 十問 屑と天才と仮面被り

長瀬が指差す先、それはこの僕だった

予想外の相手にこの場に居る全員が驚愕の声を上げ、中にはクレームまで言う人まで居る

『なんでアイツなんだよ！』

『負けるのが怖くて一番弱い奴指名しやがったな！』

『逃げんじゃねえよ、この腰抜けが！』

特にFクラスからの罵声が凄い。大方勝負するのが怖くて必ず勝てる相手を選んだと思ってるんだろう

Aクラス生徒達も失望した目で見ている

「ちよつと待ってよ長瀬！　なんで

アイツなんかを指名するのよ！　それなら

あたしが出たいわよ！」

木下さんも怒っている

そりゃ、自分が変わってまでも戦わせてあげたのに、こんな逃げの選択をされたんだからね

「木下、貴方は分かっているいのよ。

私が出るからこそ、ここで浪都を潰さないといけないのよ」

さあすがは天才さん、理由がしっかりしているね

一番厄介なのは僕だと考えて、先に潰しておいた方が勝率が上がるとでも思っているのかな？

「ならあたしが出るわよ！ あんな奴、長瀬が出るまでも無いわよ！ あたしで十分瞬殺できる」

ものすごい自信だね

「駄目よ木下、アンタじゃどうやっても浪都には勝てない。それは私が一番良く知ってる」

君でも勝てないけどね

僕は戦争は嫌いだけど出るからには負けたくない

西村先生の補修と説教は受けたくないからね

「ッ…！ ふざけないで！ あたしが、あんな屑に負けるですつて！？」

良いわよ、なら見せてあげるわよ！ あんな奴、あたしだけで十分だつてね！」

怒り易い人だなあ

「下りてきなさい、仲野宮！ 一瞬で片付ける！」



うーん、長瀬の指名はもう無視するんだね

僕としては断りたいんだけど、戦う雰囲気になっっているから、それはぶち壊したくないね。軽蔑とは別の視線を受けるのは鬱陶しいから

「うーん、でも長瀬の指名だったからねえ…ならこうしようか!」

僕は窓から飛び降りて、高橋先生の前へ降り立つ

「二人共相手してあげるよ!」

「…なんですって?」

「そのままの意味さ、僕は二人共相手にしてあげるよ。勿論、一度では無いけど」

流石に僕でもAクラスを二人纏めて相手にするのはキツイよ

「浪都、それはどういうことなの?」

「馬鹿な君達に分かり易く説明してあげよう。

僕は君達を一人ずつ相手にするから、二連勝したら

Fクラスに一勝ってことでどうかな? 勿論、Aクラスは

僕に一度でも勝てばその時点で君達に一勝だよ」

つまり、これはAクラスにとってはかなり有利な条件

「嘗めたこと言うじゃないの。良いわよ、アンタを

叩き潰せるなら、それでいい!」

木下さんはかなり交戦ムードになってる

なんで間接的なのに僕に怒るのかな?

怒るなら長瀬に怒ってくれ

「高橋先生、それで良いですか?」

「両者賛同なら、構いません」

つまり、オッケーだね

「ならこちらは同意。そちらは?」

「私たちも同意」

「では、Aクラスからは最初に木下さん、次に長瀬さんで良いのですね?」

「はい」「」

「では、始めてください。教科は一戦ずつ選んでも構いません」

色々ややこしいことがあったけど、やっと始まった

つまり、一度勝つ度に科目が変わるんだね。上等だ

「日本史をお願いします。あたしの得意教科で、こんな奴

なんか叩き潰してあげる」

随分と自信満々だね

まあ、僕はその自信満々な心を叩き潰すのが一番楽しいけどなあ！

「「サモン！！」」

《Aクラス木下優子 日本史386点》

ワオ、殆ど400点じゃないか

得意科目だって言っただけはあるね

「フン、一撃よ。行け！」

木下さんの召喚獣が僕の機動隊に向かってランスを突き刺してくる

ちょっと豆知識、機動隊員の戦闘服は防弾製だけど、刃物に対しては

殆ど効果を持たないんだ、だからナイフやこういう武器にはめっば  
う弱い

そのための盾なんだけどね

ランスを盾で防ぎ、持っていたショットガンで頭を吹き飛ばそうと  
する

今回の銃はショットガンか、近接戦闘には相性が良いね

「クッ…！」

後ろへ下がり、弾の威力を最小限に抑えようとしている

ショットガンの弱点を知っているんだ？

このショットガンの弾は散弾だからね、後ろへ飛ぶと  
当たる弾の数がかなり下がる。現に点数だって殆ど減っていないか  
らね

「ショットガン…厄介な…」

やはり近接派の人には厄介なんだね、この銃は

「でも、点数は所詮はFクラスレベルの筈。なら、怖くはない！」  
臆することなく再び突っ込んでくる

迂闊だねえ

「残念」

今度は目の前まで迫っていたけど、僕の召喚獣が殴り飛ばして  
遠くへ下がらせた。さすがは召喚獣、点数が一桁でもゴリラ並みの  
怪力があるだけはある。いつかは軍事利用されるんじゃないのかな？

「ク、避けたり防ぐことだけは上手いのね…」

それは僕のことを臆病って言ってるのかな？

「お褒めに預かり光栄です、Aクラス生徒さん」

「でも、防いでばかりじゃ勝てない！」

それでも木下さんの自信は揺らがない

まあ、それを打ち砕くことが目的なんだけど

「そういえば、君ってあの木下優子さんか？」

さつきからずっと疑問になっていたことを聞く

「え？ そうだけど、アンタはあたしのことを知ってるの？」

知ってるって訳ではないんだけど、噂には聞くよ

「評判程度だよ。なんでも勉強が出来て、他人に優しく、他の生徒の勉強も手助けするようなとても理想的な生徒だって聞くよ」

「へえ、で、それがどうしたの？」

ククク、そういう人が一番挑発し易いんだよ

長瀬が良い例だね

「いやあ、ただ、良く演じてるなあって思ってたね」

そう言つと、ピキッと額が動いた気がする

「…どういう意味よ？」

「分からないのか？ 良く演じているなあ、と言ったんだよ」

この人みたいな人は何人も見てきたからね。どの人も  
本質はかなり悪質だったけど

「あたしが演じている？ なに馬鹿なことを言ってるのよ」

「僕は君みたいな人を何十人も見てきた。だから  
演じているかを見分けるくらい造作でもないことだよ。  
だから言わせてもらうけど、呆れるなあ」

「うるさい…」

「うるさい？ 僕は大きな声を出した覚えは  
無いんだけど？ うるさいの正確の意味は、  
”音量が個人の聞ける範囲を超えてしまつて  
耳障りになる”ってことなんだけど、僕は  
いつ大きな声を出したのかな？」

「黙れ…！」

「それにさあ、優等生を演じても  
なんの得になるのさ？ 自己満足？  
達成感？ 僕からすれば過大評価されて  
無理なお願いを言われるから嫌だなあ」

「黙れって言ってるでしょ！」

怒りに任せて突っ込んでくる

はい、ざーんねーん

盾で殴り飛ばして退かせる

「そうやって怒り任せに突っ込んでやって…はつきりと言わせて貰うよ、君は優等生の資質はないね。あそこの長瀬みたいになにかしらの挑発された時の落ち着きが君にはまったく無いんだよ。だからそうやって何回も吹き飛ばされているんだよ」

もう戦争のことはまったく忘れて僕に対しての憎悪だけで突っ込んでくる。もう僕を叩き潰すってことしか考えていないね

何度も何度もランスを振り、突き刺せば防がれる。振り下ろせば蹴り飛ばされる。なにも通用しない

「なんでよ……なんでなのよ!」

「長瀬が言っただろ、君はどうやって僕には勝てないって。まあ、君を苛めるのもそろそろ飽きたし、決めようか」

召喚獣をかなり遠くまで下がらせる

「なによ、怖気づいて逃げるの!?!」

「冗談！ 君の近くに居るのは危ないからね」

召喚獣がポケットから一つのスイッチを取り出す

「な、なにを…」

「今から見せてあげるよ」

スイッチを出すや否や、僕はニヤツと邪悪な笑みを浮かべる

「爆破」

一瞬の出来事だった

その言葉を口にした瞬間、スイッチを押すと、  
木下さんの召喚獣が大爆発を起こした



《Aクラス木下優子 日本史0点》

驚愕なあまり口を阿呆みたいに開けながら、  
自分が負けたことに気付き、一度も攻撃が  
当たらなかったことにも気付く

「しょ、勝者、Fクラス仲野宮！」

あははははは！ あんなに自信満々だった顔が  
あんなにだらしない表情になっているよ！

仮面を被っていたことも含めて、僕の中では  
木下さんの評価は最早この学園最低クラスだよ

うん、長瀬と同じぐらい嫌いになったよ

「腕輪……」

誰かがそう呟く

そう、これが僕の腕輪の能力さ

所謂、超小型爆弾だ

点数を二十点使用するたびに一つの超小型式の爆弾を  
出現させ、裏に粘性の塗装があるから相手にくつつける  
ことが出来る。で、ボタンを押すと同時に”ドーン”だ

今回使用した超小型爆弾はおよそ二十個

したがって点数もかなり下がってしまったよ

《Fクラス仲野宮浪都 日本史259点》

「ば、爆弾!？」

後ろで吉田くんが驚愕の声を上げる

腕輪の能力は始めて使ったなあ

うん、やっぱり得意科目だと良い点数が取れるよ

「仲野宮、やっぱりてめえ…」

代表が僕のことを睨みつける

あはは、なにをそんなに怒っているのかな？

「あはは！ 戦争は嫌いだからね、悪いけど前線には長居したくなかったんだ」

「明久と島田が隠してたのはこのことか…」

代表は頭を抱えながら呆れている

まあ、僕が真面目にやれば二つのクラスぐらい簡単に落とせただろうからね

「僕が頼んだんだよ、軍事利用されるのなんて嫌だからね」

「どこまでも自己中心的な奴だ…」

それより、まだもう一戦残ってるんだよ？

これに勝てば僕たちFクラスの勝ちだ

「まあ、文句は最後の一戦が終わってからにしてくれ。  
後、木下さんもいい加減退いてくれないかな？ 君がそんな  
ど真ん中で座ってちゃ戦えないんだよ」

さっきから啞然としていたのか座ったまま動かない木下さん

はつきり言つて邪魔なんだよね

「おい、木下優子さん？」

「ッ…！ 分かったわよ…」

やっと退いてくれる

「あのさあ、なにをそんなに落ち込んでいるんだ？ そんなに  
僕に負けたのが信じられないの？ でも、負けたのは事実だよ。  
君がどう否定しようが、負けは負けだ。なんなら、君にもう一つ  
良いことを教えてようか」

僕は一枚の紙を木下さんに渡す

残念ながら連絡先ではないけど

「こ、これは!？」

その紙を見て啞然としている

「分かったかな？ 君はどう足掻いても僕に勝つのは十年早いよ」

そして、最後に止めを刺す

「雑魚はさっさと消え失せてくれ」

その言葉で薄っすらと目に涙を浮かばせながらも僕を睨みつけ、引き下がる

ククク、とりあえず雑魚は片付けたね

問題はこの人だ

長瀬は僕の性格を良く理解しているし、あまり認めたくないけど行動も少々読まれている

点数はそれなりに高いけど、警戒するまでもないね

油断すると足元を掬われる

「これでやっと、アンタと戦える……」

「そこまで僕が気に入らないのか？ あはは、気に入らない奴は片っ端から潰していく、とても

優等生さんのすることには見えないなあ。あはは!!」

僕のテンションも上々

今は気分が良いよ!

姫路さんの発言で笑われ、望んでもいないのに  
召喚獣勝負をさせられ、仮面優等生さん一人の自信を  
粉々に砕き、さらには大嫌いな人を潰せる!

こんな最高の日はないよ!

「アンタが言えることじゃないでしょ!」

「ほら、その声を荒げない! そんなに頭を  
堅くするんじゃない、もっと朗らかに行こうよ!」

「は! 昔のことを引き摺ってるあんたに  
言われたくはないね!」

「昔のことを引き摺ってるのは君の方だろ? 最近ずっと  
僕の近くに現れるし、なにかしら僕に対しての復讐計画みたいなのを  
立てているのは丸分かりだよ。まったく、そこまで憎んでいるなら  
一思いに殺して欲しいよ! それだとなにも苦しむ必要が無いしね  
!」

「アンタなんか殺す価値もない頭のぶっ壊れた屑よ!  
浪都なんかを殺して警察に捕まるぐらいなら死んだ  
方がマシよ!」

「“死”という言葉は考えて使う物だよ？ その一言で全てを持っていかれたり奪われたりするからね！」

「他人の命になにも感じないアンタが言っても説得力が無いのよ！なにが“死”という言葉を考えて使え、よ！ 他人の命が危険に晒されようが

笑って見てる浪都に死を語る資格なんかないわ！」

「君こそ僕に対して死を語っているじゃないか。僕が資格がないなら

君も同じようなものだろう？ なら君にも資格なんか無いね」

「アンタなんかと一緒にしないで！ 私はアンタとは違う！」

「君だって僕と同類だろう？ 僕は他人を貶す、君は僕を貶す。対象が違うだけで、行いは一緒だ。自分一人だけ正当化させるのはあまり良い行為とは思わないね！」

「今ここで証明させる！ 私はアンタなんかの屑とは違う！」

「なら僕は君のその自信を粉々に砕いてバラバラに引き裂いてあげるよ！」

高橋先生！ 科目は世界史でお願いします！」

このちよつとした言い合いを終わらせ、世界史のフィールドが出ると、

お互いそれぞれの召喚獣を呼ぶ

「「サモン！！」」

視点― 木下優子

いつもの長瀬とは違う…

普段は温厚で優しいと評判の長瀬が、あの仲野宮が出てくると表情を険しくさせる

それに、過去になにか問題があったような発言も見られる

長瀬と仲野宮はどういう関係なの？

「あ、優子、お疲れ様」

愛子に話しかけられる

さつき不意に流してしまった悔し涙を拭き、愛子と向き合う

「あたしなんか完敗よ…」

「気にすることはないさ。ボクだつてムツリーニくんには完敗だったからね」

でも、あたしは相手を見誤っていたから負けた

自分が絶対あんな屑より強い、という驕りの所為で負けた

「そういえば、仲野宮くんから貰った紙にはなにが入っていたの？ まさか連絡先だったり？」

「違うわよ！ これよ」

あたしは愛子に渡された紙を見せた

「こ、これは!？」

愛子も見ると驚きの声を上げた

それはそのはず、この紙には驚愕のことが書かれていた

《仲野宮浪都

現代国語 402点

古典 520点

数学 427点

科学 451点

物理 431点



日本史659点

現代社会592点

英語673点

保健体育386点

総合科目5264点』

仲野宮の今回のテスト結果だった

その点数は保健体育を除いて全てが400点オーバー

日本史、現代社会、英語は教師レベル

唯一書かれていないのは世界史だけど、それは今回の科目だから  
なのか態と書いてないと思う

そして、総合科目は霧島代表を圧倒的に上回る

あたしはしばらくこの紙に書かれていた事実を信じられなかった

仲野宮の噂で聞いたのはかなり悪質のものだった

”勉強を馬鹿にする”

”他人を見下す”

”なのに自分は勉強をしない”

”人を平気で傷付け、悲しめばそれを見て笑う”

どれも悪い内容ばかりだった

誰から聞いても彼、仲野宮浪都は屑

でも、それ以上にあたしは怒りが沸いてきた

勉強を馬鹿にして、自分はなにも努力をしないくせに  
ここまでの学力を持っている

それに、噂が本当だと仲野宮は今回のテストのためにはなんの  
予習もせず、授業でも上の空らしい。なんの下準備も授業も聞いて  
いない  
つてことは、このテストは自分があらかじめ持っていた知識で挑ん  
だテスト

それでこれほどの点数なら、予習した上でテストを  
受けたらと思うたら恐ろしくなる

神様も理不尽なことをするわね…

でも、それと同時にあたしはこう思った

これが本当の”天才”だ、って

## 十問 屑と天才と仮面被り（後書き）

いかがでしたか？

主人公の学力の全貌が明らかになりました

総合科目が5000点以上とは…

後、主人公の腕輪の能力も何気無く登場しています

スイッチを押すと爆弾を爆破させる。なんとも現実染みた能力でしょう

優子の扱いが酷い…主人公が嫌いなタイプの人物だったんでしょう

### 今回の質問

作業用BGMはなんですか？

ちなみに僕はかりゆし58とE-T Kingを聞きます

これって名前を載せただけで著作権の侵害になりますか？

なるのなら早めに言ってください

～睡眠～

## 十一問 屑と天才と大爆発（前書き）

遅くなりました

最近はこちらとずっ忙しくなってます

8月15日以降は得に忙しくなって、素早い投稿はその月の終わりまで無いと思います

そうなる前に出来るだけ多く投稿しようと頑張ります

今回はちよつと短いです

（後書きにアンケート）

では、十一話です

## 十一問 屑と天才と大爆発

僕たちの召喚獣が対峙している

長瀬の召喚獣は侍のような姿だ

防具はあまりなく、着物に刀と時代劇に出てきそうな姿だ

男物の着物だけど、女物だと動きにくいのかな？

そして、点数は……

《Aクラス長瀬流歌 世界史579点》

「ご、500点台！？ あんなのにどうやって勝てって言うんだよ！

もう殆ど600点近いじゃないか！」

誰かがそう叫ぶ

おいおい、高が500点台でなにをそんなに騒いでいるんだ？

やる事はないと思うけど僕が真面目に勉強すれば全教科500点オーバーに出来るよ？ 面倒だけどね

それでも、殆ど600点だね

やっぱり幼い頃に勉強を教えていたのが仇になったのかな？

「どう？ これでもかなり勉強してるのよ、私」

「しないと”天才”だなんて呼ばれないだろうしね」

対して僕の召喚獣

相変わらずの機動隊の戦闘服に盾

唯一違うのは銃だ

今回の銃はこの召喚獣最高クラスの武器だよ。だって世界史は

《Fクラス仲野宮浪都 世界史723点》

僕の一番の得意科目だもん

召喚獣は片手で盾越しに対物ライフルという科学的且つ論理的に  
ありえない

姿をしている。幾ら筋力が高くてもこれは人間学的には決して起こ  
り得ないことだよ

「ひええ！！ な、700点台だぞいつ！？ なんでこんなに  
高い点数が

ホイホイと出てくるんだよ！？」

でも、長瀬の他の科目がAクラス平均とあまり変わらないけどね

確か一科目が大体300点だったけ？

総合科目は3691点、久保くんには二百点近い差を付けられている  
だから実質は学年四位だね

「や、やっぱり馬鹿げた点数ね、アンタの世界史は……」

「お褒めに預かり光荣だよ、天才さん。でも、僕なんか  
君に遠く及ばないよ。いやあ、なんでも出来て、素晴らしい人格で  
ある

長瀬さんはまったく及ばない！ 対峙する資格すらないぐらい弱い  
僕なのに。

だって僕は世界一弱い人間なんだもん、君になんか一撃で倒される  
よ！」

笑顔で長瀬を褒める

勿論、全て嫌味だけど

「言ってくれる！ 行け！」

刀を抜いて襲い掛かってくる

ちッ、ライフルじゃ部が悪い

これは武器の選択を誤ったかな？



なんとかその攻撃を盾で防ぐ

「どうしたの？ さっきの勝負での威勢が殆ど感じられないんだけど？」

「良く言ってくれるね、遠距離型の銃を持っている僕のものにもなってくれよ。これなら警棒の方がマシだ」

本音だよ。対物ライフルって大きい上に重いから幾ら召喚獣でも動きが鈍くなるんだよ

「貰った！！」

盾の隙間から刀を突き刺した

それは脇を少し掠ったが、それでも点数は減っていた

《Fクラス仲野宮浪都 世界史703点》

「随分動きが鈍くなってるけど、本気でやってるの？ 手加減するなら本当に殴るわよ？」

「暴力反たゝい！ 暴行罪は学歴に支障を齎すよ？ あ、それと手加減なんてしていないさ。これが僕の全力だ」

手加減なんてしたら足元を掬われる

長瀬には僕のことを知られ過ぎたからね

「へえ、なら私はアンタのことを買いかぶり過ぎたみたいね」

驚くことは無いじゃないか、僕は人類最低で最弱の人間  
なんだから。正直に言つと蟻一匹に殺される自信だつてあるしね

これを期に長瀬は一気に攻め込んでくる

殴る蹴るなどを繰り返していき、その度に僅かながら僕の  
点数が削られていく。二百点も差があるから一辺に削られないのか  
な？

《Fクラス仲野宮浪都 世界史683点》

《Fクラス仲野宮浪都 世界史663点》

《Fクラス仲野宮浪都 世界史643点》

ETC...

《Fクラス仲野宮浪都 世界史3点》

一桁にまで下げられた僕の点数

もう警察官をボコボコにする侍だね

とてもシユールな光景だよ

「呆れた…これがアンタの実力なの？ 点数は取るだけ取つてお  
いて、  
見掛け倒しにも程がある」

それは何回も言われた台詞だよ

しかし、僕にも一言言わせて貰うよ

「まったく、『こんなに時間が経っているのにまだ気付かないのか？』」

「……え？」

意味が分からないのか首を傾げている

この程度のカラクリにも気付かないなんて、”天才”さんが聞いて呆れる

「君には本当に呆れるよ。ここまでしたのに、まだ気付いていないのか？」

「…どういう意味よ？」

その問い掛けを無視して、召喚獣を操作する

「…どういっつもり？ 武器を捨てるなんて、試召戦争じゃ自殺行為に等しいわよ？」

そう、僕は対物ライフルと機動隊の盾を放り投げた

もうあれは邪魔にしかないからね

「君みたいな無能には武器なんて必要無いんだよ」

「嘗めたことを言ってくれるわね！ さっきまでゴゴゴにやられてた癖に！」

考えなしに突っ込んでくる長瀬の召喚獣

読んで字の如く、本当に無能で無脳むのうだね

「君は一つ大事なことを忘れているよ」

刀を頭に向かって振り下ろしてくる

まさに僕にとっては最高の状況だよ

「…しまった!!」

どうやら思い出したみたいだね

でも、もう遅い

「僕が柔道一級だつてことをね！」

振り下ろしてきた腕を掴み、背中をくつつけるように腕を掴んだまま担ぐ

そして、その腕を力いっぱい振り下ろす！

《Aクラス長瀬流歌 世界史537点》

一本背負い、決まったね

「ク…そういうばそうだったわね…あんた無駄に柔道が上手かった」

「無駄とは人聞きの悪い！ 僕にだって昔は目標ぐらいあったさ！ 柔道はそのための第一歩のつもりで始めたんだ。今となっては無意味だけど」

それよりも、急に動きが素早く鋭くなった僕の召喚獣を見て長瀬は啞然としていた

僕はそれを見て嘲笑う

「あはははは！ まさか本当にこの僕が君程度の存在に追い詰められているとも思ったのかい？ 馬鹿馬鹿しい！ 君程度の存在に追い込まれるなど愚の骨頂！ 恥だよ！」

それに、僕の作戦に長瀬はまったく気付いていない

そこがまた馬鹿馬鹿しくて仕方が無い

「今までの…」

「そう！ 演技だよ、え・ん・ぎ！ 君の攻撃が全て僕に当たっているとでも思ったかい？ 点数が減っているから

効いているとも思っただのかい？　そこがまた馬鹿だって言っているんだよ！

僕がなにをしているのかが本当に分からないのか？　分からないだろうね。君みたいな馬鹿には説明してやらないと一生分からないだろう！」

怒りで頭が噴火するのかわせるぐらい赤くなっている長瀬<sup>てんさい</sup>さん。

あははははは！！！！　傑作だ！！！！

「考えてみる！　どうして僕の点数がちよっとずつ減っている？　どうして僕の点数は二十点<sup>……</sup>ずつ減っていた？」

「……まさか！」

「そう！　今から君に見せてあげるよ、最高の一撃をね！」

僕の作戦をようやく理解したのか長瀬の顔が青くなっていく

「Ladies and gentlemen, please Give your attention to the Center of the field! As I, Routsu Nakanomiyama, gives a very special gift To A "genious" who can only look down on people  
!」

懐から一つのスイッチを取り出す

木下さんにとっては二度と見たくはないだろうそのスイッチ

四角く、その四角の中心にある一つのスイッチ。そして、その物体の頭から出ている一本のアンテナ

僕の召喚獣は僕と同じく極上の笑みを浮かべている

「ご覧あれ！ 私、<sup>わたくし</sup>仲野宮浪都の最高傑作であり、最高の光景です！ あ、それでは皆さんご唱和ください！

L e t ' s   B l o w   E v e r y t h i n g   U p !

大爆発

その言葉に相応しいほど大きな爆発が辺りを包み込む

その大きさはさっきの木下さんの爆発が可愛く見えるほど大きく、威力がとてつもなく大きかった

その規模は、Aクラスレベルの召喚獣なんて十体は軽く瞬殺出来るくらい大きかった

それが一体だけの召喚獣に向けられたのなら、必然的に…

《Aクラス長瀬流歌 世界史0点》

戦死だ

『う、うオオオオオ！！！！！！！』

会場の全員が硬直していたら、一斉に雄叫びのような歓声が響き渡った

『す、すげエ！ 五百点台が一瞬で消し飛んだぞ！』

『見直したぞ仲野宮！』

『もう屑なんかって呼ばねえ！』

『長瀬さん大丈夫ですか！？』

うん、僕には温かい歓声だね

温か過ぎて火傷してしまいそうだよ

特に最後の人、あんな天才<sup>かば</sup>を心配するなんて、涙まで出てきそうだよ

「アンタ…最初から…」



「そう！ 僕はこの一瞬のために全てをやっていたんだ！

止めのつもりで言うケド、君の攻撃なんて一度も当たっちゃいないんだよ！

あんな遅くて鈍い攻撃なんて当たる方が難しいと思うなあ！ まあ、当たれば僕でも拙いことになっていたとは思うケド」

最後の言葉を言うと、無気力だった長瀬の顔にちよつとだけ気力が戻った

「浪都は…私のことを警戒していたの？」

「警戒？ 悪いけど君程度の存在なんて警戒するにも足りないぐらいの雑魚だからね。いや、雑魚は魚に失礼か。まあ、学年三位というぐらいだから攻撃は怖かったケド、全然支障にはならなかったね！」

でも、完全に潰すことはできなかったみたいだよ

多分最後の言葉が効いたみたいだね

怖かった、つまり少しでも警戒した

僕としたことが…完全に自分で自爆したね

あ、そういえば僕にはまだやることが残っていたね

「高橋せんせー、一つお教えしないといけないことがあります」

「はい？ 为什么呢？」

「実は…」

高橋せんせーの下へ駆け寄り、耳元でゴニャゴニャと言う

聞いた途端に「え？」という表情をされた

「では、結果発表です！」

この言葉で教室が静まり返る

Fクラスにとっては待ちに望んだ瞬間

Aクラスにとっては学園生活で最悪の結果発表

だったはずだけど…

「Fクラス仲野宮浪都の反則により、Aクラスの勝利です！…！」

そこをさせないのが僕なんだよねえ



## 十一問 屑と天才と大爆発（後書き）

いかがでしたか？

屑っぷり全開の主人公でした

罵声、貶し、さらには騙しました

長瀬にさらに強く憎まれたのは言うまでも無いですね

最後の辺りのは英会話の訳文は自身で調べてみてください

## アンケート

正直に言うと、主人公を誰とくつつけるかがまだ決まっています！

長瀬とはくつつけません！ 別に嫌いから好きに変わるわけでもありませんし、正真正銘主人公を心の底から嫌っています！

だからくつつきません！

でも、自分でも誰とくつつければ良いのかが分からなくなってきました

でも誰かとはくつつきたいです！

そこでアンケートです

主人公、”屑”仲野宮浪都を、誰とくつつけて欲しいですか？

原作キャラならオツケーです

ただ、瑞希、翔子、愛子、秀吉を除きます

作者の中では三人とも原作キャラとの関係を崩したくないので

秀吉なんて男ですよ？

一人一票までです

締め切りは九月の終わりです

く睡眠く

## 十二問 屑と敗北とみかん箱（前書き）

今回は色々なことが起きます

とにかく展開が早過ぎです。作者も自重しています

ですがとつととAクラス戦を終わらせたいが為に一話に詰め込んでしまいました。後、今回出てくる話では時期が間違っていますが、無視してください

では、十二話です

## 十二問 屑と敗北とみかん箱

〽三人称〽

「Fクラス仲野宮浪都の反則により、Aクラスの勝利です!!!」

その一言でAクラス教室の中に居た全ての人が啞然とする

それは、勝利を確信していたFクラスや、絶望を感じていたAクラスも含めている

そして、勝負に負けたと思っていた敗者の本人達、流歌と優子も啞然としていた

『…ちよつと待てエエ!!』

大絶叫

目の前に起きた現実が理解できていないらしい

そして、そんな大騒ぎを起こした本人、仲野宮浪都はただ微笑みながら見ていた

「反則!? 浪都が反則なんて…」

「事実だよ。僕みたいな屑がフェアに戦うとも思ったのか?」

「常識だよ」と言いながら教室を出て行く浪都

その背中に嵐の様な罵声が浴びさせられる

『見損なったぞ!』

『やっぱりお前は卑怯者だ!』

『反則なんかするんじゃないエ!』

『二度とこの学校に来るんじゃないえよ!』

だが、そのどれにも大した反応を示さず、そのまま教室を出て行った

五回戦勝負を戦っていた十人が啞然とする中、ただ一人だけ冷静な人物が居た

「高橋先生、反則ってどういう意味ですか？」

最後に浪都と戦った相手、流歌だった

「彼が自分から告発しました。どうやら彼によると、テスト中に教科書やノート等を見ていたそうです。それは明らかな反則行為です。なのでこの試合は反則試合としてAクラスの勝利になります」

” ノートを見ていた ”

明らかな反則行為



それを行い、反則負けした浪都

勝利していたらFクラスがAクラスの設備を手に入れるはずなのが、

一瞬にして崩れさった。勝利まで一歩手前なのにそれを意図的に逃した

浪都に怒りを感じる者はかなり多かった

勝つために努力し、作戦を練ってきた代表こと坂本雄二は激怒しており、

もし今この瞬間に浪都に会ったら殴り倒しそうな勢いだ

木下秀吉も自身の姉が侮辱された上に倒されたことで少なからず怒り

を感じており、さらにはそれが反則での勝利だったのがさらにそれを増幅させている

誰も反則を行ったと疑わない中、一部の者はこの事実疑問を感じていた

くAクラスく

「どうしたの、長瀬？ やっぱり貴方も…」

「ええ。絶対に違うと思う」

戦った本人である流歌と優子はこの事実を信じる素振りは見せなかった

得に優子は、その本人の成績を見て、幾らノートを見ながらテストを

受けていてもあれほどの高得点を取れるとは思っていなかった

Fクラスサイドでも疑問に感じている者が居る

直接話をした明久と美波も例外ではなかった

「Fクラス」

「ねえ美波？」

「なに、アキ？」

「これって信じられるか？」

「浪都の反則負けのこと？ 全然。  
アイツの頭脳は本物よ。それはウチ等が一番  
分かってるしね」

戦争を語っていた浪都はとてもカンニングやインチキでの知識とは思えないほど深く知っていた

「僕もそう思うよ。浪都はインチキなんかする必要が無いと思うしね」

まったく浪都を疑っていなかった

くAクラスく

「どうかしたの？」

二人が不可思議な表情をしていたからなのかクラスメイトの愛子が心配そうに訊いていた

「愛子、貴方はどう思う？」

「どうって、なにが？」

「浪都が反則を行ったと思う？ 私と優子には思えないんだけど…」

「うーん…ボクは一年の終わりに転入してきたばかりだから、彼のことはなにも知らないんだけど、見た目からすればあまりそうは思えないかな？」

「見た目？」

「うん。彼、あの性格の悪さを無視したら結構かわいいと思うよ？」

” かわいい ”

浪都にはまったく似合わなさそうなその表現

しかし、実際に良く見てみると浪都は確かに少々女顔だった

いや、少々では無くそれなりにだが…

「今思えば確かに… 秀吉ほどではないけど、仲野宮も  
ちよつとだけ女顔なんじゃないの？」

「それでも” かわいい ” とまでは…」

「多分二人共彼の性格を知っているからだよ。無意識に  
過小評価してあまり気付いてないと思うけど、ボクから見たら  
結構かわいいと思うよ？」

だが、今はそんなことは関係ない

問題は浪都がカンニングや卑怯な手段を使ったか

「そんなことより、今は浪都が嘘を言っているのか  
本当に白状したのかが分かりたいの」

「でも、それって本人に訊かないと分からないんじゃないのかな？」

だが、とうの本人が正直に白状する可能性は極めて低い

今回の戦闘で浪都は学園が誇れるほどの高得点を叩き出した

普通ならば”頭が良い”と認識され、浪都の評価も上がるはずだが、  
本人はそう簡単にそれをさせるのだろうか？

評価が上がるということは、学力が過大評価される

そして、学力の過大評価は戦争への干渉が多くなる

大の戦争嫌いの浪都がそんなことをさせるのか？

答えは”否”

自らが戦線に行かなければならない状況を作るほど、浪都は幼稚ではなかった

今回の戦争では本気で戦えられたが、最後の告発により自分が

天才”

だという事実は消え去っていた

思う存分に暴れた後は証拠がまったく無い、警察で言う”完全犯罪”だ

「全て浪都の計画通りに進んだってことね…ああ！ イライラする！」

手の平に踊らされていただけと分かった流歌も別の意味で激怒していた

「落ち着いて長瀬。でも、いつか絶対に仲野宮を倒す！  
あんな奴に負けたままなんて、あたしは嫌だから！」

「では、最後の勝負を始めたいと思います」

高橋の号令と共に、Fクラス対Aクラスの最終戦が始まった

「Aクラス代表、霧島翔子とFクラス代表、坂本雄二。前へ出てく  
ださい」

「（こうなったら、俺で決めてやる！）俺は翔子に日本史で挑む！  
ただし、内容は小学生レベル、100点満点の点数上限ありだ！」

驚きの内容にAクラスメンバーがざわめき始めた

『おい、これだと満点確定だぞ？』

『集中力と問題に気をつけて読めるかで勝負が決まるな』

誰もが満点を予想していた

「それだと問題を用意しないといけませんね。少々お待ちください」

高橋がコンピューターの前まで行き、問題を作っていく

数分後、二人の代表の前には一枚ずつ紙が置いてあった

視点― 吉井明久

雄二の奴、本当に大丈夫かな？

いや、あんな雄二でも一応は”神童”って呼ばれていたしね！  
負けるはずが無いよ！

『おい、テストが画面に表示されているぞ！』

これで”大化の改新”の問題があるか確かめられる！

《大化の改新                    〃  
   〃 年》

あつた！！

やったよ雄二！ これで勝てるよ！

「そこまで！ では、結果を発表します！」

よし！ これで僕たちFクラスの勝ちだ！

《Aクラス霧島翔子 97点》

《Fクラス坂本雄二 51点》

「3対2により、Aクラスの勝利です！」



僕たちの卓袱台が、みかん箱になった…

視点― 仲野宮浪都

「これはどういうことかな？」

僕は珍しく動揺していた

それはそのはず、太郎の散歩を済ませ、  
自分の教室に登校してみたら、卓袱台が全てみかん箱  
になっていたのだから

これってつまり、Fクラスが負け たってこと？

「吉田くん、これはどういうことかな？」

「あ、浪都か。うん、見ての通り雄二が負けて  
僕たちの卓袱台がみかん箱に変わったんだ」

代表には後で異端審問会に通報しておかないとね

それで償ってもらおう

まあ、みかん箱でもそこまで大差は無いけどね

「全員、さっさと席に着け！ 出席を取る」

乱暴に教室のドアが開くと、ある一人の教師が入って来た

僕にとっては厄介の存在

戦争中はずっと避けてきた教師

学園で僕を軽蔑しない数少ない人たちの一人

そして、長瀬と同じぐらい僕の個人情報を知っている人物

「西村先生、なにしに来たんですか？」

我が文月学園生活指導担当の鉄人こと西村先生

「仲野宮、言葉は慎重に選べ。俺はお前等Fクラスの担任になった。

あれだけ派手に暴れたんだ、その分の補修はきちんと受けるんだぞ」

ちッ、面倒な…

珍しく僕も嫌がってしまった

始めてじゃないの、笑顔以外の表情を見せるのは？

「へえ、あの仲野宮でも鉄人には怖いのか」

「この人には全てが悟られているみたいで気持ち悪いんだよ」

「ああ分かる分かる！ それ凄く分かるよ！ 僕らがなにかする時は

いつも駆けつけて来るし、ちょっと不気味なんだよね」

「お前等三人は補修の時間を二倍にして欲しいようだな…」

大声で本人の悪口を言ったらさすがの西村先生でも怒るらしい

「まあいい。出席を取るぞ。新井！」

『はい』

「青木！」

『はい』

ETC…

「仲野宮！」

「坂本雄二が霧島翔子とイチャイチャしていました」

『なアにイ！！！！！！』

僕がさり気無く言ったこの一言でFFF団全員の殺気が代表に向いた

「な！？ ちょっと待て！ 仲野宮！ てめえはなに言ってるんだよ！」

「あれ、違うの？ いやあ、頭を撫でられたりしてたからてっきりそうだと…」

『なんだとオオ！！！？！？』

「あれのどこが撫でているように見えるんだ！ アイアンクローだろアレは！」

でも、幸せでなによりだよ

『坂本才雄ニイ…』

吉田くんも含めてほぼ全員のFFF団員の殺気が代表に向いていた

これは昼休みが楽しみだ

「次！ 吉井！」

全ての殺気を無視して西村先生は出席を進めた

「雄二を殺します」

「よし、全員来てるな。宜しい」

「良く無えよ！ 明らかに俺への殺気がこの教室に漂っているじゃ

ないか！」

「気のせいだよ代表。それは自意識過剰なんじゃないかな？」

「貴様が元凶だろ！」

「ではホームルームを終了させる。後は担当の先生が来るまで静かにしている」

そう言い残し、西村先生は教室を出て行った

そして、出て行った瞬間…

『諸君、ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷です！！！！』』』

『異端者には？』

『『『死の制裁を！！！！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！！！！』』』

『宜しい。これより異端審問会を開く』

須川会長くん率いる異端審問会、通称FFF団の儀式が始まった

「ちよつと待て！　どこからその斧や鎌を出した！？

そのロープはなんだ！？ それに一人だけ拳銃を持っているぞ！  
ちよつと待て、そいつは仲野宮だな！ ふざけるな！」

この数々の問い掛けに僕が答える

『それはね、代表。知る必要は無いんだよ。  
いや、君はなにも知る必要は無い。もう君の  
人生はここで終わるんだから』

「ふざけるな！」

『我々は大いに真面目だ。貴様の行いは  
我々異端審問会への冒涇と受ける。それ  
相応の罰を受ける覚悟はあるのだろうか？』

須川会長くんの問い掛けに代表はさらに激怒する

「貴様正気か！？ それ以前に俺は  
なにもしていないし、罪なんかは無え！」

『会長、被告人は我々に応じないと言っている。  
さつさと処刑してしましましょう』

『良い提案だ。ではこれより、被告人坂本雄二の処刑  
を決定する。皆の者、この決断に相違無いな？』

『相違なし、須川会長！ 異端者には死を！  
血肉と悲鳴の制裁を！』

統率力において異端審問会を凌ぐ集団や団体は存在していないと

思う。

ターゲットを抹殺するためなら地の果てまで追ってくる殺人集団、それが

異端審問会さ！ 僕は雇われているただけだけど

そして、武器を持ったFFF団員が代表に襲い掛かろうとすると…

「あ、バカなお兄ちゃん！」

とても幼そうな声が聞こえ、FFF団全員が動きを止める

教室のドアを見ると、そこにはどこか誰かの面影がある、小さな小学生ぐらいの女の子が居た

誰かの妹なのか？

「葉月！ 何しに来たの？」

島田さんが驚きの声を上げる

知り合いなのか？

「お姉ちゃんがお弁当を忘れたから、葉月が持ってきました！」

弁当を片手にそう言った

へえ、偉いねえ

そういうのを見ると、屑と呼ばれている人なら涙が出てくるよ

でも、相手が悪かったね

僕は子供が大嫌いなんだよ

「美波、誰だいこの子は？」

吉田くんが異端審問会ローブから着替えて島田さんに聞く

「島田葉月、ウチの妹よ」

やっぱり？

でも、クソガキは高校になんか来ちゃ駄目だろ

「あ、バカなお兄ちゃん！」

吉田くんも知り合いなのか？

ん、あれ？

『これより異端審問会を開く』

いつの間にか拉致されていた吉田くん



そして、それを取り囲む多くのFFF団員たち

「ちょっと待つて！　僕がなにをしたっていうんだ！」

『被告人、吉井明久は、小さな女の子に手を掛けるという大罪を犯した。よってこの者は死刑とする。皆、この決定に相違は無いな？』

『『『全員、相違ありません！！！！』』』

『有罪、死刑！』

「ちょっと待つ…ぐがごらべしやるがごむの、ああああア！！！！」

吉田くんの断末魔の叫びが聞こえたが、それを無視する

安らかに成仏してくれ

そして、その島田妹さんはクラスをキョロキョロと見回してる

誰か探しているのかな？

「あ、居ました！」

何故か僕に指差す島田妹さん

「久しぶりです、ワンちゃんのお兄ちゃん！」

…え？

「…はい？」

珍しく、僕は目を見開いてポカーンとしてしまった

## 十二問 屑と敗北とみかん箱（後書き）

いかがでしたか？

主人公の反則？負けでした

ですが素直に信じてもらえない主人公

これって喜ぶことですが、本人にとってはイライラすることです

そして、最後は珍しく狂気以外の感情を見せました

”困惑”ですけどね

実は女顔な主人公、見た目は読者様に任せますが、  
これは前から決定していました

〈アンケート途中経過〉

長瀬流歌…一票

木下優子…六票

小山友香…二票

佐藤美穂…一票

マイナーキャラの誰か…一票

島田美波…一票

島田葉月…一票

吉井玲…二票

小暮…一票

現在ではこのような状況です

優子が圧倒的に人気ですね（笑）

現在でも続けているので投票は感想欄で自由にしてください

### 今回の質問

小説家になろうでのお勧め完全オリジナル小説はなんですか？

ちなみに作者のお勧めは『そこにカイロスはいるのか？』という小説です

（睡眠）

### 十三問 屑と仔犬と犯罪者（前書き）

次話投稿が遅れました

言い訳としては…部活です！

今回は前半ではキャラ崩壊。主に主人公の

そして後半はまたしても重い話

なんとかバカテスの雰囲気を出そうと頑張りましたが、  
やっぱり最後は重い話になってしまいました

では、十三話です

### 十三問 屑と仔犬と犯罪者

「お久しぶりです、ワンちゃんのお兄ちゃん！」

え？

僕は目を見開いて驚いているが、島田妹さんはニコニコと手を振ってきた

ちよつと待ってくれよ、僕は君なんか知らないぞ？

「え？ 浪都、葉月の知り合い？」

いやいや、違うよ島田姉さん

僕は君の妹なんか知らないよ

「知り合いな訳ないだろう。僕は今日始めて会ったんだから」

「違います！ 葉月はワンちゃんのお兄ちゃんとは会ってます！ 初対面じゃないです！」

そんなに必死に言われても、僕には記憶が無いんだから

僕は胸の辺りで腕を組んで記憶を穿り返した

うーん…残念ながら記憶にないね

「ねえ葉月、具体的にはどこで会ったの？」

「ワンちゃんのお兄ちゃんとはこの前お散歩していたら会いました！」

ああそうか、僕って休日は昼間に太郎の散歩をするからその時に会ったんだ

でもそんなに印象的だったかい？

「散歩？」

「はい！ ワンちゃんのお兄ちゃんは可愛いワンちゃんと一緒に公園

で遊んでましたよ！ 凄く楽しそうで、葉月にもワンちゃんを撫でさせてくれました！」

ちよ、それは言わないでくれよ！

ほらあ、クラスメイトたちが疑わしい目で僕を見てるじゃないか！

これじゃあ僕のキャラが台無しだよ！

「仲野宮が…」

「犬と楽しく遊んでるだつて…？」

「似合わない…」

そんな目で僕を見ないでくれ！

なに「面白いことを聞いた」って顔になっているんだよ！

僕には軽蔑と憎しみの目で見てくれ！

「すっごく楽しかったです！ 公園の子とも全員遊んでたりして、ワンちゃんも凄く楽しそうでした！ ワンちゃんのお兄ちゃんもいっぱい笑ってました！」

それ以上は言わないでくれ！

「ほお、仲野宮、お前にも人間らしい一面があるんじゃないか」

「か、勘違いしないでくれ代表！ それに、僕が犬好きなのに文句でもあるのか？ あるのなら言ってみろ！」

…しまった！ つい感情的に…

「分かった分かった。ふん、犬好きか…なら今度の戦争ではこうしてあれをすれば…」

なにを企んでいるんだ！？ クソオ、やっぱり知られなくなかったよ！

「浪都って犬が好きなんだ？ 意外とかわいい所もあるじゃない」

「うん、浪都っていつもこんな性格だと思ったけど、実は優しいんだね。」



子供とも遊んであげてたって言ってるしね」

そんな微笑ましい顔をしないでくれ！

ちッ、なにか打開策は…思いつかない！

「葉月はあのお礼がしたくて来ました！」

完全に迷惑なんだけどね、僕からすれば

多分あの時は太郎を運動させようと近くの公園に行ったんだと思う

そこで、子供達が丁度良く居たから太郎に遊ばせただけなのに…

「あの、ちょっといいですか？」

姫路さんがもじもじしながら皆に訊く

これ以上になにか言う必要でもあるのか？

「なに、姫路さん？」

「実は、私も…この前仲野宮くんを見かけました」

君もか！ まったく、なんで僕はこんなに遭遇率が高いんだよ！

「へえ、姫路さんも。どこで？」

「ペットショップです」

最悪だ！ 一番見られたくない場所で見られてしまったじゃないか！

「……ペットショップ!?」

全員が驚きの声を上げる

拙い、あそこでしたことが知られると僕の作り上げてきたキラガ  
ラが

一気に崩れてしまう！ これじゃあ誰もが僕のことを避けなくなる  
し、

大好きっていうレッテルだけを貼られてしまう！

クソオ、僕の理想の学園生活がア…僕が作り上げてきたイメージが  
ア…

「ペットショップなんかでなにしてたんだ？」

「い、犬の太郎のご飯を買おうとしたんだよ！」

なんとかして誤魔化さないと…

「そうだったんですか？」

「な、なにかおかしいことを言ったかい？」

駄目だ、ちょっと焦り過ぎてる

なんとかしていつも通りに戻らないと…

「いえ、ただ…」

「「「ただ???」」」

姫路さんの言葉にクラス全体が興味を持つ

ちよ、それ以上先は…

「仲野宮くんは仔犬と触れ合いが出来るコーナーで凄く  
楽しそうに遊んでいましたから違うかと…」

「「「なにイ!!!???」」」

「ちよ、それは言わないでくれえ!!!」

僕の魂の叫びは虚しく、全員が驚きの声を上げる

ああ、終わった…僕の学園生活が…

「まさか…仲野宮にそんな趣味があつたとは…」

代表は啞然とした表情で僕を見ている

「昨日の狂気ぶりが嘘のようじゃ…」

木下くんはちよっと引いてる

驚愕するのはまだ良いけど引くのはやめてくれ!

「いや、でも浪都って秀吉みたいに結構女顔でしょ?  
そう考えると似合うんじゃないのかな?」

吉田くんが見直したかのように言う

その箇所は触れないでくれ！ この顔はコンプレックスなんだよ！

「……新しい商売」

ムツツリーニくんは良い物を見つけたような顔になってカメラを容易し始めた

君はいつたい僕のなにを撮るつもりなんだ！？

「ちょっと待ってくれ皆！ 僕がそんなことをするわけが…」

「……証拠写真」

「何時の間に撮っていたんだよ！？」

ムツツリーニくんはポケットの中から一枚の写真を取り出した

その中には僕が笑顔でペットショップで遊んでいる姿だった

「ムツツリーニ、お前は何時の間に仲野宮の写真を撮ったんだ？」

代表も疑問気にムツツリーニくんに訊いた

「……依頼された日の帰りに偶然見掛けて撮っておいた」

「でかしたぞ」

依頼とはなんだ？ 僕に関する依頼なのか？

そんなの僕の行いの報復ぐらいしか思いつかないなあ

「あ、それよりあと少して授業が始まるんじゃないのかな？」

「あ、いけないもうこんな時間！

葉月、お弁当ありがとう。でも後少して授業が始まるから、悪いけど一人で帰れる？」

「はい！ お姉ちゃんも頑張ってください！

バカのお兄ちゃん、ワンちゃんのお兄ちゃん、さようなら！」

僕としては君の所為でかなり苦しんでいるんだけどね

もう二度と来なくて良いよ

島田妹さんは元気に手を振って教室から出て行った

はあ、とんだ災難だったよ…

「そういえばどうなってるんだ、依頼は？」

お前なら一日で大体は達成できるはずだろ」

「……今回は調べるのに困難だったが、これだけしか集まらなかった」

ムツッリー二くんは代表に一枚の紙を差し出している

なるほど、僕を調べたんだ

別に僕は知られても困ることなんて無いけどね

でも勝手に人の個人情報を探るのは関心しないなあ

「雄二、なんだそれ？」

「ムツツリー二に仲野宮について調べてもらったんだ。これだけしか集まらなかったらしいが」

「あのムツツリー二でも情報が入らなかったのか！？」

「……情報はあった痕跡があるが、どうやら全て消されていたようだ」

僕がやったんだけどね

購入履歴、前の学校の入学時の記録、昔住んでいた住所などは全てハッキングして僕に関する情報は消去したからね

知られて面倒になるのは僕だ

犯罪だけど仕方の無いことだよ

「フン、目の前に本人が居るんだ。事実の確かめにもなるし、読んでおいて損は無いだろ。なあ、仲野宮？」

「知りたければご自由に」

「なら読むぞ。」

仲野宮浪都、1994年6月23日に京都府京都市に生まれ、その翌年に父親の仕事の都合でこっちに引っ越してきた。家族構成は父親、母親、姉、妹、仲野宮の五大家族。父親は警視庁機動部隊隊員であり、

警視庁爆発物処理班班長の警察官、仲野宮<sup>なかのみや</sup>零<sup>れいと</sup>都警<sup>れいと</sup>部。そして、中学一年から

親戚の援助を受けながら一人暮らしを始め、今に至る

どこか間違ってる所でもあるか？」

へえ、これは頑張って調べたものだね

「いや、どこも間違えていないよ。いやあ、良く調べたね。

関心関心。良く頑張りました！ まあ、僕みたいな屑を調べても無意味なんだけどね」

「てめえは意外にも大家族らしいな、それに父親が機動隊であり爆発物処理班

でもある。そんな家で育ってんのになんで一人暮らしをしてんだ？」

「僕にだって理由っていうのがあるんだよ」

「でも、皆もこれで分かっただろ？ こいつ、仲野宮は昔から一人暮らしをしてんだ、つまりあいつの行いを注意する親が居ねえんだよ。

こいつは口クナ育ち方をしてねえんだ」

僕も自分の育ち方はかなり悪いと思うけどね

それも否定しないよ、寧ろ賛同するさ

「あの、坂本くん。そこまで言う必要は…」

姫路さんが気まずそうに言う

「構わないよ。いや、寧ろこれぐらいはなににも感じないさ。何年同じことを言われてきたか分かるか？その年月に比べればこれぐらい大したことでもないよ」

「なんでそんなことを言うのさ！　こういう時はなにか言い返さないと！　悔しくないのか!？」

今度は吉田くんが僕の対応にクレームを付けてきた

「なら君は僕に対しての悪口に全て反論しろとも言つのか？」

「そ、それは…」

「毎日何度も言われる悪口に全て答えていたらキリが無いよ。君は周りの言葉に敏感過ぎだね。もうちょっと”無視”っていうのを覚えた方が良いと思うよ？」

自意識過剰とも言つしね、こういうことは

「明久、こいつには何を言っても無駄だ。文字通り仲野宮は頭がぶっ壊れてるんだよ」

あはは、今更だね



まあ確かに、”注意する大人”と一緒に住んでいなかった僕は自分の行いが悪いことだと言ってくれる人が居なかったけど、良いことと悪いことぐらい分かるよ？ 自分の行動は悪いことだって自覚しているしね。変える気なんてまったく無いけどね

「でも良いことと悪いことの差が分かっているだけマシだろ？  
ましてや犯罪行為擦れ擦れの行動を行う君達よりはね」

「ほお、言ってくれるじゃねえか。俺たちの行動になにか間違っていることでもあったのか？」

うん、典型的な現代の若者の考えだね

「例えば島田さん、君が一番酷いと思うよ？」

僕が急に島田さんの名前を言ったからか  
驚いた表情になる

「ウチ？」

「うん、君以外に誰が居るんだい？ 君が一番酷いと思うね。  
主に吉田くんへの暴行に対してだよ」

ここ数日のクラスでの生活を見る限りはそうだね

「あ、あれは……」

「立派な暴行罪だ。もしかしたら吉田くん  
のご両親に訴えられるかもしれないんだよ？  
警察にだって届ければ最悪の場合は更正所や

少年院に送られるよ。

懲役は15年以下、罰金は最悪の場合は50万円だよ。しかも君の場合は吉田くんが死んでもおかしくないぐらいかなり過激な暴行だろ？ 殺意の有無はともかく、傷害罪により被害者が死亡したら”傷害致死罪”の罪で最低三年以上の有期懲役さ。明らかな殺意があつた場合は殺人罪の罪で最悪の場合は死刑さ。いや、一人殺して死刑にはならないけど、最悪でも無期懲役だね」

僕が暴行罪に関しての様々な罪状を述べると、島田さんの顔がちよつと青くなっていた

そこまで自覚が無かつたみたいだね

「分かるか？ 傷害罪でも行き過ぎれば死刑にもなれるし、ご両親にだつて多大な迷惑になるんだよ。それに罪を認めて少年院から出てても社会じゃ生きて行けないよ。」

何故だか分かるか？ まあ分かり易く言うと、僕が会社の社長だつたら経歴に傷害罪のある人は雇わないと思うよ？ つとこのように社会からは”乱暴な人”っていうレッテルが貼られて仕事が見付からなくなる。犯罪つてそれだけ悪いことなんだよ？。」

でも、島田さんだけに言うのはちよつと可哀想だな

島田さんと同じぐらい犯罪染みた行動をしているのは…あの子だね

「君もだよ、ムツツリーニくん」

「……俺か？」

「うん、君の場合は社会で生きていくにあたって最も貼られたくないレッテルを貼られる可能性が一番高い。それは、”変質者”だよ」

僕がこのことを言ってもムツツリーニくんは首をブンブン振って否定するだけだった

「……そんな事実などない」

反論するが、それを無視して僕は話を続ける

「盗撮罪、盗聴罪、セクハラ行為や痴漢行為だよ。僕にとっては一番馬鹿馬鹿しい犯罪だけだね。」

盗聴や盗撮した内容にもよるけど、最低でも三年の懲役年数に加えて多額の罰金を支払わないといけないんだけど、なにより一番嫌なことは、償った後だよ」

僕の言葉に疑問符になるムツツリーニくん

言ってる意味が分からないなんて、まったくどいつもこいつも…

「考えてみなよ、就職先の会社はわいせつ行為を働いた人物を雇いたいと思うか？」

答えは、”NO”だよ

僕でも雇わないね

「つまり、島田さんの件同様で仕事が出来なくなる。

君達は軽く見てるこの盗聴や盗撮だけど、未来では多大な影響を与えるんだよ？　そしてその経歴は永劫自分と一緒に付いてくる」

とまあ現状で一番危ない人を述べてみた

元は代表の言葉を答えたつもりだけど、気が付いたらかなり話していたね

「他にも器物損傷や不法侵入などもあるけど、言って欲しいかい？」

「…いや、結構だ」

代表も僕に言い負かされたのが悔しかったのか  
嫌な表情をする

あはは、僕を論破するなんて十年早いよ

ちなみに島田さんとムツツリー二くんだけど

ムツツリー二くんはあまり気にしていないみたいだ

相変わらずカメラを磨いている

うん、これだけ言っても方針を変えないのならなにを言っても無駄だね

そして、島田さんは…

色々と考え込んでいるような表情だった

うん、僕としてはそれが一番だよ

「皆さん、遅れてすみません。席に着いてください」

そして、十分ほど遅れて一限目の先生がやってきた

授業は適当に聞き流し、一日を終わらせる

あの後は何事も無く、吉田くんにも話しかけられることもなく  
全ての授業を寝<sup>お</sup>わらせ、僕は帰路に着いている

最近はずっと夏に向けて熱くなって来たのか、  
冬の制服が暑苦しく感じる

「珍しくストーカー（笑）さんにも会わなかったし、  
久しぶりの一人つきりかな？」

そんな独り言を呟きながら、家へと向かう

「なにか用かい？」

しばらくすると、隣に気配を感じた

最初は無視しようとしたけど、気配に  
耐え切れなくなっと思わず振り向くと、  
そこには予想外の人が立っていた

「別に……」

島田さんだった

あれからかなり落ち込んでいるっていうか、  
考え込んでいるみたいだけど、どうしたんだろう？

やっぱりちょっと言い過ぎたかな？

「ねえ浪都……」

「ん、なんだい？」

「あの浪都の言葉を聞いて考えてたんだけど、

どうしたアンタはウチや土屋のことを言ってくれたの？」

突然僕が警告をした理由を訊いてくる島田さん

「うーん…難しい質問だねえ。強いて言つと、嫌いだからかな？」

「嫌い？」

僕の言葉に頭を傾げる島田さん

「うん、僕は君みたいな”犯罪を犯罪と自覚していない人”が大嫌いなんだよ。だから訂正させたんじゃないのかな？」

「”犯罪を犯罪と自覚していない人”…」

僕の言葉に再び考え込む島田さん

「そう。これは警察官だった僕のお父さんの口癖だったんだけどね。

”犯罪者の中で一番性質たぶが悪いのは、凶悪な殺人犯でも、テロリストでもない。一番怖いのは、犯罪を犯罪と認識しない未成年だ”」

何度もお父さんから聞いたこの台詞。

こんな精神状態だけど何故かこの言葉だけは覚えているんだよね

「え？」

「大人なら更正の余地がある。でも、子供がもし犯罪を犯罪と自覚しなかったら、更正もクソも無いんだよ。それどころか、それ以上の犯罪を犯して、もしかしたら人の命まで奪われるかもしれない。だから、少年犯罪が一番性質が悪いんだよ」  
たち

うーん、これはちょっと言っちゃ拙かったかな？

「アンタにも、そんな考えがあるのね…」

「まあ、僕は君に説教なんてする資格、無いし、そんなエライ人でもない。考えだって代表が言っただけにマトモでも無いし、僕自身も自分が”ぶっ壊れている”って自覚しているよ。この言葉を聞いてもこれをどう行動に起こすかは君しだいだ」

しばらく立ち止まって考え込む島田さん

この言葉をどう人生で活用するかは島田さん次第だよ

「えっと、その…」

「なにか文句でもあるかい？」

「ち、違うわよ！ その、ありがとう。浪都は気を遣って注意してくれたんでしょ？」

うーん、どうだろう？



正直僕もあまり分からないかな

「解釈は君に任せるよ。じゃ、僕はこの辺で」

アパートの近くまで着いたので部屋へと戻る

しかし、今日は大変な一日だったなあ

でも、なんであんな話をしたんだろう？

僕はなにをしているんだろう？

### 十三問 屑と仔犬と犯罪者（後書き）

いかがでした？

主人公のキャラ崩壊、それだけ知られたくない事実だったんでしょ  
うね

後最後は美波にフラグ？的なのが立ちましたけど  
違います。もし投票があつたら変更ですが、フラグ  
ではありません。まだ投票は幾らでも受け付けます

〈アンケート途中経過〉

長瀬流歌…一票

木下優子…六票

小山友香…二票

佐藤美穂…二票

マイナーキャラの誰か…一票

島田美波…二票

島田葉月…一票

吉井玲…四票

小暮葵：三票

明久姉と小暮先輩の人氣がかなり上がってきています（笑）

順位がどう変わるかは作者も分かりません

～睡眠～

#### 十四問 屑と悪夢と祭りの準備（前書き）

週末の投稿です

しかし、自分で言うのもなんですけど、つまらないですね今回は  
まったくストーリーの展開も無い、面白い箇所も無い、つまらない  
ですね

タイトルでもお分かりになられると思いますが、  
これが清涼祭編のプロローグです

主人公はどう行動するんでしょうね？（笑）

ちなみに召喚大会で要素を一つ加えました

では、十四話です

## 十四問 屑と悪夢と祭りの準備

とある学園の校舎

その裏側にある人気のない場所で、一人の少年が蹲っている

その周りを囲むように位置するのは、数人の男子生徒

そして、怒声と共にぶつけられる数々の暴行

『お前の所為なんだよ!』

違う、僕じゃない

『てめえさえ居なければあんなことにはならなかったんだ!』

僕の所為じゃない

『お前なんか生きる価値も無いんだよ!』

ヤメロ。チガウ、ボクじゃナイ。ボクハナニモヤツテイナイ。  
ボクハワルクナイ。ゴカイナンドヨ。ボクノセイジャナイ

『死ねよ屑!』

やめてくれ!!!!!!!!!!

「わッ!？」

そう叫びながら、僕は布団から飛び起きる

隣では何事かと思ったのか部屋中を駆け回っている太郎が居る

「あはは、悪いね太郎。なんでもないよ」

少し機嫌が悪そうだけど、大人しく再び布団に潜る太郎

時計を見ると…まだ4時か…

はあ、幼稚園児じゃあるまいし、今時昔の夢を見るなんて

まあ大したことじゃなかったけどね

僕は得に気にすることなく、再び布団の中へと入っていく

清涼祭、ここ文月学園にとっては学園祭のようなお祭り

毎年生徒達が自身のクラスで出し物を決め、  
他所から見学に来る人々を賑わうとても伝統的な  
行事である

各クラスはその清涼祭の出し物を決め、既に製作に取り掛かっている

「一壘へ回れえ！」

…僕たちFクラスを除いてね

「行くぞ吉井！」

「来い須川くん！」

僕などの一部の人を除いてFクラスは元気に野球を楽しんでいた

製作どころか出し物すら決まっていけないのに…

「貴様らああ！！　なにを遊んでいる！！」

「げっ、鉄人だ！」

そこへ鬼の形相で駆けつけた西村先生によって全員が教室へと  
文字通り”叩き戻された”

「出し物すら決まっていらないのに野球とはノンキだね」

「黙れ愛犬家」

「まだそのネタを引き摺っているのか！」

いい加減にして欲しいな…

「さて、まずは…Fクラスは清涼祭の出し物を決めたいと思う」

気を取り直して代表が皆に言う

「まあとりあえずFクラスの出し物討論の進行係を任命したいんだが、

誰かやりたいという人は居るか？」

当然、めんどくさがり屋の集まりのFクラスに立候補する者は居ない僕だってこういうのは嫌いだから、不干渉且つ安全に関わらないことにした

「誰も立候補者が居ないのなら、俺が決める。島田、お前で良いか？」

とにかく仕切らないといけないからね、気が強い人を指名したんだろっ



それだけ取り得みたいなものだしね、島田さんは

「ウチ？ うーん、悪いけどウチは召喚大会に出るから、ちよつと無理と思うけど…」

召喚大会、他所から見学に来た人たちのための試召戦争のデモンストレーション

みたいなものだよ。ちなみに優勝者は景品がもらえるらしいけど

はあ、デモンストレーションのために戦争するなんて、どうかしてる

これじゃあまるで、”新しい兵器を開発できたからそのテストのために

他国に宣戦布告します”と言っているようなものだよ

「そうか…なら姫路はどうだ？」

「わ、私ですか？」

うーん、逆に姫路さんは気が弱すぎるんじゃないのかな？

無理な意見を却下する度胸や皆を纏める統率力に欠けているからね

でも、そう考えると代表が適任なんじゃないかな？

生憎と代表は清涼祭に関しては無関心らしいけど

「姫路さんは仕切り役には向かないと思うよ？」

珍しく吉田くんが良い意見を言う

「それに、瑞希もウチと一緒に召喚大会に出るのよ」

つまり、それはペアで出場ってことなんだね

ここでまた余談だけど、召喚大会は大きく二つのトーナメントに分かれている。個人戦とペア戦で分けられていて、優勝者は一人ずつ出るんだ

「そうか…他に使えるそうな連中は居ねえからな。島田、補佐を就けるってのはどうだ？ これなら仕事だって減るだろ？」

「補佐？ 任命者しだいじゃやってもいいけど」

「そうか。ならここから候補者を二人選ぶから、島田はその二人から選んでくれ」

そう言つと、様々な意見が上がってくる

『仲の良い吉井でいいんじゃないのか？』

『仲が良いって言ったら姫路さんだろ？』

『でも坂本の方が資質があるんじゃないか？』

うーん、これじゃあキリが無いね

「もういいわよ！ ここから候補者を選ぶから、

皆でどっちが良いか決めて」

候補？… 吉井

候補？… 明久

うーん、この二人から選ぶのは難しいね…

「この二人から選べ」

「ちょっと待つて！ 候補者が二人とも同一人物だよ！？」

吉田くんはなにがイケナイって言うんだろう？

『どうする？ どっちが良いと思う？』

『うーん、どっちも馬鹿だしなあ…』

苦渋の選択だよ、まったく

「他人を馬鹿と呼ぶ人こそ馬鹿なんだ！」

「明久、お前が言っても説得力なんか無いぞ？」

「皆なんか大嫌いだ！」

渋々と島田さんの隣に上がっていく吉田くん

「さて、誰が良い案はない？」

「……（スッ）」

すると、一人の生徒が沈黙を守りながら手を上げる

上げたのは、ムツツリー二こと土屋康太くんだった

「はい、土屋」

「……写真館」

君の写真館は放送できるようなものなのか？

「アンタの写真館は拙そうな写真が大半を占めそうだけど、とりあえず書いておくわ……」

そして、吉田くんが黒板に案を書き入れる

『写真館 ” 秘密のぞき部屋 ” 』

そんなタイトルじゃ一発で教師陣に却下されると思うけどね

「はい」

今度は別の男子生徒（名前を知らない）が手を上げる

「なに、横溝？」

「ここはストレートにメイド喫茶と行きたいが、それに一味加えて” ウェディング喫茶 ” なんてどうだ？」

ウェディング喫茶？

「なにそれ？」

「メイド喫茶ではメイド服を着るが、こちらでは女子がウェディングドレス、男子がタキシードを着るなんてどうだ？ 斬新だし良いと思うが」

「へえ、それは良さそうね」

そして、幾つか賛成する声が聞こえる

『憧れる女子也多そうだな』

『確かに斬新なアイデアだし、オリジナリティだってあるぞ』  
でも、反論するものだって居る

『服の調達が大変なんじゃないのか？』

『コストだって馬鹿にならないと思うし』

『それに、結婚式って男子にとってはある人生の墓場だろ？』

様々な意見が飛び交うけど、僕は一切介入しない

うん、まったく興味が無いからね

「はい、静かに！ アキ、とにかく書いて」

「う、うん」

『ウェディング喫茶”人生の墓場”』

案だけではなく、タイトルも斬新だね

「はい」

今度はFFF団リーダーの須川会長くんが手を上げた

「須川、なにか案でも浮かんだの？」

「俺は中華喫茶を提案したい」

中華喫茶って、ラーメンや餃子でも出すの？

「それってなに？ 中華料理を出すとか？」

「いや、違う。手作りのお茶や団子などを出す

本格的な中華喫茶だ。今では中華料理はヨーロッパ文化にかなり汚染されているが、中華料理ほど食に奥深いジャンルは見当たらない。そもそも食というのは…」

以下省略、ようするにお茶や団子を出す喫茶店が良いんだって

「これはマトモな意見ね。アキ、これも書いて」

「う、うん」

書く手が戸惑っている

あはは、内容を理解できていないんだね

『中華喫茶”ヨーロッパ”』

聞いた単語を適当に書いているだけだよね？

その時、教室の扉が乱暴に開いた

《ガラッ！》

「清涼祭の出し物は決まったか？」

さつきFクラスを教室に引き摺り戻した西村先生だった

「さつき黒板に候補を三つ書きました」

そして、見せるのは三つの題名

『写真館”秘密の覗き部屋”』

『ウェディング喫茶”人生の墓場”』

『中華喫茶”ヨーロッパ”』

改めて見るとマトモなのが無いね

「どうやら補習の時間を倍にして欲しいみたいだな…」

『ち、違いますよ！ 全て吉井が勝手に書いただけです！

俺たちは関係ありません!」

『俺たちは馬鹿じゃありません! 全て吉井の責任です!』

「ちょ、罪をそんな簡単に僕に擦り付けないでくれ!」

吉田くんを生贄にして助かろうとするFクラス生徒たち

うわあ、簡単にクラスメイトを売っちゃったよ

「お前等…そもそも馬鹿な吉井を選んだ時点で既にお前達は馬鹿なんだ!」

「貴様はいつか殺してやる!」

まったくの正論に吉田くんは反発している

正論を言っているのになにか文句でもあるのかな?

「まったくお前等は…この清涼祭を期に金を稼いでクラスの設備を向上させるという考えすら無いのか?」

おお、なるほどね

稼いだ分を設備向上の資金に注ぎ込めば少しはマシになるとは思っしね

流石に皆はミカン箱では不満だろうしね

『おお、その手があったか!』



『さすが鉄人、考えも大人染みていてイヤらしい』

「貴様等、補習を二倍では無く三倍にして欲しいのか？」

『『すみませんでした』』』

本人の前で悪口なんて相当度胸があるね

それもよりにもよって西村先生に

『ならどうする？　ここは稼ぎ易い喫茶店にするか？』

『そんなの使いまわされてるだろ。それなら独創さのある  
ウェディングの方が良いんじゃないのか？』

『でもそれだとコストが高過ぎで利益にならないだろ。  
それなら出費の低い写真館が良いと思う』

『馬鹿、ムツツリー二の写真館だと教師に見られたらアウトだ。  
男子は集まると思うが危険が高すぎる』

『でもハイリスクハイリターンの可能性だつて否定できないだろ？』

『そのリスクの所為で営業停止になったら元も子も無いんだよ』

珍しく真面目に討論しているね、Fクラスは

やっぱり金が絡むとやる気が出るんだ

「皆、静かに！」

考えが纏まらない所為か島田さんが手をパンパンと叩いてクラスを黙らせる。やっぱりまとめ役に向いているんだね

「もう多数決で決めるから、皆もそれで良いわよね？  
やりたい方に手を上げて、多かつた方に決定するから！  
はい、写真館が良い人？ 次、ウェディング喫茶が良い人？  
最後に中華喫茶が良い人？ はい、オツケー」

結局は多数決で決まるんだね

まあ、それが一番合理的で論理的だけどね

「Fクラスの出し物は中華喫茶に決定！ 各自役割分担をして、全員が協力すること！ 得に浪都、アンタはいつも寝てばっかなんだから手伝いなさいよ！」

ええ、僕もか？

僕みたいな貧弱人間なんて力にならないと思うよ？

「それならお茶と団子は俺が引き受ける」

「……（スッ）」

厨房を名乗り出たのは中華喫茶に熱烈な拘りのある

須川会長くんとなぜか料理が出来るムツツリー二くんだった

うーん、僕は料理が出来ないから厨房はちょっと無理かな？

「二人とも料理は出来るの？」

「俺が提案したんだ、出来ない訳がないだろ？」

「……紳士のたしなみ」

後者の理由はちょっと納得行かないけど、これで大丈夫だね

「じゃあ、皆には二班に分かれてもらうから！ 厨房

に回りたい人は須川と土屋の所に、ホールに行きたい人は  
アキとウチの所に来て！」

両方とも駄目じゃないか

厨房は料理が苦手だから回れない、接客だって  
嫌われてるしお客さんを苛めちゃいそうだから駄目

出来ることが一つも無いじゃないか

「島田さん、質問」

「なに浪都？」

「僕は食材調達に回って良いかい？」

それ以外に出来そうなのが見当たらないんだよ

「なに言ってるんだよ、浪都は結構可愛いんだから  
ホールに行った方が！ 痛い！ 美波、なんで僕の急所を殴るの！？」

今のは僕でも力チンと来たね

一瞬殴りたくなつたよ

「とりあえず、浪都はなにか理由でもあるの？」

「僕は料理が出来ないし、接客も性格がコレだしね」

そう言つと、「ああ確かに」と呟く島田さん

これに納得できる島田さんを怖く思つたのは僕だけかい？

「ヘッ、まったくの役立たずじゃねえか」

さっきまで寝転んでいた代表がそう吐き捨てるように言う

うん、僕はまったくの役立たずだよ

「あはは、反論も出来ないよ」

「はあ、まあ自分でそう言うなら別に良いけど」

溜め息混じりに島田さんが言う

「じゃあ、僕はテーブルとか食材を持っていくから、後はよろしく」

「うん、」苦勞さん

ホントはサボるためなんだけどね

そもそも僕たちFクラスはテーブルどころか机も無いんだよ？

食材なんて色がヤバそうなのしか手に入らなさそうだし、  
そんな金はない。僕だって生活は苦しいんだよ

僕はFクラス教室を出て、適当に校舎を彷徨っている

うーん、サボったのは良いけど、暇だなあ…

あ、分かった！

他クラスでも苛めようか！

#### 十四問 屑と悪夢と祭りの準備（後書き）

いかがでしたか？

今回はプロローグ的なもので、原作とほぼ同じです

祭り本番では主人公はやはり最低な行為に走るでしょう（笑）

くアンケート途中経過く

木下優子… 八票

吉井玲… 七票

小暮葵… 四票

島田美波… 三票

票数の変化は以上です

吉井姉が優子に追いつきそうです

く睡眠く

## 十五問 屑とサボりと暇潰し（前書き）

今回でアンケートを終了します

沢山のご意見を頂き、作者は嬉しい限りです

結果は、後書きにて

今回は珍しく主人公が黒くなります

あれ？ この小説って主人公が黒くないといけないのに、  
珍しくってなんだろう？

最近主人公が丸くなりすぎている気がしてます

では、十五話です

## 十五問 屑とサボりと暇潰し

暇潰しにAクラスに来たは良いケド、忙しそうだなア

机に布を被せたり、衣装を作っていたり、メニュー製作をしていたり、

とにかく大忙しだった。まるで引越しを数日に控えた家族みただと  
りあえず、誰に気付かれることもなくクラスの進入に成功する

皆自分の仕事で手一杯だからね、こんな大きなクラスなら尚更だよ

「なんの用、浪都？」

「なのになんで君は僕の存在に気付くんだろうね？」

作業に邪魔なのか、髪を後ろで纏めた状態で長瀬が話しかけてきた  
手には金槌ってことは、看板とかの製作を手伝ってるのかな？

「アンタの雰囲気は嫌でも感じられるわよ」

それって喜ぶべきことかな？ それとも嫌がるべきかな？

「やっぱり君は大工仕事なんだね。見かけによらず不器用だし」

「う、煩いわよ！ あんな繊細なこと、やってるだけで眠たくなる  
し…」



なにも変わらないね、君は

悪い意味でだけど

「ま、頑張ってくれよ」

僕はAクラスを後にしようと教室を出ようとする

ここには苛めても面白い反応を見せるのは長瀬以外に居ないしね  
そんなのじゃあ面白くない

「ちょっと待ちなさいよ」

でも、グツと肩を掴まれる

「僕になにか用かい、ストーカーさん？」

「ストーカーじゃないっていつまで言えば気が済むのよ！」

「冥王星が太陽を公転するまで」

「何百年後の話よ！」

「正確に言つと247・74年だケドね」

「真面目に答えるな！」

あはは、いつ苛めても面白い反応をしてくれるなア

「で、僕になんの用かな？」

「浪都、アンタ暇？」

「なんで？」

「学園祭の準備を手伝って欲しい」「忙しい」即答するな！」

どちらかと言うとかなり暇だ

まあ学園祭の手伝いなんてもつと嫌ケドね

「僕は暇じゃあないんだ。それに頼む相手を間違えていないか？」

完全に頼む相手を間違えているね。頼むならもつと優しくして人間として出来上がってる人に頼まないと

「忙しいのならAクラスには来ないでしょ？」

「むむ、痛いところを突いてくるねえ。でも、僕は本当に忙しいんだ。材料とか器具を借りてこないといけないんだ。Fクラスの出し物のために」

本当は別のクラスを苛めに行くためなんケドね

「長瀬、どうしたの？ 誰と話して…」

ああ、また面倒な人が来たね

「やあ優等生さん。頑張って仮面を被っているかい？」

「仲野宮浪都…！」

恨めしそうに僕を睨むのは、先日ボコボコにした似非優等生、木下優子さん。まだ根に持っているのか？

「いやあ、Aクラストップ10の優等生さんに僕の名前を覚えてもらって光栄だなア。うん、僕にはそんな価値も無いぐらい馬鹿で屑人間なのに、どうしてだろうね？」

「反則した癖に偉そうなことを…！」

「悪いかい？ 勝者が敗者の上に立つ、それは世の中じゃ常識さ。君は僕に一度も攻撃を当てられないまま敗退したいんだ、戦争の勝ち負けに関係なく。なら僕がなにを言っても文句は無いだろう？」

あはは、と笑いを付け足して

木下さんは悔しそうな表情をする

「優子、挑発に乗らないで。こいつの話なんてマトモに聞くだけ無駄よ」

「…そんなことは分かってるわよ」

でも、相当悔しいみたいだね

あはは、僕に負けた君が悪いんだよ。精々

猛勉強でもするんだね

「二人共、楽しそうだね。ボクも会話に交ぜてくれないかな？」

すると、今度は緑色の髪をした別の女子生徒が話しかけてきた

染めてるの？ いや、それよりこの会話を”楽しい”と思う君もおかしいと思うけどね

「愛子、これの何処が楽しく見えるの？」

「え、違うの？」

愛子さん（仮）はどんな神経をしてるんだろう？

目の前には学園きつての屑とクラスメイト二人

両者ともとても恨めしそうにボクを見ている

これのどこが楽しそうなんだ？

「ま、いつか。で、この子が皆大嫌いって言われてる仲野宮浪都くん？」

的を得た知り方だね。でも、僕を知らなかったのか？

「そうだけど。へえ、同じ学年で僕を知らないなんて、転入生が酷く無知な人なのか？」

「言い方が悪いね、でも確かにそうだよ。」

ボクは一年生後半に転校してきた工藤愛子です」

一年生後半か…ボクこの学園に居なかったじゃないか

普通の学校に居て、PTAのお子さんを泣かせたら退学になったんだっけ？

あはは、あの時は爆笑だったなア

「うん、ご丁寧にどうも。僕は仲野宮浪都。親しみを込めてにもゴミ屑とてもシンプルに屑とも呼んでくれていいよ？」

いつも通りの笑顔で僕は自己紹介をする

僕のその”いつも通り”が気持ち悪いらしいケド

「す、凄まじい自己紹介だね。今時こんなに自分のことをゴミ屑なんて呼ぶ人は居ないんじゃないのかな？」

その問いに僕はあざ笑って答える

「あはは、”マトモ”な人はね？ 生憎と

僕は”マトモ”じゃないんだ」

僕は笑顔を絶やさず話し掛けている

笑顔でも話してる内容のギャップだからなのか、工藤さんも少し気まずそうな表情をしてる

「じゃあまたね、三人組みさん。精々食中毒者を  
出さないように頑張るんだよ？ あはははは」

最後にもう一度だけあざ笑って、今度こそAクラスを後にする

視点Ⅰ Aクラス

浪都が去った後も、三人はしばらく突っ立ったままだった  
あの異様な雰囲気当てられ、少しボーっとしていたのだ

「…相変わらず気味の悪い雰囲気ね。いつまで  
経っても慣れやしない」

「元からあんな雰囲気なら、正直引くわよ？ あいつの  
子供時代が凄まじく気になる」

「正直に言うと、ボクも彼は苦手かな？ 人格とか、  
見た目とかじゃなくて、なんか…」 雰囲気”が駄目だよ」

と、それぞれの感想を述べる

元々お人好しの愛子でさえ、浪都のあの異様な  
空気と雰囲気には苦手らしい

視点― 仲野宮浪都

うん、次はどのクラスを苛めようか？

でも、AクラスとFクラス以外は知り合い居ないしなア

まあいいや。なら上から順番でBクラスに行こうか

本当は二年Aクラスの後は三年Aクラスの

先輩方を苛めたかったんだケド、確か三年には

あの人が居るよね？ 会うのはちよつと嫌だなア…

正直に言うとなあの人にはちよつと苦手だしね…

と、考えている内にBクラス教室の前へ到着した

「ご機嫌よう、Bクラス諸君！」

思いつきりドアを開け、第一声にそう大声で言い放つ

急にドアが開いて驚いたのか、Bクラスの方々は固まっている

「おやあ、Bクラス変態さんも見えるね。もう女子制服を着るのは止めたの？」

「なんの用だ、仲野宮浪都？」

代表の根本くんは僕を睨みつけながらそう問いかけてくる

僕はなにもしていないだろ？ 憎むなら代表や吉田くんを憎んでくれ

「いやあ、ちよつとした嫌がらせかな？」

『ふざけるなお前！』

『喧嘩売ってるのか！』

『こっちは忙しいんだ！』

Bクラス全員が僕の目的に怒りを露にした

なんだよ、少しぐらい僕の暇潰しに付き合ってくれても良いじゃないか？

「おやおや、数学お得意の長谷川くんも見えるね。もう立ち直ったのかい？ あはは」

僕がこの学園で始めて真面目のテストで潰した長谷川和彦くんまで



見える

でも、彼の周りに生徒が居ないことから、根本くんと同じく信頼と  
かを失ったのかな？

「黙れ！ お前の所為で俺は幹部としての威厳を失い、  
友達だった奴等にも怒りの目で見られる！ お陰で俺は  
クラスじゃ無視されんだ！ どうしてくれる！」

「そんなに僕を怒らなくても良いじゃないか？ 元々は  
君が僕たちを深追いしたのと、僕の点数を見誤ったその  
驕りの所為でこんな結末になったんだよ？ 全部君の所為だ。  
だから…」

僕は一呼吸置いて、笑顔でこう言い放つ

「『僕は悪くない』」

自分の本心を皆に言い放つ

あはは、啞然としちゃってるよお

”なん…だと…”なんていう漫画ではテンプレな  
啞然の仕方だよ

漫画ネタは結構いっぱい言う派だよ、僕は？

だって僕は漫画は結構読むからね。得にジ  
ン  
プ  
ス  
や  
B  
L  
A  
C  
は大好きなんだよ

ジ  
ン  
プ  
じゃないけど、他にもマイナーなG  
t  
B  
a  
c  
e  
r  
s  
やR  
V  
Eは好きだよ？

得にR  
V  
Eはお気に入りの漫画だよ。うん、結構年月が経った  
今でも一番好きな漫画なんだ

おっと、話が逸れたね

僕の発言に激怒している長谷川さんを無視し、僕は再び根本くんと  
向き合う

「ねえねえ、確か君ってもう代表としての尊厳を失っているんだろ  
？」

「…お前には関係ない」

「それに、彼女だった大山さん？とも破局したしね」

「…大山じゃない。小山だ」

ありや、吉田くんがBクラス戦でチラツと言った名前だから  
かなり曖昧になっていたんだよ

「おっと失礼。で、君はその大山さんと再び付き合う  
ために、この召喚大会で優勝すると？」

この発言にピクツと反応する根本くん

でも、僕がまた名前を間違えたことは訂正させないんだね

「…それがどうした？」

あはは、とても素直な方法だね

力を見せ付けることで自分に従わせる、圧政の典型的な手段だよ

「うん、君のその手段はかなり気に入っているよ。  
力を見せ付けることで、自分につかせる。それこそ、  
現実社会での現実を表したようなことだよ」

「……………」

僕のこの発言には沈黙する根本くん

「でも、その手段だと絶対に”実力”が必要なんじゃないのかな？」

「…なにが言いたい？」

僕が言いたいことが分からないのか？

「はつきりと言おう、僕が見た限りじゃどれだけ  
高得点を出しても君では優勝できないよ」

「なんだと…！」

「さつきパソコンで調べて分かったんだケド、あの吉井ちゃんと坂本代表のコンビも出場するらしいんだ」

僕は爆発物処理班だった父さんに似たのか、機械の扱いには長けているんだ

「ッ……！」

苦い表情をする根元くん。やっぱり良い記憶はないみたいだね

「僕は今まで前線に繰り出されてきた所為か、吉井くんの試召勝負は何度か見たことがあるんだけど、あの操作術は天下一品だね。たとえ僕が八百点ぐらい出しても逆転されそうだ」

今度試してみようかな？ 八百点程度、世界史が英語で出せそうだもん

そのためにはいつも以上に真面目にしないとイケないケドね

下準備の勉強はしないケド

「それについては否定しない……」

「うん、今の君じゃ確実に負けそうだ」

でも、僕の目的が分からない根本くんは不思議そうに僕を見ている

まだ分からないのか？ まったく、鈍い人だなア

「手を貸そうか？」

## 十五問 屑とサボりと暇潰し（後書き）

いかがでしたか？

まさかの根本手助け展開。正直、主人公はこれぐらいすると思いましたが

某過負荷の大嘘憑きの台詞をパクりました。本当にありがとございます

ちなみに作者もRAVEはお気に入りの漫画です。

フェアリーテイルの作者だと言えば分かりますかね？

〈アンケート結果〉

待ちに待ったアンケート結果発表です！

え、待つてない？ 冷たいことは言わないでください

そのために、今回は主人公の浪都くんに登場してもらいました

屑「やつほー、台詞の名前の箇所まで」屑「ってなってるほどの人類最低、仲野宮浪都だよ！」

でもそれを否定しないとはさすがですね

屑「それより、さつさと結果は報告してくれ」

へいへい、では、結果発表です

「最も多く投票を頂いたのは…

同点です！」

はい、実は大変なことに、二人の同点が出てしまいました。

その二人とは、木下優子さんと吉井玲さんです！

屑「なんでこの二人なんだろう？ 木下さんなんて大嫌いだし、後者の人なんか知らないよ」

ちなみにトップ3は以下の通りになりました

一位： 吉井玲 And 木下優子 （14票）

三位： 島田美波 （五票）

という結果です。ダントツに一位二人の人气が高かったです（笑）

なので、申し訳ありませんがもう一度アンケートを行いたいです

今度は、このトップ3の中から選んでください

一人一票までです。複数の人物に投票した方はカウントしません

屑「では、また次の機会で」

（睡眠）



## 十六問 屑と団子と三途の川（前書き）

かなり雑になってしまいました

それに、かなり強引な展開になってしまいました

得にあの人との接触で…

では、十六話です

何気にやってみましたバカテストとです

『学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください  
あなたが今一番欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

コメント

『姫路さんらしい答えですね。楽しい思い出が沢山できるような  
学園祭にできるよう、頑張りましょう』

吉井明久の答え

『カローリー』

コメント

『この答えに先生は凄く不安になりました』

仲野宮浪都の答え

『楽しい思い出（笑）』

コメント

『（笑）さえ訂正してくれば良い答えなんですけど…』

仲野宮浪都の答え（訂正版）

『楽しい思い出（爆笑）』

コメント

『そういう意味ではありません』

## 十六問 屑と団子と三途の川

とりあえず根本くんはまた今度にしようか

今後の予定のことを軽く話し合つと、僕はBクラスを後にした

根本くんは自分でテストを受けて好成绩を出したって言うから、僕は勉強に付き合つてあげられないけど、別の方法で僕は手助けすることになった

どんな手助けかは、お楽しみだ

うーん、次はCクラスか？

あそこは確か根本くんの元カノの大山さんが居たはずだ

あそこにも嫌がらせしようかな？

「見つけたわよ…」

すると、突然物凄い握力で僕の肩は掴まれた

僕の肩を握りつぶさんとはかりに込められているその手の持ち主は、声だけで分かるけどね

「いったい僕になんのような、島岡さん？」

「島田よ！」

ホールの手伝いを担当することになった、島田さんだった

「それより、僕になんの用かな？」

「なんの用って…アンタ、本当に分からないの？」

殺気の籠った目で僕を睨んでいる

あれ、僕はまだなにもしていないはずだけど？

「分からないものにも、僕はまだなにもしていないんだから」

「なにもしていないって、アンタ…」

益々手の握力を上げる島田さん

って痛い！

「イタタタタ！！！！！！ は、離してくれよ！ 離さないと  
正当防衛で君を投げ飛ばすよ！」

「仕事サボっておいて、なに言ってるのよ！」

「痛い！ イタタタタタタタ！！！！！！ ギブ！ ギブアッ  
プ！」

B i t t e ! H e l f e n S i e m i r ! E s t u t  
m i r l e i d ! (お願いだ！ 助けて！ 僕が悪かった！)  
!  
! (痛

い！ やめろ！)

Da scusa! Da non pi? ! Perdonami!  
i! (謝るから! もうしないから! 許してくれ!) 「

「なに言ってるか分からないわよ!」

あまりの激痛に僕の他国語はかなり混乱している

肩が外れる!

激痛で投げ飛ばすことも出来ない!

「離せええ!!!!」

「はいはい、分かったわよ」

僕を解放してくれる島田さん

ハアツ…ハアツ…死ぬかと思った…

「僕の肩を胴体と分別させる気が! 何回も謝ったじゃないか!」

「最初、ドイツ語はともかく、他のは意味が分からないわよ!」

クソ、これじゃあ地味に腕が動かなくなるよ

「それより、これお願い」

ドサツと僕の前に置くのは、大きな袋

中には大量の胡麻や茶葉が入っていた

「これをどうしろと？」

「材料届けるのがアンタの仕事でしょ！」

そうだったっけ？ 悪いけど僕は必要の無い

記憶は無かったことにしてるから、忘れていると思うよ

「そうだったっけ？」

「自分から立候補したんでしょ！」

あ、そっか。うん、そういえばそうだね。

「ゴメンゴメン。うん、じゃあ運んであげるよ。肩が

握り潰されて殆ど動かない重傷を負ってるけど、大丈夫だと思うよ！  
途中で倒れたりするかもしれないけど、なんとか送り届けれると思う  
しね！

だから安心してくれ！ うん、重傷を負っている草食系男子の見本  
とも

言える僕にこんなに重い荷物を運ばせるって、島田さんも中々良い  
性格

をしてるね！」

色々と言った後、僕は袋を持ち上げる

「……」

島田さんはそれを無言で見ている

「よいしょつと…」

結構重いね、これ

はったりのつもりだったけど、これは  
ちよつと拙いかな？

幾ら格闘技をやっても、体の弱さは直らないね…

「ちよつと待ちなさい！」

そのままＦクラスへ歩き出そうとすると、また止められる

ビンゴ

「それ、ウチが持つから、アンタはもう帰って」

「ええ、良いの？ でも、これ僕の仕事だしなあ…」

「良いから！ さつさと帰って！」

袋を僕から奪い取るように持ち上げると、そのまま島田さんは歩き出した

僕はそれを見て密かにガッツポーズ

「頑張つて」

あはは、だあまさあれたあゝ！

親切心を利用するのは良心が痛むんじゃないのかな？

あ、僕に良心なんて無いか

上機嫌に僕は自分のクラスに戻った

「ちょっと良いでしょうか？」

「ん？」

Dクラス辺りまで戻ると、またもや僕は声を掛けられた  
声からすると、生徒ではないね。大人の声だ

「誰ですか、貴方は？」

一応、敬語を使っておこうか

「そういえば貴方は今年からの編入生でしたね。私は  
この学園の教頭、竹原です」

男性は僕にそう挨拶してきた



教頭、ねえ…僕になんの用なんだろう？

「そんなお偉いさんが僕になにか用ですか？ 大方教頭は学校の評判を守るためにゴミ屑である僕を退学にでもしたいのではありません？」

普通はそう考えるよね

教頭なんて偉い人が僕に用事なんてあるわけ無いし

「退学？ とんでもない。私は貴方にある頼み事をしたくて接触したのです」

僕に頼み事？

「頼み事？ なんでしょうか？」

「これは頼み事というよりも依頼なのですが、貴方のコンピューター操作技術は知っています」

ああ、学園のデータを荒らしまくったからね

僕に必要な情報は無かったけど

ま、用心に越したことはない

「それがなにか？」

「いえ、ただ、貴方にはあることをしてもらいたかったのです」

「あること?。」

「はい、貴方のハッキング技術を買ってでの依頼です。報酬もちやんと払いましょう」

僕のコンピューター技術を買って、か…

それに報酬も…

自分でも分かりぐらい僕は邪悪な笑みを浮かべていると思う

多分、漫画だと”ニヤ”って効果音が出ているだろう

「…詳しく聞かせてくれませんか?。」

Fクラスに戻ると、かなり作業が進められていた

既に出来上がっている試作品の団子も幾つか見える

いやあしかし、教頭も中々凄い人だね。僕、あの人は気に入ったよ

報酬もそれなりに良かったし、傭兵っぽいこととして本当に良かった  
「ん、なんだ仲野宮か。役立たずのゴミが、今まで何処に行ってたんだ？」

誰かと思ひ僕を見上げたら、代表は確認するや否や再び寝転んだ

「温かい挨拶を有難う。お、これはなんだい？」

みかん箱には一つの団子が置いてあった

「ッ…！ お、お前にやるよ。俺はもう食わねえから」

一瞬嫌な表情をした代表だけど、なにかあったのかな？

「本当か？ いやあ、僕は甘いものが好きでね。遠慮なく頂くよ」

胡麻団子を拾い上げ、一口で飲み込む

「うん、外はバリバリ。中はネバネバ。甘過ぎず辛過ぎず、苦過ぎる味わいが口いっぱいに広がって…」

解説していると、僕は気付いてしまった

「ぐッ…！」

その瞬間、僕の意識は途切れた

視点― 坂本雄二

「ぐッ…！」

逝ったか…ざまあみろ、仲野宮

「ねえ雄二？」

「なんだ明久？」

「ここに置いてあつた姫路さんの団子を知らない？ 今の内に処分しておきたいんだけど…」

それなら既に処分済みだな

「処分はもう済んだ」

「済んだって…って浪都！ 何で浪都が倒れているんだ！？」

どうやらアイツはくたばったらしい

「姫路の”アレ”を全部一口で食いやがったんだ。だから処分済みって言っただろ？」

「なにふざけたことを！ それは人体が耐えられる域を超えてるじゃないか！」

なあに、流石に十分経てば復活するだろ

「うッ…ここはどこだ？」

俺と明久が騒いでる所為でおきたのか

仲野宮も復活が早いな

「浪都！ 大丈夫なのか？」

「ん？ 大丈夫だけど…夢の中で僕の従兄に会ったよ。川があつて、その向こう側から手招きしてたけど…」

「その川は渡るな！ 渡ったら戻れなくなつたぞ！」

完全に三途の川だな。従兄は知らねえが

「うッ…今日はちょっと気分が悪いから早退するよ…」

へ、ざまあみやがれ

「雄二もなに寝てるの！ 後一步で浪都があの世で従兄さんと暮らすことになつたんだぞ！」

「アイツのことなんぞ知つたこつちやねえ。それより、召喚大会はどうするんだ？」

俺たちは絶対に優勝しなくちゃいけねえ

「そりゃ、優勝を狙おうよ？ そうすれば、  
姫路さんのお父さんも見返せるしね！」

「そうだ。俺たちは絶対に優勝しなくちゃいけねえ。  
翔子にあのチケットは渡さん！」

あのペアチケットが翔子の手に移れば、お終いだ

俺の人生も、アイツの手に移っちゃう！

絶対に優勝してやる…

姫路のためにも、そして…

俺の人生のためにも！！

視点― 仲野宮浪都

あの悲劇の一口から一日、僕は奇跡の回復を遂げた

何度も三途の川を渡りそうになったし、従兄の誘惑にも負けそうになった

だが、僕はまだくたばれない！ 全国の幸せ者を不幸にするまで、僕は死なない！

とまあ、最低な台詞を格好良く言ってみたけど、学校に行かないと

「太郎も良い子にしてるんだよ」

ワンと返事をした後、僕は家を出る

「ご機嫌よー皆さん。結構良い感じに改装されてるじゃないか」

清涼祭初日の朝、僕がFクラスの喫茶店に入ると、かなり改装されていた

みかん箱は布で被せられてテーブルっぽくなっていて、本格的な胡麻団子とお茶の匂いが漂っている

うん、他の出し物に引けを取らないと思うよ？

「あれ？ 代表ご一行様が見えないけど？」

「……召喚大会が始まるからそっちへ向かった」

僕の疑問にムツツリー二くんが答えてくれる

もうこんな時間か！

僕も喫茶店から出る

校舎の庭に作られた試合会場

そこには見物人で溢れていた

軽く見積もっただけで数百人は居るんじゃないのかな？

そこまで戦争が見たいか…

『これより、召喚大会を開催したいと思います』



やっと始まったか

『まず始めに、個人戦を開催したいと思います。こちらでは、純粋な試召戦争がご覧になれます』

チームワーク関係無しの純粋な勝負だからね

『第一試合！ 赤コーナー…』

Bクラス、長谷川和彦！』

第一試合最初の選手はどうやら数学お得意の長谷川らしい

これで汚名返上っていうわけか？

『青コーナー…』

でも、運が悪かったね

『Fクラス、仲野宮浪都！』

僕も出場しているんだよ



## 十六問 屑と団子と三途の川（後書き）

いかがでしたか？

はい、教頭との対談がかなり雑になってしまいました

ですが、ちゃんと介入させるための良い案が思いつきませんでした

そして、主人公のしかすことはかなり屑になるでしょう

一体なんのために召喚大会に出場したのでしょうか？

アンケート途中経過

木下優子…十七票

吉井玲…十一表

島田美波…一票

相変わらず木下姉と吉井姉が人気です（笑）

言い忘れましたが、今回のアンケートの締め切りは  
九月の終わりまでです

く睡眠く



## 十七問 屑と一回戦と姉弟／兄妹（前書き）

書きたくなって書いてしまい、連続投稿になりました

今回はまたもや主人公のことを少し明かします

とは言っても、後半にですけど

いつもとは少し長いです

確か、9000文字ぐらい行っていました

一話に詰め込み過ぎていると思いますが…

それでは、十七話です

何気にやってみたバカテスト

『国語のボ－ナス問題です。解答は自由です  
短歌を作ってください』

仲野宮浪都の答え

『ホトトギス

鮮やかであり

華やかだ

皆を癒し

木々を飛びぬく』

教師のコメント

『おや？ 珍しく真面目に答えていますね。

でも、ホトトギスにそんな表現が当てはまるとは思いませんが…』

## 十七問 屑と一回戦と姉弟／兄妹

『青コーナー、Fクラス仲野宮浪都！』

解説がそう呼ぶと、僕は階段を上がって召喚フィールドに立つ

Fクラスの人たち、特に吉田くんが予想外の出場者に驚愕している

あはは、ビックリしてる！

まあ、僕もそれと同じぐらい出たくないんだけど、仕事だからね

「貴様、仲野宮！」

「久しぶりだね、長谷川くん。あ、昨日会っていたか！」

ゴメンゴメン、僕は必要の無い記憶は無かったことにしてるから、忘れちゃった！」

僕と向き合つと、憎しみの含んだ目で僕を睨んでくる長谷川くん

そんなに睨まないで欲しいなあ

せめて名字を覚えていてあげてるだけラッキーと思いなよ

「どこまで俺を嘗めてやがる！　へ、その余裕

があるのも今の内だ！　お前をぶっ潰して、汚名返上させてもらう  
！」

「やれるものならやってみなよ。なら君にもう一度

思い知らせてあげるよ、屑の戦争をね…」

『では、召喚大会個人戦第一試合、開始です！ 科目は…』

会場に設置されてある巨大モニターにルーレットが移され、これが止まると科目が決定する

いわばランダムで科目が決定される

そして、ルーレットが止まる

『…現代国語です！ では、開始してください！』

げ、僕の苦手科目じゃないか

「良かったね、僕の苦手科目で。この運の良さでこのまま勝つと良いね」

「嘗めたようなことを…サモン！」

「あはは、サモン」

僕たちの点数が表示される

『Bクラス長谷川和彦 現代国語173点』

さすがBクラス、一科目は二百点近い

Bクラスの平均点は150点以上で、その上のAクラスは200点だ



だから、長谷川くんの点数は数学以外は普通ってことになる  
数学が得意なだけで幹部にされたのかな？

そして、しばらくしてから僕の点数も表示される

『Fクラス仲野宮浪都 17点』

「なにイイイ！！！！？？？」

僕の点数を見て長谷川くんどころか会場の全員が驚きの声を上げる

ある意味凄い点数だろ、コレ？

『なんと、Bクラス相手に仲野宮選手は僅か17点です！

これはFクラス平均点を軽く下回っています！ これは瞬殺か？』

解説の人も驚いている

なにを驚いているんだ？ 僕の点数は学年どころか学園最下位なんだよ？

通常は平均点は20点前後、総合点数は僅か304点だ

「お前、ふざけているのか！」

「ふざけるもなにも、僕が毎回真面目にテストを受けるとは限らないよ？ いや、寧ろこつという点数の方が断然多い」

観客席に座っている人は皆呆れていたり、がっかりしている

初戦は観客を引きつけるための、言わば”盛り上げ役”で、かなり大事なんだけど、こんなショボイ点数を見れば誰でも落胆するよね

「ちッ、どうやら本気らしいな」

そう言いながら、長谷川くんの召喚獣が僕に迫ってくる

武器は通常通りランス

僕の召喚獣も銃以外はいつも通り

今回の銃は前回長谷川くんと戦った時と同じ短機関銃だ

僕の召喚獣の武器は、テストの点数によって変化する。例えば十点台だと拳銃だし、高い点数だと重機関銃やマシンガンも貰える

つまり、点数が高ければ高いほど良質な武器を貰えるし、低ければ低いほど悪質な武器になるんだ

殆ど賭けみたいなものだよ

「でも、操作技術に点数は関係無いんじゃないのかな？」

振り上げたランスをかわし、腕を掴んで捻り上げる

召喚獣はランスがランスを離すと、僕はすかさず  
懐へ入り込んで胸倉を掴む

そして、一気に地面に振り下ろす！

『Bクラス長谷川和彦 現代国語152点』

「そういえばそうだったな。お前、柔道知ってるんだっけ？」

「そうだよ。こんな重要なことを忘れるなんて、  
君はまったく進歩していないね。少しがっかりだよ」

「フ、ほざけ！」

ランスを拾い上げ、再び向かってくる長谷川くん

前回と違って、今回はそう簡単に挑発に乗ってくれないね

厄介な…

「ワオ、おっとっと、フツ！」

僕は攻撃をなんとか避けたり盾で防いでいるけど、  
怖いなあ。点数が低いだけあって一撃でも当たるとお終いだから

今回は勝たないと仕事できないしなあ

「いやあ、ちよろいちよろい。弱すぎるよ、君」

「なんとでも言え！ もうお前の挑発なんかには乗らない！」

ちツ、面倒な…

それに、短機関銃を使っても頭に当てる以外では効果は薄そうだし、

当てるのも容易くは無いと思う

銃の知識はあっても、それを使いこなせないのは問題だなあ…

そもそも僕はそこまで射撃は得意では無いし、どちらかと言うと下手かな？

吉田くんを狙撃した時もジツとしている吉田くんを外したし

「でも、君こそ攻撃を当てないと話にならないなあ」

「その内一撃くらわせてやるよ。ま、その一撃で終わらせられるけどな」

よく分かっているじゃないか

「お前は急な出場で勉強もしてねえらしいな。そんな奴に、俺は負けない！」

頼もしいねえ

こういうのを主人公キャラって言うんだっけ？

一度負けても、努力してその人に打ち勝つ

なら僕はやられ役の嫌われ者か？

希望のない名無し敵キャラ…ぴったりじゃないか

「ちよ、うわ！ ストップ！ 危ないから！」

途端に攻撃するスピードが早くなる長谷川くん

急激な上昇に多少は驚いてるけど、まだ問題ないね

かわせるレベルだ

すると、疲れたのか召喚獣の動きが遅くなる

チャンス！

僕はそのまま長谷川くんに接近し、盾で殴りつける

でも、それだけでは止まらず、さらには盾を置いて、腰を掴んで、そのまま体全体を捻って投げ飛ばす！

『Bクラス長谷川和彦 現代国語107点』

払い腰、僕が得意な業の一つだ

慣れればとても使い易いし、便りになるよ

「くッ…ハエみたいにちょこまかと…鬱陶しい！」

「こんな点数じゃちよつとずつ削っていくしかないだろう？」

「それもそうだな」

少し感情的になりかけたけど、直ぐ冷静さを取り戻す長谷川くんホントに挑発に乗らなくなったね、少し残念だ

試召戦争をする時は相手を挑発させて自滅させるのが僕の楽しみなのに…これじゃつまらないよ…

「へ、点数と腕輪さえ無けりや大したことねえな！」

「いや、それ普通なんじゃないのかな？ 点数で攻撃、防御、体力も決まるから、点数が低いと必然的に僕は”大したことない”んだ」

操作技術で乗り越えることも出来るけど

吉田くんが良い例だ

十倍も点数差を付けても巧みの操作技術で毎回ひっくり返しているからね

僕でもあの操作技術にはお手上げだよ

「ま、ここまで嘗められるのも嫌だし、そろそろ真面目にしようか」

このまま持久戦になると間違いなく僕が負けるし

ここはお遊び半分で勝ちたかったけど、どうやらそうは行かないみたいだ

「論理的に君を殺してあげるよ」

視点― 長谷川和彦

「論理的に君を殺してあげるよ」

そう仲野宮は俺に告げる

その言葉に俺は思わず身震いをしてしまう

なんなんだよ…こいつのこの”雰囲気は”…？

いつものアイツの”気持ち悪さ”ではなく、

こいつの雰囲気から”恐怖”を感じられる

俺はアイツを恐れているのか？

「まあ、殺すと言っても君の召喚獣を戦死させるんだけどね」

相変わらず気持ち悪い笑顔だが、言っていることが残酷だ

「ッ…！ やれるもんならやってみろ！」

なんとか恐怖を薙ぎ払い、俺はアイツに向かっていく

ランスを心臓に突き刺す

だがそれは当たることなく、空気を通るだけだ

そのままランスを下へ振り下ろすが、  
盾で防がれる

そして、あいつはランスを掴むと…

「な、なに！？」

俺の召喚獣をランスごと持ち上げやがった…

「知ってる？ 召喚獣って点数が一桁でも  
ゴリラ並みのパワーを持つてるんだよ？」

…そうか



例え点数が高くて、召喚獣の腕力は強いんだ

こいつの二桁でもかなりのパワーを持っている

「くッ……！」

あいつはそのまま召喚獣を投げ飛ばした

『Bクラス長谷川和彦 現代国語91点』

点数の減るペースこそ遅いが、  
確実にダメージを与えてきている

それに比べて俺は一撃も当てられていない

アイツの点数は僅か17点なんだ！

一撃さえ当てれば決まるんだ！

だが、どれだけ攻撃しようが、どんな  
方法を取ろうが、俺の攻撃は一度もアイツに当たらない

盾で防がれたり、単純に受け流されたり、逆に投げ飛ばされる始末だ

「クソ！」

冷静になれ、冷静になれ俺

アイツの点数は17点なんだ

一撃さえ当てれば俺の勝ちなんだ

「（スー、ハー）」

俺は深呼吸をし、全神経を仲野宮に集中させる

よし、行ける！

ランスを振り上げ、アイツに向かって振り下ろす

「うッ……！」

当たった！当たった！

「当たった！俺の勝ちだ！」

ランスはアイツの頭部に見事命中していた

勝ったんだ！俺はついに勝ったんだ！

「ざまあみろ、仲野宮浪都！俺の勝ちだ！」

だが、アイツは無言のまま動かない

ククク、衝撃のあまり言葉も出ないか

「束の間の喜びは済んだかい？」

え？

なにを言っ<sup>て</sup>やがる？

俺の攻撃は、お前に当た<sup>った</sup>んだぞ？

Bクラスレベルの召喚獣の一撃が、十点台の召喚獣に当た<sup>った</sup>んだぞ？

そんなの、戦死に決ま<sup>って</sup>いる

「もう一度良く僕の点数を見て<sup>ごらん</sup>」

奴の点数を確認する

『Fクラス仲野宮浪都 現代国語2点』

「2点…だと？」

馬鹿な…なぜアイツの点数は残<sup>っ</sup>ているんだ！？

俺とアイツでは十倍も点数の差があるんだぞ！

なのになぜ一撃で仕留められないんだ！？

「あははは、なに困惑した顔になってるんだ？」

「なぜ貴様の点数は残ってるんだ！俺とお前じゃ元々の点数は十倍も

差があるんだぞ！それほど差があるのに、なぜお前は戦死していない！」

そしたら、仲野宮は困惑した表情になった

「”元々の点数が十倍もの差？”一体どこからそんな寝言を教わったんだ？」

…俺が間違っているとも言っただけか？

「僕の点数が表示された時、僅かだけど間があっただろ？それは何故だか分かるか？」

確かに、俺の点数が表示された時、その数十秒後にこいつの点数が表示された

それがどうしたんだ？単にシステムが遅かったただけなんじゃないのか？

「それがどうしたって言うんだ！」

「どうした、って…」

すると、仲野宮の召喚獣は邪悪な笑みを浮かべながらポケットに手  
を突っ込む

そして本人もとても邪悪な笑みを浮かべている

「こっぴつこつとぞ」

奴はそう言つと、後ろを向いてスタスタと俺から離れるように歩き  
出した

「爆破」

「え？」

本当に一瞬だった

アイツがあの手を言い放つと、俺の周りが大爆発を起こした

それも、アイツが言った直後、周りの地面が少し間を空けて一度

づつ

大爆発を起こしていた

『Bクラス長谷川和彦 現代国語0点』

俺の…負けか？

「馬鹿な！？ なぜお前は腕輪の能力を使える！？ お前の点数は僅か17点、なのになぜ腕輪の能力が使える！？」

「まったく、うるさいなあ。いったい何時誰が僕の”元々の点数”が17点だって言っただよ？」

どういう意味だ？

「つまり、僕の最初の点数は17点なんかじゃないんだ。最初の点数の表示に間があっただろ？ その時に僕は自分の点数を17点まで下げたんだ」

自分の点数を17点まで下げると…？

まさか…！

「そう、僕は開始早々に腕輪の能力を使用したんだよ」

それでアイツは自ら点数を減らし、自分の元々の点数が低いと俺に油断させ、これをするタイミングを狙っていたのか？

アイツが今まで発していた言葉も、全て俺が”一撃決めれば終われる”という自身を持たせ、油断させるため…

それどころか、アイツは攻撃する時は手加減をして、俺の点数を  
少しずつ減らすことで錯覚をさらに強めたのか…

奴、仲野宮は、俺だけでなく、この会場の観客全員を騙していたん  
だ…

「今回使用した超小型爆弾の数は25個。後は自分で計算してくれ」

それだけ言い残し、仲野宮は会場を去る

そしてその瞬間、会場から歓声が爆発した

『『『『『うおおおお！！！！！！』』』』』

『すげえ！ アイツ、本当は凄かったのか！？』

『俺でも気付かなかったぞ！』

『あんな奴が文月に居たのか！』

反応は上々

しかし、誰一人として分かっていないことがある

この作戦は、一見とても頭脳的で策略的だが、ある意味無茶過ぎる

自らの点数を極限まで削ることで、その大きな見返りで  
勝利することが出来たが、逆に考えれば点数を削ったことで  
戦死する危険も限りなく高くなるんだ

幾ら元々の点数が高くて、僅か17点しか残らなかったら一撃でなくても二撃で決められていた

二撃決めるのはそう難しくは無い

つまり、この作戦は仲野宮の高度な操作技術があつてこそ、成し遂げられるんだ

俺は改めて感じた

こいつは霧島や久保や長瀬より間違いなく…

” 本当の天才 ” だつてな

視点― 仲野宮浪都

いやあ、派手に決められたな



まあ、今回の作戦は正直無謀過ぎたけど

開始早々爆弾を25個も地面に接着させておいたら、残り点数が17点になっちゃったんだよ

長谷川くんが召喚獣操作が苦手で助かったけど、普通の人だったら間違い無く負けていたね。嫌がらせのつもりでこの戦法を取ったけど、二度としたくない。結末だって”爆発させる”っていうワンパターンだし

ちなみにこの大会のためのテストでは、僕はとあることをやったんだ

僕にとっては必ずやってはいけないタブー

そう、僕は、”テスト勉強”をしてしまったんだ

我ながら恥と思う

この大会に出ると決まった夜、僕は数年ぶりに参考書を取り出し、真面目に勉強した

お陰で点数はかなり良くなったけど、それでも僕の学歴には支障だな

ちなみに現代国語が一番悪い点数だったよ

やっぱり国語は苦手だなあ…

『これにて、一回戦を終了したいと思います!』

どうやら僕の勝負と同時に他の一回戦が開始されていたらしい

まあ、大規模に作った会場だ、一度に何戦も出来る方が得だろう

『現在の勝者は、このようになります！』

モニターに表示されたのは、一回戦突破者の名前だった

『二年Fクラス 仲野宮浪都  
二年Cクラス 遠藤浩二  
三年Bクラス 小林優奈  
二年Aクラス 長瀬流歌  
三年Bクラス 徳田一樹  
三年Aクラス 琴吹雪音  
二年Cクラス 堺健太郎  
二年Dクラス 平賀源二』

へえ、意外と三年生も多いね

受験勉強で大変とは思っていたけど…

そして、勝者リストの中になぜ居るんだ長瀬？

カンベンしてくれよ… Aクラスだから絶対勝ち抜いてくるし、  
僕と戦うのは確実にになったじゃないか…

ま、その時は瞬殺するだけさ

抵抗させる暇も無く、その眉間に鉛弾を撃ち込んであげるよ

それに、三年生の中にもあの人が居るしね

なぜ僕は知り合いとの遭遇率が高いんだよ！

よりもよって何であの人なんだ！？

はあ、やっぱり召喚大会、棄権しようかな？

でもそれだと仕事も出来ないし、報酬も貰えないし…

だあもうこうなったら自棄だ！

あ、そういえば根本くんはどうなってるかな？

根本くんと大山さんは協力したつもりだし、効果はあるかな？

チーム戦での結果発表を見ると、確かに根本くんの名前があった

彼も勝ってくれたんだ、うん、手助けしたし、当然かな？

よし、喫茶店に戻ろうか

僕も丁度喉が渴いていたところだし

「やつほー、皆さん。吉田くんに代表もおめでとう」

「浪都もね。出場してるとは思わなかったけど…ちなみに僕の名前は吉井だからね？」

喫茶店には既に一回戦を終えた吉田くんペアだった

でも、チーム戦は流石にまだ全組終わっていないね

それほど会場はデカくないから、まだ根本くんと吉田くんのペアしか終わっていないかった

その証拠に、まだ島田さんと姫路さんのペアが帰ってきていない

「お、それ胡麻団子かい？好きなんだよねえ、甘いもの。頂いても良いかな？」

代表が座っているテーブルに団子が一つ置いてあった

誰も食べないみたいだけど、お腹いっぱいなのかな？

「あ、浪都。それはやめておいた方が…フゴッ!？」

吉田くんがなにか言いおうとしたら、代表のボディーブローが炸裂した

「遠慮せず食え」

代表が僕にものを勧めている？　今日は嵐でも来るのかな？

「ならお言葉に甘えて」

僕は団子を手に取り、一口かじる

ふむふむ…

「外はネバネバ、中はドロドロ。甘過ぎず辛過ぎず苦過ぎず、酸っぱ過ぎる味わいがとても味わい深くて…」

そして、異変に気付く

「ぐッ…！」

一瞬意識を失いそうになったが、なんとか持ちこたえる

「なに、姫路の料理を食べてくたばらないかと!?」

「君は僕をどうするつもりなんだ!」

これは姫路さんが作ったのか!?

なんて強烈な…

不味いとかそういうのじゃなくて、物質的に”ヤバイ”んだよ

この風味は…科学薬品か!?

「浪都！ 大丈夫なのか!？」

「なんとか死なずに済んださ…」

《ガラッ》

すると、突然Fクラスの喫茶店のドアが開いた

入って来たのは二人組の女子生徒

一瞬姫路さんコンビだと思い無視しようとしたら、  
違うのにすぐ気付いた

なぜなら…

「浪ちゃーん!!!」

一人が僕に向かって突っ込んで抱きつこうとしているからだ

「フン！」

広げている腕を掴むと、相手が突っ込んでくる力を利用して地面へ叩きつける

パワーアップバージョンの一本背負いだ

「いったぁーい！」

痛がっているが、あれほどの威力の背負い投げをくらっただけで”痛い”で済ませる君の方がおかしいんだけどね

「な、なんだ!？」

わけも分らず他の人たちは混乱している

「か弱い女の子になにするのぉ！」

「そんなのどこにも見当たらないけど？」

「ひっどーい！」

真っ黒の短い髪が特徴的な年下の女子生徒

「悪いね浪都、久しぶりに会って急に迷惑掛けて」

「別にいいさ、これぐらいは予測の範囲内だしね」

もう一人は僕たちと比べてかなり大人びた、おそらくは年上の女子生徒。やれやれと言わんばかりに首を振っていて、その長い黒髪が揺れている

「誰だ…この二人？」

代表がかなり困惑している

そりゃそうだよ。見ず知らずの  
女子生徒が二人入ってきて、しかも  
一人はいきなり屑として有名な僕に  
抱きついてきたんだから

「紹介するよ、代表。この二人は…」

僕がこの二人を自己紹介しようとする、ある人物によって妨害される

「おい坂本、一体なんの騒ぎ…なにイ!!??」

厨房から戻ってきた須川会長くんだった

「諸君、ここはどこだ？」

「『最後の審判を下す法廷です!!!!』」

「異端者には？」

「『死の鉄槌を!!!!』」

「男とは？」

「『愛を捨て、哀に生きるもの!!!!』」



『よろしい。これより異端審問会を開く』

須川会長くんが僕を確認するや否や、ホールと厨房から突如数十人の教徒たちが溢れ出てきて、僕を包囲する

FFF団の制服？を身に纏いながら

「こんにちは須川会長くん。僕になにか用か？」

『惚けるな！ 横溝、罪状を述べよ』

『はい、須川会長！』

須川会長くんが隣のリーダー格の生徒にそう尋ねる

どうやらこの”横溝”って生徒が副会長なんだね

『ええ、罪状： 被告、仲野宮浪都（以下、この者を”屑”と称す）は、

召喚大会出場後、異端審問会二級審問官でありながら、Fクラス喫茶店内で二人

の女子生徒との接触を果たしています。これは明らかな異端行為とみなし、十分な調査

を行った後に、屑に対してしかるべき処置を…』

『御託は良い、さつさと罪状を述べよ』

長々と罪状を語る横溝くんに痺れを切らしたのか、須川会長くんが急がせる

『女子生徒の知り合いが居るのが羨ましいのであります!』

『うむ、実に分かり易い罪状だ』

なんという嫉妬心なんだろう…

「あ! そういえば須川くんがさっき女子に告白していたね」

またもや仲間割れ作戦

『『『なにイ!!!!???』』』

「なッ!? ちょっと待て! 俺はずっと厨房で働いていたんだぞ!

告白できるわけがないだろう!」

僕のいきなりの発言に須川会長くんは驚いているが、正論を言う

でも、そんな手が僕に通用すると思っているのか?

「でも、情報によると須川くんは団子を運ぶ際、

秘密裏に女子生徒に電話番号とメールアドレスを渡していたらしい!」

嘘だよ

料理を運ぶのはホールの仕事だし、須川くんは厨房で手一杯だから渡すのは不可能だよ

でも、頭に血が上っているFFF団にそんなことは思いつかず、必然的に…

『『『須川ア！！！！ 貴様アアア！！！！』』』

全員が激怒した

「待て！ 早まるな！」

だが、須川くんの言葉に聞く耳を持たず、FFF団全員が鎌などを須川くんに向けていた

『貴様ア、会長でありながらの異端行為！ それがどれほど愚かな行為か、貴様の消し飛んだ体に叩き込んでやろう！』

「俺の体を消し飛ばすのが前提なのか！？」

全速力で須川くんは喫茶店を出て行き、その後をFFF団員が追う

僕は完全に空気だ、作戦成功

「さて、邪魔者も居なくなっただね」

改めてやっと自己紹介が出来る

「クスツ、浪都のクラスメイトは面白い人ばかりだな」

「それでも苦労しているんだよ…」

年上の女子生徒が微笑する

「浪都、この人たちは誰なんだ？」

FFF団の登場で多少の落ち着きを取り戻した吉田くんが訊いてくる

「紹介するよ。この髪の長い方が琴吹雪音で、  
僕が投げ飛ばしたのが琴吹彩音。」

「僕の実の姉と妹だ」

「なに――！！！！！！！！！！」

僕の発言に吉田くんと代表が啞然としている

はあ、僕としては会いたくなかったんだけどねえ……

こんな血の繋がっただけの  
”他人”には…

## 十七問 屑と一回戦と姉弟／兄妹（後書き）

いかがでしたか？

何故か長谷川くんが良い勝負をしてしまいました

でも、主人公の勝ち方がワンパターンな気が…

そして、主人公の姉と妹の登場です

プロフィールに追加しておきます

名字が違う理由など、詳しくは次回にて

ちなみにバカテストの意味を分かった人は凄いです

### 途中結果

木下優子…十八票

吉井玲…十二票

島田美波…一票

そこまで変わっていません

ちなみに前回締め切りは十月の終わりと書いてしまいましたが、  
申し訳ありません、打ち間違えです

締め切りは九月の終わりになります

く睡眠く

十八問 屑と姉とちっちな姉弟（前書き）

書くことがない…

キングクリムゾン！

では、十八話です（笑）

バカテスト

『次の英会話文を訳しなさい  
This is the bookshelf my grand  
mother used』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が使っていた本棚です』

教師のコメント

『正解です。一言一言が上手に訳されていて、完璧です』

吉井明久の答え

『これは僕の本棚が使っていた祖母です』



教師のコメント

『 答えの正解不正解以前に、自分で訳した文を良く読んでみましょう』

仲野宮浪都の答え

『

』

教師のコメント

『 嫌がらせのつもりですか？』

ちなみに前回のバカテストの意味のヒントです

各行の頭文字を下から読んでみましょう

## 十八問 屑と姉とちっちな姉弟

「僕の実の姉と妹だ」

「なにイイイ！！！？？」

代表と吉田くんは驚愕の声を発する

そんなに意外なのか？

「初めまして。君たちが私の弟の友達なのか？」

雪姉<sup>ゆき</sup>さんが吉田くん達にそう訊く

あは、友達じゃないよ。良くて他人、悪くて抹殺対象だ。僕がその対象だけだね

「違うよ雪姉さん。この二人はただのクラスメートで、憎まれるべき存在なんだ。友達じゃない」

「お前も相変わらずなんだな、少し心配になってきたぞ」

「人はそう簡単に変わらないよ」

そして、ある意味”こっち”はまったく変わっていないからね

勿論、悪い意味で

「浪ちゃーん!!!!!!」

「おっとつと」

再び襲い掛かってきた生物をスキップして避ける

君もまだまだ甘いね

「なんで避けるの!」

「避けないと痛いんだよ、彩あやの攻撃は」

「これはボクなりの愛情表現なのさ!」

さっきから襲い掛かってきてるのが、僕の  
一つ下の妹、彩音だ。彩あやって呼んでるケド

”音”を付けるとややこしいんだよ

ここで我が家の名前の決め方を教えてあげよう

我が仲野宮家では名前をつける時に幾つか決まり事があるんだよ

男には”都と”を、女には”音ね”を最後につけるんだ

僕の名前は”浪都なつと”、父さんの名前は”零都れいと”、  
お祖父ちゃんの名前は”和都かずと”、従兄の名前は”海都かいと”、  
叔父さんの名前は”啓都けいと”ってなっているんだ

そして、僕の母さんの名前は”静音”<sup>しずね</sup>、姉の名前は”雪音”<sup>ゆきね</sup>、妹の名前は”彩音”<sup>あやね</sup>、お祖母ちゃんの名前は”莢音”<sup>さやね</sup>、そして海都さんの妹、つまり僕の従妹の名前が”朱音”<sup>あかね</sup>となっているんだ

皆統一性があるんだ

元々は仲野宮家と僕の母さんの家での決まり事を合体してこんなにややこしくなったんだ

で、もう皆についてるから言うのが面倒になって、今では”音”を抜いて呼んでるんだ

「ほら、彩音。浪都の憎まれ対象がビックリしてるじゃないか。ちゃんと自己紹介しないと駄目だろ？」

「あ、うん！ そうだね！ ボクは浪ちゃんの妹の彩音です！ 今は高校一年生です！ よろしくお願いします！」

「そして私は浪都の姉の雪音だ。いつも弟がお世話になってるね」

行儀良く自己紹介する雪姉さんと違い、彩は

元気良く似非敬語を使って自己紹介する

物凄い姉妹の差だね。ここまで姉妹の中で違いが生まれるものなのか？

それにしても…

「雪姉さんの男の子らしい口調はともかく、彩はまだその癖を直していないのか？」

「癖？　なにが？」

どうやら気付いていないらしい

彩は昔からお兄ちゃんっ子で、いつも僕の真似ばかりするんだ

そのせいでいつしか、僕と同じ話し方にまでなっちゃってしまっていた

その証拠に、一人称も未だに僕と同じになってるしね

本人はまったく気付いていないらしいけど

「いつもいつも浪都浪都って言ってるんだ。正直とても苦労してるんだよ…」

はあ、と溜め息を吐く雪姉さん

苦労しているんだね

「う」苦労さん

「代わってくれ…」

「その瞬間僕の自由が消滅する」

どこまでも着いてきそうだよ

「二人共文月に通ってるのか？」

「今年入学した彩音はともかく、私は一年の時から

ここに通っていたぞ？ 浪都がただ来るのが遅かっただけさ」

へえ、知らなかったな

ここに通っているってことは、同じ町に住んでいるってことだろ？

それなのに一度も会わないって、少し凄いいんじゃないのかな？

「浪ちゃん全然ボクたちに会いにきてくれないから、自分達で浪ちゃんの

クラスに乗り込んだじゃったじゃないか！」

「その呼び方は止めてくれ。イライラするんだよ」

さっきからちゃん付けで何度も何度も…

「浪ちゃんは浪ちゃんだよ！」

はあ、こういう時は頑固なんだから…

「浪ちゃん？」

今まで口を開いていなかった吉田くんが訊いてくる

ようやく状況を飲み込めたのか？ 代表は未だに固まっているけど

「彩が僕をこう呼んでいるんだよ」

不本意だ、と付け足す

「だって、見てよこの浪ちゃんの顔！ 男の子なのに  
凄く可愛いよね！ これは浪ちゃんと呼ばずには居られないよ！」

僕のコンプレックスをそう堂々と言いやがって…

「彩は少し落ち着こうぜ？ 僕がかなり迷惑しているんだよ」

「ボクが元氣澆刺で良かったじゃないか！ ここは喜ばうぜ？」

本当に話し方が僕と同じなんだね、話し合っていると気持ち悪いな

「そついえば、雪音先輩？」

「ん？ なんだ？」

吉田くんが雪姉さんに話しかける

琴吹だと二人居るからややこしいみたいだね

「どうして浪都和名字が違うんですか？ 本当に姉弟なら、  
雪音先輩の名字が”仲野宮”になるか、浪都の名字が”琴吹”  
になるんじゃないんですか？」

ああ、そんなことか

「僕たちは一緒には暮らしていないんだよ。小学校六年生  
になった時、僕は一人暮らしになって、雪姉さんと彩音が  
叔父さんに引き取られたんだ。だから”仲野宮”じゃなくて、  
叔父さんの名字の”琴吹”を名乗っているんだ」

母さんの元々の名字は琴吹で、その母さんのお兄さんに引き取られたから名字が仲野宮から琴吹に変わったんだよ

「引き取られた？ どうして？」

「私たち仲野宮家には複雑な事情があるんだよ。詮索しないでくれれば嬉しい」

雪姉さんって彩と違って、凛々しくなってるね

男勝りというか、そんな感じだ

僕みたいな草食系男子じゃなくて、皆を仕切るリーダータイプまさに底辺の存在である僕とは正反対の存在だ

「え、あ、うん」

吉田くんも空気を呼んだみたいだね

それにしても、吉田くんは余計な詮索をしなくて助かるよ

他のFクラスの人たちだと遠慮なく訊いてきそうだし

よし！ 今日から吉田くんは、明彦<sup>あきひこ</sup>くんあきひこに昇格だ！

ちなみに次の昇格では名字を正しく言ってあげるよ

「明彦くんは見切りをつけるのが上手だね」



「やつと名前で呼んでくれたと思ったら、今度は名前も間違えて言うのかよ！ それなら名字を正しく呼んでくれ！」

そんな二階級特進なんて駄目だよ

昇進順は吉田 明彦 吉井 明久 ヨシ アキって順だ

最後の二つは絶対に呼ばないと思うけど、最高で吉井かな？

僕の中の吉田くんの本名は、吉田明彦よしだあきひこってなってるから

「一文字も当ててあげているだけ運が良いと思うよ？  
僕にとつて君は吉田明彦くんなんだ」

「それなら吉田の方が合ってるよ！ 吉田は良いけど明彦は止してくれ！」

明彦は二文字違いで吉田が一文字違いだからかな？

まあいいや、ならいつも通り吉田くんって呼ぶよ

「はあ、ならいつも通り吉田くんって呼んであげるよ」

「間違ってるのに少し嬉しくなる僕をどうにかしてくれ……」

もう慣れちゃったというか、馴染んじやったんだね、吉田に

「ねえ浪ちゃん？」

「なんだい、彩？」

「浪ちゃんって、全然背も伸びていないよね？」

いきなりそう言う彩

そうか？ 僕としては結構高くなったつもりだけど…

「俺が170ぐらいなら…仲野宮はどれぐらいなんだ？」

代表も珍しく訊いてくる

うーん、あまり計っていないからね…

僕って代表よりかなり身長が低いから

代表が170なら…僕はその結構下か？

「ざつと見積もって150ぐらいじゃないのかな？」

吉田くんは何センチなんだい？」

「僕は155は行ってると思うけど、浪都は

僕よりもかなり低いよね？ ならもうちょっと下と思うけど…」

これより下？ 流石にそこまでは…

だって、流石に僕でも木下くんよりは高いよ？

木下くんは140前後って聞いたから…なら僕は145ぐらいか？

「なら最低でも145ぐらいと思うよ？」

「低！！」

二人共声を揃えてそう突っ込む

「ひ、低くないさ！ これでもかなり成長したつもりさ！」

「でも一年年下の彩音ちゃんよりも背が低いよ！？ それでかなり成長したのなら浪都は元々は何センチだったんだ！？」

そりゃあ…140ぐらいだけど…

「木下くんぐらいだったかな？」

「それだと五センチしか成長してねえじゃねえか！ これのどこがかなり成長したつもりだ！」

うう…なにも言い返せない…

「浪都は私と似て背が殆ど伸びないんだな。一年で5センチはさすがにちよつと拙いじゃないのか？」

雪姉さんも僕に追い討ちを掛けないでくれ

「それより、次の試合はまだなのか？」

終わってからかなり時間が経っているよね？

ならそろそろ始まってもおかしくないんだけど…

「多分人数が多いから時間が掛かっているんだと思うよ。だって、今回は個人戦だけで十人ぐらい出場してるし、チーム戦も入れるとかなりの人数になるよ？」

それとも、システムに不調があつたとか？

ん？ システム…不調…

ああ！ 忘れてたよ

教頭先生の協力をしないとイケないんだっけ？

まあ、協力というよりも半ば強制的みたいだったけどね

報酬はそれなりに良かったから構わないけど

「雪音先輩は召喚大会に出場してるんですか？」

吉田くんが雪姉さんに訊いている

「え？ まあ、受験の息抜きに出てみただけだけど、優勝できるとは思っていないよ。流石に召喚獣を操作するのは久しぶりだし、ブランクの大きさは少し厳しいかな？」

「かと言いながら雪姉さんは一回戦は勝ってるね」

「相手が相手だったからな…」

少し気まずそうな顔をして答えた

相手が多分よっぽど弱かったんだろうね、  
考えただけでそんなに落胆するなんて…

一体誰だったんだろ？

《ガラッ！》

すると、再び喫茶店の扉が開いた

入って来たのは、今度こそ姫路さんと島田さんのペアだった

やっと終わったみたいだね。かれこれ三十分ぐらいか？

「あ、姫路さん。どうだった？」

「なんとか勝ちました！ 美波ちゃんのサポートのお陰でした！」

チーム戦だからそりゃそうだろうね

でも、島田さんと足手まといになると思っていたけど、  
案外そうならないんだね

役立たずのまま終わると思ったら、チームワークで勝ってるんだもん

「そちらの方々は…」

琴吹姉妹を見ながら姫路さんはもじもじと訊いて来る

イライラするなあ、もじもじするんじゃないってはっきりと言ってくれよ

鬱陶しいし、なによりイライラして仕方が無い

「僕の一つ違いの姉と妹だよ。姉は三年生の琴吹雪音、妹は一年生の琴吹彩音。雪姉さんはこう見えても先輩だよ？」

僕とあまり背が変わらないしね

「こう見えてってどういう意味だよ？ まあいいか。私は浪都が言っただけに姉の琴吹雪音だ。名字が違うのは触れないでくれ」

手を差し出しながら自己紹介をする雪姉さん

またこのやり取りか…面倒臭いな

「ボクは浪ちゃんの妹の彩音です！」

またもやはしゃぐ彩

まったく、子供は元気が有り余っているね

「へえ、浪都に兄妹が居たんだ？ 言われてみれば似てるけど。ウチは島田美波、浪都の…知り合い？ です」

知り合い？　そこまで仲が良いとは思わないけど…

「私は姫路瑞希です。一応は仲野宮くんのクラスメイトです」

雪姉さんの差し出した手を握手する二人

改めて見ると、僕らはかなり違うね

雪姉さんと彩には僕が持っている”気持ち悪い雰囲気”が無いらしいから、

姫路さんもかなり気楽で挨拶している

僕ってそんなに重苦しいかな？

『これより、個人戦の二回戦を開催したいと思います。各選手は至急会場へと向かってください』

チーム戦が終わったら、どうやら二回戦が始まるようだ

この様子じゃチーム戦と個人戦を交互にやるのかな？

それは好都合だ。それだとピンポイントで根本くんの援護が出来るし、思う存分手助けできる

「だつてさ。行こう、浪都」

雪姉さんも会場へと向かっていく

僕はその隣を歩く

久しぶりに雪姉さんと歩くなあ

まあ、こんな血の繋がっただけの他人と歩く  
なんて御免だけどね

「しかし、浪都も相変わらずだな」

「それは良い意味として受け取っても良いのか？」

「解釈はお前次第さ」

「でも、雪姉さんだって変わらないね。その身長といい……」

「おいおい、身長のこととは止してくれ」

「その”僕を気遣うような話し方”もね」

「ッ……！」

足を止め、しばらく無言になる僕たち

雪姉さんは引き攣った顔になっているけど、  
僕は相変わらずの笑顔だ

雪姉さん……いや、琴吹先輩は何時まで経っても変わらないんだね  
いい加減諦めた方が楽なのに……

「……まだそんなことを言うのか？」

ようやく先輩が口を開く



「それはこちらの台詞だよ。いい加減諦めたらどうなの？

僕はいつまで経っても変わる気は無いし、君も止めたら？

琴吹先輩の目的はただ自分の労力と頭を無駄使いしてるだけだしね」

「諦めてたまるもんか。例えどれぐらい掛かろうと、

私は絶対にお前を元の浪都に戻してやる」

「前にも似たようなことを言っていた人が居たよ。結局は

諦めて、人一倍僕を憎むようになったけど。先輩はいつまで持つのか、楽しみだよ」

そして、僕たちは再び歩を進める

お互い言葉は発しないし、かと言ってお互いを見ているわけでもない

ただ隣同士で歩くだけ

「…着いたようだ」

僕たちはようやく会場に着いた

観客席には既に多くの人々が座っている

どうやら間に合ったようだね

「じゃあ、二回戦も頑張つて、琴吹先輩」

「ッ…！」

苦い表情のまま僕を後にする先輩

あはは、自分の実の姉をあんな表情にさせるなんて、僕も凄くないか？　そこに痺れる憧れるう、ってなんないか？

え？　なんない？　そんなこと言わないでくれよ…

あれ？　僕は誰に話しかけてるんだろう？

それより、なにか忘れているような気がするんだけど…

「ボクを置いて行かないでよオ！」

後ろから全力で走ってきた忘却された人物を軽く避けると、僕は控え室へと向かった

僕どころか、琴吹先輩にも忘れられていたんだね

ドンマイ、彩！

## 十八問 屑と姉とちっちな姉弟（後書き）

いかがでしたか？

姉と妹登場

ちなみに今回からできるだけバカテストをやりたいと思います

ちなみにテスト自体はうる覚えなので原作より  
少々違うと思いますが、お許しください

実はこの前、感想欄にてアンケートの件でとても良いご指摘をされました

実際、この三人が残りましたけどこの三人の中から本当に  
カップリングが出来るのか？、という指摘でした

この指摘をされた後、数日ぐらい悩みました

そして、結論を出しました

アンケートを中止します

本当に申し訳ございません

ですが、アンケートは中止させてもらいます

考え抜いた末に、作者は「自分の文才じゃ無理」だと判断し、アンケートを中止させることを決意しました

”それならカップリングはどうなるんだ？”と

思う方もいらっしやると思いますが、それは

小説投稿以前にチラッと思ひ浮かんだのにさせてもらいます

詳しくは、物語にて

最後に、沢山のご意見を頂いたにも関わらず、こんな  
終わらせ方をしてしまい、本当に申し訳ございませんでした

（睡眠）

## 十九問 屑と物理と二回戦（前書き）

まず、大変遅くなってしまって本当にすみません

活動報告でも書きましたが、かなり忙しなってしまい（ry

ですので時間のある今で意地で書き抜き、投稿しました

その所為でかなり雑になってしまいましたが、お許しください

では、十九話です

バカテスト

『アメリカ大統領の中で、絶大な人気を誇り、現在のオバマ大統領以前では最年少で大統領に当選した歴代アメリカ大統領の名を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ジョン・F・ケネディー』

教師のコメント

『正解です。ケネディー大統領は歴代の大統領の中でも

最も人気があったと言っても過言ではないでしょう。その暗殺までは軍ではなく経済的に合衆国を支え、国民から絶大な支持を持っていました』

吉井明久の答え

『（省略）大統領』

教師のコメント

『省略して誤魔化そうとしても無駄です』

仲野宮浪都の答え

『John F Kennedy ちなみに短歌で僕が書いた意味が分かりましたか？』

教師のコメント

『なにも英語で書かなくても…それと、短歌の件は後で職員室に来てください』

## 十九問 屑と物理と二回戦

### 召喚大会個人戦第二回戦

運よく通過した者、実力で通過した者が参加できる試合

第一回戦を勝ち抜いた者が進めるその試合に、僕は出場していた

一回戦だけあって通過しているのはAクラスやBクラスばかりだけど、

中にはCクラスやDクラスの数名の姿が見える

おそらくは運で通過したと思うけど、一応は確認しておこうか

『それでは文月学園召喚大会個人戦第二回戦を開始したいと思います！』

解説の人がそう宣言する

波乱の召喚大会二回戦の戦いの火蓋が切って落とされた

『最初は第一試合と二試合を同時に行いたいと思います！  
観客の方々は好きな方に席を移動してください』

やっぱり少しずつやるんだね

前回は一辺にやりすぎてかなり混雑しちゃったから

『第二試合！　まずは赤コーナーから！』

お、どうやら僕の試合みたいだね

『予想外にも最低クラスからの進出者です！　実力はまだまだ未知数、一体なにを見せてくれるのでしょうか、二年Fクラス仲野宮浪都！』

Fクラスからの勝ち抜きもあって会場はザワザワしていた

マグレだと言う人、脅迫で勝ったと言う人、八百長試合だとほざく人と様々だ

『そして青コーナー！　巧みの操作技術で一回戦を勝ち抜いた、二年Cクラス堺健太郎！』  
さかけんたろう

召喚フィールドが上がってきたのは、眼鏡が特徴的でいかにも真面目そうな男子生徒だった

多分今時で言う”がり勉”タイプの人だね

「やあ、僕はFクラスの仲野宮。お互い仲良く潰し合おうよ？」

「君みたいにマグレで勝ちあがった人とは潰し合うまでも無いね。そうなる前に君はボクに敗退するのだから」

随分と自信満々だね

自意識過剰？　自己中心的？



まあ、僕が君のそのプラス思考をマイナスまで”墮<sup>お</sup>として”あげるよ

「へえ、随分と余裕だね。もしかして僕が相手だからかい？」

「仲野宮浪都、学園きつての屑で不真面目。勉強もロクにしない問題生徒」

僕が堺くんにそう問うと情報が帰ってきた

内容からして僕の情報だと思うけど、それがどうかしたのかな？

「それがどうしたんだい？ まったく地味な嫌がらせだね。するのなら

もっとストレートに貶して欲しいよ、鬱陶しいんだよ」

「フ、その余裕も直ぐに消してあげるよ。こんな屑にボクは負けな  
いからね」

皆同じようなことを言っていたよ？

”こんな屑には負けない”だの”お前みたいな不真面目は潰してやる”とか

もっと独創さが欲しいものだよ、同じのを聞くと段々飽きてしまう  
んだよ

『では、科目を決めたいと思います！』

フィールドの画面にルーレットが映し出され、勢い良く回転し始める

それがゆつくりと止まると…

『物理です！ では、開始してください！』

また僕の苦手科目か、面倒だなあ

なんでこんなに運が悪いんだろう？

「うう…サモン」

「ん？ サモン」

僕が思わず唸ると、堺くんは不思議そうにこちらを見た

そして、僕の点数を見てニヤリと笑みを浮かべている

『Fクラス仲野宮浪都 物理429点』

『Cクラス堺健太郎 物理471点』

「他の科目と比べると、どうやら物理は苦手なようだね」

ごもつともです、堺くん

今回の僕のこの点数はなにも誤魔化していない、正真正銘僕の物理

の点数なんだ

勉強はしたつもりんだけどねえ…

現代国語が一番低いと言ったけど、実際はこっちの方が低い

恥ずかしくて嘘を言いました、ゴメンナサイ

今回はかなり調子が悪くて、しかも前夜に他の教科を勉強し過ぎて  
理数系がかなり疎かになってしまった

特に科学、数学、物理がとても低かった

それに対して堺くんは物理が得意らしく、400点台まで取っていた

苦手科目で相手の得意科目に勝つなんて…普通できないだろう？

そう…”普通”ならね

「君には丁度良いハンデだろ？」

「その余裕が果たしていつまで持つか？ 女子生徒だからって容  
赦しないよ！」

お互い挑発し合う

ってその発言は聞き捨てならないよ？

僕は列記とした草食系男子さ

それに真面目だと思ったけど、意外にも毒舌なんだね

『では召喚大会二回戦第二試合、始めてください！』

僕は訂正させようとするが、解説の言葉に遮られる。

それと同時に、僕たちはお互いの召喚獣を一步下がらせる

僕と堺くんの召喚獣が対峙している

僕は相変わらずの（以下略）

しかし、手に銃は無く、盾しか持っていない

僕の召喚獣の最大の利点とも言えるのは武器の豊富さだけど、他には自分で武器を持たない設定にも出来る

この場合は遠距離ではなく完全なる近距離戦になるけど、重い銃が無い分動きが素早い

いわば格闘戦用のスタイルだ

そして、堺くんの召喚獣

デフォルメされたCクラスの甲冑、そして細長い長剣  
とてもベーシックな姿だ

手首に付いている腕輪の存在を除けば、ね

「行くぞ！」

その大剣を突きつけて向かってくる堺くん

「おっと」と

それを軽く僕は避ける

「少しはやるようだね、だがそれもここまでだ！」

蹴りを放ってくる堺くんの召喚獣

僕に対して肉弾戦なんて、迂闊だよ？

その足を受け止めると、それを投げ飛ばす

「ぐッ！」

『Cクラス堺健太郎 物理424点』

「やるね、でもこれで勝ったつもりになるなよ！」

挫けず立ち上がり、長剣を振り下ろしてくる

体を軽く捻らして、それを避ける

「振動！」

『Cクラス堺健太郎 物理344点』

次の瞬間、長剣が地面に当たったと思ったら、召喚フィールド全域が地震にでも遭ったのかのように揺れ始めた

「ええ！？」

いきなりのことだと思う僕は動きを止めてしまう

「隙あり」

「あ……」

その好機を堺くんが逃すはずもなく、すぐさま接近してきてその長剣で斬り裂いた

『Fクラス仲野宮浪都 物理298点』

ちッ、今のは利き過ぎたな……

「これが君の腕輪の能力かい？」

「良く分かったね。そうだ、点数は80点使用する度に長剣を振り下ろすことによって大きな地震を起こすことができるんだ」

…いいの、僕に教えても？

仮にも敵だぜ？

迂闊？ それとも必ず勝てるっていう自己陶醉から？

「80点ねえ…地味に高いんだね」

「それほどの価値があるんだよ、この腕輪の能力は。それに、まだまだ使えるぞ？ それに比べて君はもう400点を切っているから腕輪の能力が使えない、勝負あったね」

堺くんの召喚獣はさっきの地震で捲り揚げられた地面上った

腕輪が使えなくなったからって君の勝ちじゃない

そついうのを油断大敵だつて言うんだよ

「甘いね、爆破！」

僕がそう言つと、堺くんの周りの地面が爆発を起こした

「なッ！？」

足場を失い、堺くんの召喚獣はそのまま真っ逆さまに落ちていく

そして、地面に叩きつけられた

『Cクラス堺健太郎 物理301点』

やっと大ダメージを受けたね

これで点数差は無いに等しい

「くッ、何時の間に…」

「君が地震を使って直ぐに僕に攻撃した時だよ。

見たところ君は上から目線の時が多いから、多分僕を

見下してる。なら、思い切って僕を見下ろせるところに

行かないかなあゝって思ったら見事的中したよ。ま、運も

実力の内って言うし」

ラッキーで良かったよ

「フン、なにかと思えば所詮は運便りか。なら警戒

する必要も無い。そもそもFクラスの君がCクラスであるボクに

勝てるはずが無いんだ」

おいおい、言ってくれるね

それなら僕にも考えがあるよ？

「油断大敵、この言葉を良く覚えておくといい。

言っとくけど、僕の爆弾は一発ずつとは限らないぜ？」



再び爆発を起こす堺くんの召喚獣

それを見て本人は驚愕していた

が、その隙に僕は彼の懐に潜り込み、  
盾で彼の召喚獣を殴り飛ばす

『Bクラス堺健太郎 物理235点』

「なッ！？ 馬鹿な、君の召喚獣の点数は  
既に400点を切っているはずだ！ もう腕輪の  
能力は使用できないはず！」

「あはは、もしかして知らなかったの？ 僕は爆弾を  
出現させるには確かに20点使用しないといけなくて、  
400点を切っている時点でもう使えない」

「なら何故……」

困惑している堺くんを僕はあざ笑う

まったく、この学園はなんで柔軟な思考を持っていないんだろう？

長瀬といい、長谷川くんといい、この堺くんといい、  
なんでちよつとだけ作戦を捻ると困惑するんだろう？

「そんなの簡単だよ。一度で複数の爆弾を出現させれば  
400点を切ることなく使用できるよ」

僕の腕輪の能力を正確に言っただげるよ

点数を二十点使用する度に粘着性の超小型爆弾を出現させる。威力は一つじゃ低いけど、何個も使用し、喰らわせることで大ダメージを与えられる

他にも、今回みたいに足場を爆破させて地面に叩き落して大ダメージを与えることも出来る

爆弾の数が低い時は隙を作るために使用もする

つまり、僕の腕輪の能力の強さは単純に爆破させて与えるダメージじゃない

数多くの利用法があるから、僕の腕輪の能力は凶悪なんだ

でも、こんなに低い点数じゃ二発が限界だけどね

この爆弾は大量に使用するのが基本だ

故に二発だけ使えるなら、利用法は駆使するべきだろ？

「そうか、一度で複数出せばまだ大丈夫だね」

どうやら堺くんも納得したようだ

「どうやらボクは君を甘く見ていたようだ。ならもう手加減はせず、全力で君と戦ってやろう！」

そうは言ってるけど、まだ上から目線だね

そんな彼とは逆に、僕は出してやる気も出さない

はあ、こういうタイプの人は一番やり難いなあ…

「別に僕は君と全力で勝負する気は無いんだけどね。

…あ！ 思い出したよ。僕、さっきから君に言いたいことがあったんだよ」

会話した時から言いたかったことがあったんだけど、忘れちゃっていたんだよね。でも、今やっと思いついた

「言いたいこと？」

疑問符にそう言う堺くん

「君ってさあ、ホラー映画で一番最初に殺されそうだよな？（笑）」

この会場の空気が凍った

僕の発言に堺くんは固まる

「なんかさあ、君って自分の力を過信してるでしょ？　そういう人ってホラー映画では自分で怪物を倒そうとして殺されるってパターン

が多いよね？　いやあ、君に似合い過ぎて思わず笑っちゃったよ」

一見すれば嘲笑には少し中途半端だけど、プライドの高そうな人にはこういう微妙なのが一番効くんだよ

「…け…な」

堺くんは地面を向いたまま小声でなにかを言うが、静か過ぎて聞き取れない

もっとはっきりと大声で（笑）！

「Say Clearly！　はっきりと喋ってくれ」

すると突然、堺くんがこちらに顔を上げる

その表情は怒りで染まっている

「ふざけるなアア！！！」

そして、物凄い勢いで突っ込んできた

感情任せの怒りの攻撃、まさに自滅パターンだ

「おっと」

それを軽々と避けると、堺くんの召喚獣が足を踏ん張って立ち止

まり、

僕の召喚獣に向かって剣を荒れ狂うように振り回す

「このボクが！ 君程度に！ そんなことを言われる筋合いは無い！」

お怒りだねえ、さっきまでの余裕は何処に行ったことやら…

「しんどオオ！！！」

『Cクラス堺健太郎 物理155点』

再び80点も使用し、地面が大きな地震を起こす

まさか、そんな攻撃が再び僕に通用するとも思ってるのかい？

さっきは奇襲による攻撃だったからビックリしたけど、能力さえ分かればこんな地震痛くも痒くも無いよ

地震を起こし終わった後、再び急接近して長剣を振り上げているが、それを盾で防ぎ、そのまま堺くんの召喚獣を投げ飛ばす

『Cクラス堺健太郎 物理97点』

投げ飛ばした場所が運よく先が鋭く尖っていた地面だったからなのか、かなり多くの点数を削られた

自分が80点も使用して使った能力がデミリットしか自分に与えていない事実には、

堺くんは益々イライラし始める

「ッ〜〜！！！！ クソがア！ 振動！」

考えすら纏まっていけないのに腕輪の能力を使用する堺くん

勝負あつたね

現時点で堺くんの持ち点は97点だ。そして、腕輪を使用するには80点も消費しなければならない。つまり、腕輪を使った時点で堺くんの点数は僅か17点にまで落とされる

一応は元々の点数が対等の戦いではそれは自殺行為だ

でも、我を忘れている堺くんにはそんなことは分かっていない

僕の狙ったとおり、自分で自滅行為をした

『Cクラス堺健太郎 物理17点』

でも、火事場の馬鹿力なのか、今まで以上の地震が発生する

規模で言うと、震度7ぐらいか？ 召喚獣の再現とかもかなりリアルなんだね

「フオ」

さすがの僕の召喚獣もバランスを崩して倒れてしまう

それを期に堺くんの召喚獣は僕の召喚獣に急接近し、

殴る蹴るの暴行を何度も繰り返していく

『Fクラス仲野宮浪都 物理85点』

大きな攻撃を何度も喰らってしまい、点数は一気に削られる

でも、これで僕の勝ちは確定した

「ククク、ボクに対してそんな口答えをするからだ！  
もう君の点数は僅か85点。削るのは容易い」

あるえ？ もしかして、堺くんは今の自分の状況に気付いていないの？

「知らないの？ よく自分の召喚獣の点数を見ようぜ？」

「なんだと…？ なッ！？ なぜ17点にまで！？」

ようやく自分の点数がここまで落とされていたことに気付く堺くん

「君は点数管理を怠ったねえ、後97点しかないのに  
腕輪使っちゃって。でも、もうそんな細かいことは関係ないよ。  
だってもう僕の勝ちが決まってるんだから」

「もう勝ったつもりかい？ 悪いけど、君にはこれぐらい  
の点数で十分なんだよ！」

へえ、この状況で勝てる気なんだ

逆にどんな作戦があるか見てみたいよ

でも、そんなのに付き合うほど僕は気が長くない

それに、どう足掻いても僕はもう勝ってるんだから

いや、僕と会話してしまった時点で君はもう既に勝機を失っているんだ

「やっぱ気付いていない？ まったく…この学園に人たちは  
どういつもこいつも鈍感だなあ」

「…どういう意味だい？」

そう訊き返してくるが、僕はそれを無視する

「あ、会場の皆さん！ こんな駄目試合に付き合ってくださいって、  
本当にありがとうございます！ 最後はこの私わたくしが最高に笑えるよう  
な結末を

用意しましたので、どうかお楽しみください！ それでは皆さん、  
さようならあゝ！



Ciao！」

そして、僕の召喚獣は足のホルスターから一丁の拳銃を取り出し、堺くんの召喚獣に向けて弾丸を放つ

いきなりの攻撃に一瞬ビクリしていたが、大した速度でないため簡単に避けられる

「はッ！　これが君の秘策なのかい？　甘いね、この程度で勝とうなんて…」

すると、突然堺くんの言葉が途切れる

それはそうだ、急に自分の召喚獣が消えたのだから

『Cクラス堺健太郎　物理0点』

堺健太郎くん、戦死

僕の勝ちだ

『な、なにが起きたのでしょうか！？　急に堺選手の召喚獣が消えました！

弾丸を避けたその瞬間、突然消えました！　一体何が起こったのでしょうか！？』

解説席もかなり大騒ぎしている

簡単に説明しよう

僕の放った弾丸は、元々堺くんの召喚獣に向けて撃ってはいないんだ

僕は”堺くんの召喚獣の後ろにあった壁”に向かって撃ったんだ

あの壁は堺くんが始めて腕輪を使ったときから所々不安定になっていた

それを、さらに怒り狂わせて腕輪を使わせればどんどん弱っていき、最終的には小さな弾丸一発で倒せるまでにね

それに、最後に地震を使ったとき、あのポジションに誘い込めたしね

そして僕は弾丸を放ち、壁を倒して堺くんの召喚獣を押しつぶした

さっきだって会話していたのも、あの壁から注意を逸らすため

そして、弾丸を放ちすぐさま離れ、文字通り彼を潰した

呆気ないフィナーレだ

「じゃあね堺くん、とてもつまらない勝負だったよ。  
出来れば今度は楽しませる勝負をさせてね？」

笑顔でそう堺くん言う

まあ、仮面被りの笑顔だけど

哑然としている堺くんを置いて、僕は会場を後にする

まだ観客とかが意味も分からずザワザワしてたけど、大丈夫かな？

まあいいや

ん？ 待てよ…

僕は会場を離れてようやく気付く

堺くんってまだ僕のことを女子生徒って思ってるよね？

## 十九問 屑と物理と二回戦（後書き）

いかがでしたか？

今回はかなり雑になってしまいました

時間がなかったんです！

多分また今度大幅修正をすると思います

ちなみに戦闘も駄目文全開です。上手く書ける作者様が羨ましい…

バカテスでよく見かけますけど、バカテスのコラボって読んでいて面白いですね

自分でもやってみたい、とは思いますがこの主人公はまったくコラボに向いてませんしね（笑）

次回の更新は…今月中にしたいです

（睡眠）

## 二十問 屑と敗者と友達（前書き）

遅くなってしまって本当にすみません！

色々と忙しくなって、全然執筆ができませんでした

かなりの駄目文ですが、どうぞ

では、二十話です

バカテスト

『このことわざの意味を書きなさい』

『会うは別れの始め』

姫路瑞希の答え

『出会った時から別れが始まっていて、会った人は  
かならずいつかは別れてしまうという意味』

教師のコメント

『完璧です。これは人間の人生の中での切ない  
現実を表現した言葉です。この言葉を胸に、会いたい  
人とは精一杯一緒に居ましょう』

仲野宮浪都の答え

『出会いには続かず、いつかは  
かならず生き別れなどで居なくなってしまう  
という人生の醜い現実を表した嫌なことわざ』

教師のコメント

『一応は正解ですが、どうかしたんですか？  
このことわざを酷く嫌っているようですが…』

FFF団全員の答え

『我々が居る限り恋愛は一瞬じゃあー！ー！』

教師のコメント

『君達ほど”迷惑”が似合う人を先生は  
見たことはありません』

## 二十問 屑と敗者と友達

いよいよ根本くんの試合が始まる

今まで僕は自分の試合があつたから観戦できなかったけど、これedyうやく根本くんを直接サポートできる

それに、小物らしく既に幾つか”仕掛け”や”小細工”もしたしね

『それでは召喚大会チーム戦第二回戦を始めたいと思います！  
まずは赤コーナー！ Fクラスから出場、吉井明久と坂本雄二！』

おいおい、根本くんの相手は代表と吉田くんなのか？

まったく、二回戦でいきなりの大戦かよ

『青コーナーは二年Bクラス、根本恭二と二年Cクラス、小山友香  
！』

代表ペアと根本くんペアがお互い睨み合っている

「坂本…吉井…！」

「よお、女装趣味のBクラス代表さん。今日は女子制服じゃねえのか？」

「あの日の屈辱、今ここで晴らさせてもらっ！」

睨みあっている根本くんと代表を大山さんと吉田くんが苦笑いを浮かべて見守っている

『それでは科目を決めたいと思います！』

画面上にお馴染みのルーレットが映し出され、回り始める

『科目は数が あれ？』

一瞬ルーレットが数学で止まったと思ったら、また急に不自然に回りだした。その様子に解説役は少し困惑している

『か、科目は英語です！ では開始してください！』

「なッ！？ ちょっと待て！ さっき数学で止まってたじゃねえか！」

得意科目だったのが変えられて怒り出す代表

あはは、これは僕が変えたんだけどね

召喚システムにハッキングして数学から英語に変えたんだよ。

前回の試合では代表はかなりの高得点を出したと聞いたけど、それは

代表が勉強して得た点数だ。ほんの数ヶ月で全科目を高くできたら苦勞

はしない。多分理数系ばかり鍛えてるから、こういう”英語”とかの点数



は多分低いと思う。だから、根本くんが有利になるためにわざわざハッキングしてあげたんじゃないか。

「どうした坂本？ 怖気付いたか！ サモン！」

「ちッ、サモン！」

『Fクラス坂本雄二 英語73点』

『Fクラス吉井明久 英語53点』

『Bクラス根本恭二 英語199点』

『Cクラス小山友香 英語165点』

あらら、前回の179点とはかなり差が出来てるね、代表

「雄二……」

「なんだ明久？」

「勉強したんじゃないの？」

吉田くんは失望したような目で代表を見ている

でも、そんな代表より君の方が低いよね？

「短い期間で全科目は無理だ！」

やっぱりね

それでもその代表より低い吉田くんってどうなんだろう？

「安心しろ明久、手は打ってある」

…なに？

すると代表はポケットから携帯を取り出し、誰かの掛け始めた  
誰に電話してるんだ？

「もしもし、ムツツリー二か？ 例の物を出せ」

代表がそう言うのと、突然会場に一冊の本が投げ入れられた

…あれは！？

「拙い！」

僕は急いで腰から拳銃を取り出し、その本を打ち抜いた

「なにッ！？」

その様子に代表は驚愕していた

まさか、あの本を使うなんて…

僕より汚くないか？

「お前…その本は！」

「ちッ、どうやらバレたらしいな…」

あの本は、Bクラス戦後に根本くんが女装された時に撮られた写真集だった。あの本を大山さんに見せて棄権させるつもりだったのか…僕より汚くないか！？

「どこまでも汚い真似を…！」

流石の根本くんも怒っている

「どの口から言ってやがる、屑が」

表情には見せていないけど、多分あの作戦が成功しなくてかなり動揺してるね

まったく、真っ向勝負もしないでなに優勝狙ってるんだろう？

『早く試合を開始してください』

解説の人から試合開始を強いられると、根本くんは舌打ちをし、大山さんの方を向いた

「坂本は俺に殺らせてくれ、吉井のことを頼めるか？」

「あんなFクラスの馬鹿コンビに負けるはずがないでしょ？ 任せ  
て」

根本くんはどうやら一対一で代表を潰すそうだ

今回の根本くんは一味違うね。正々堂々  
真っ向勝負で代表に挑むなんてこの前までの  
根本くんとは大違いだよ

「行くぞ坂本！」

二つの大鎌を握り締め、代表の召還獣に突進する  
根本くんの召喚獣

「甘え！」

だがそれを代表が難無く避けると、自身の召喚獣のメリケンサックで

根本くんの召喚獣の顔面を殴り飛ばした

「ちッ！」

『Bクラス根本恭二 英語131点』

クリーンヒットしたにも関わらずまだ100点も点数が残っているところから、代表の点数の低さが災いしたね

「どうした坂本！ 利いてないぞ！」

大鎌を振り上げ、代表に向かって振り下ろした

だが代表はそれを両手で受け止め、根本くんの召喚獣を  
大鎌ごと投げ飛ばしていた

さすがは”悪鬼羅刹”って呼ばれていた代表だね。  
戦闘スタイルも殆ど喧嘩に近い

「はッ！ てめえみてえな雑魚の攻撃なんざ当たらねえよ！」

代表は根本くんの数々の攻撃の失敗を見て嘲笑っていた

一体どっちが屑なんだか…

「訊いておくが坂本、お前はともかく、吉井は大丈夫なのか？」

「どついう意味だ？」

「言っておくが友香はCクラス代表だぞ？ あの吉井の  
貧弱な点数じゃ十分も持たないと思うが」

多分根本くんは大山さんがさっさと吉田くんを片付けて  
自分をサポートしに来てくれると思っているんだね

でも残念だよ根本くん

「てめえは明久を嘗めすぎだ。こちらも言っておくが、  
明久は観察処分者だぞ？」

「それがどうした？ そんなバカの代名詞の  
称号を持つてようが、関係ないぞ」

「馬鹿なのはてめえの方だ根本。観察処分者つてのは  
痛みがフィードバックするに加え、物質に触れることが可能になる  
んだ。」

だから明久はいつも教師の雑用係にされてる」

そう、観察処分者は教師の雑用係だ。人間より断然腕力のある召喚獣を利用して物を運んだりするんだ。つまり…

「だからそれがどうしたっていうんだ」

「分からねえか？　なら教えてやるよ。観察処分者  
つてことはつまりな…」

学園一の操作技術を持つてることなんだよ！」

すると突然、大山さんの召喚獣が根本くんの方に飛ばされていた

『Cクラス小山友香　英語0点』

「なッ！？　友香！？」

「こっちは終わったよ、雄二」

「ご苦労だったな明久。さあ、残るはこの屑野郎だけだ」

そう、観察処分者っていうのはつまり

召喚獣を使う時間と回数がほかの生徒と比べて  
極端に多いんだ

極端に多いっていうことはその分経験が重なって、  
操作技術は他を遥かに凌駕する

だから吉田くんの操作技術は僕も含めてこの  
学園の誰よりも、天下一品なぐらい上手いんだ

『Fクラス吉井明久 英語53点』

例え点数が低かろうが、攻撃をひたすら避けて  
自分だけダメージを与えていれば、どれだけ相手の  
点数が高くても逆転できる

それが僕が集めた情報の中にあつた吉井くんの強さだ

「くッ！」

根本くんが唾然している隙に、代表は接近し  
パンチを顔面に当てた

『Bクラス根本恭二 英語74点』

根本くんの点数と代表の点数が並んだ

「さ、坂本オオ！！」

根本くんはそう叫びながら代表に突進した

「決めるぞ明久！」

「オッケー！」

代表と吉田くんも根本くんに向かって突進する

「もう一辺その頭を冷やして来い屑野郎！」

代表のメリケンサックと吉田くんの木刀が

根本くんの召喚獣の頭を挟み撃ちにし、文字通り  
”サンドウィッチ”にした

『Bクラス根本恭二 英語0点』

根本くんの負け、か…

『そこまでです！ 勝者はFクラスの坂本雄二と吉井明久です！』

そう解説が宣言すると、会場が歓声に包まれた

「あんな点数差があつたのに勝てたのか！」や、  
「かつこよかったぞ！」などの声が聞える

「てめえが正々堂々俺達に挑んできたのは  
褒めてやる。だがな、それでもその他人を見下す  
ようなことをやめねえ限り、てめえは俺達には勝てねえよ」

代表は落ち込んでいる根本くんに向かってそう言い放つ

あはは、面倒見の良い代表らしい言葉だね



でも、それは間違ってるぜ代表？

別に根本くんは人を見下してるから勝てないんじゃない。

彼は僕と同じで、人生の敗者だから負けるのは仕方の無いことなんだよ

視点ー 根本恭二

「クソ！」

会場から出た俺はそう叫ぶ

何故だ！？ 何故かてないんだ！？

そんな俺を見て、友香は冷たい視線を送ってくる

「さようなら、恭二」

「ちょっと待ってくれ！」

だが、そんな俺の悲願に友香は聞く耳も持たない

「言つたでしょ、この大会で優勝できたら  
また付き合つてあげるって。でも、よりもよつて  
Fクラスの馬鹿コンビに負けたんだから、もうお終いよ」

「待て、考え直してくれ友香！」

「あ、それと…」

友香は振り向かず俺に向かってこう言つた

「私のこと、名前で呼ばないで？」

その言葉を聞いた俺は膝から崩れてしまった

そして、友香の姿は見えなくなる

「…クソオオ！！」

何でだ！ 何で俺がこんな目に…

「やつほー！ 残念だったね、根本くん」

「…なんの用だ、仲野宮？」

俺の目の前に現れたのはチビの女子みたいな  
顔立ちをしている男子生徒、仲野宮だつた

召喚大会で俺に協力はすると言つたが、俺は  
サポートなんてまったく感じなかった

「まったく、僕がせっかく科目を代表の苦手科目に  
してあげたのに、なんで負けちゃってるんだよ？」

「…あれは、お前の仕業だったのか？」

急に科目が変わったり、坂本が  
友香に見せようとした本が急に弾け飛んだのも

「ご名答。まあ、分かり難かったと思うけど。ちなみに  
君が出場した試合の全てに同じことをさせてもらったよ」

俺の出場した試合とは言っても、二試合しか出てないがな

そうか、そうだったのか

俺の得意科目ばかり選ばれるわけだ、全部こいつが細工していたのか

「まあ、それでも君は勝てなかったけどね」

お前まで言うのか、仲野宮

「まったく…ここまでしてなんで勝てないんだよ？」

「黙れ！ お前になにが分かる！？ 俺でも分からないんだよ、  
何故勝てないかが！ なにをやってもいつもあの馬鹿コンビに負か  
される！

もう何故かてないかまったく分からないんだよ！」

お前みたいに出鱈目な点数なんて俺は取れない、そんなことも

こいつは分らないのか！

「何故勝てないかって？ そんなの簡単だよ。」

君はまだ幸せになろうとしているからだよ」

幸せになろうとしているから、だと？

「なんだと…？」

「君はまだ自分が幸せになれると思ってるからだよ。  
なれるはずも無いのに、そんな叶えられない目標なんか  
持つてるから勝てる試合も勝てず、負け続けてしまっんだ」

ふざけるな！ 俺が、幸せになろうとしてるからだと！？

俺だって人間だ、幸せになろうとぐらい思うだろ！

「その話が本当なら、俺になにをしろって言うんだよ！」

「認めるんだよ」

認める、だと？

「…認める？」

「そう、認めるんだ。自分は屑だ、負け犬だ、人生の負け組だ、社会の塵だ、絶対に他人と仲良くなれないって。自分自身に起こること

を全て認めるんだよ。争おうとするな、受け入れる

認めて、そして忘れようよ。幸せの意味を忘れれば良いんだ。そうすれば、”不幸せ”の意味も忘れられるからね。だって、もし幸せを知らないなら、不幸なことが起こっても気付かないよね？それを”不幸”だと感じないよね？ だから忘れるんだよ。幸福も、不幸も」

ッ…！

「認めて、忘れるんだ。そして、受け入れる。

不条理を、理不尽を、嘘泣きを、言い訳を、

いかがわしさを、インチキを、墮落を、混雑を、

偽善を、偽悪を、不幸せを、不都合を、

罵声を、流れ弾を、見苦しさを、みつともなさを、

風評を、密告を、嫉妬を、格差を、

裏切りを、虐待を、巻き添えを、二次被害を、

暴力を、恨みを、憎しみを、辛さを、

『全てを受け入れるんだよ』

そうすればきっと、僕みたいに不幸も辛く感じなくなるよ」

…そうか

思わず俺は地面に座り込んでしまう

受け入れること、か

上等だ

それなら仲野宮、受け入れてやるよ

不幸も、不幸せも、罵声も、全て受け入れてやるよ

それでこの辛さが少しでも無くなるなら、受け入れてやるよ

「どう？　気分は良くなったかな？」

そうだ

なにもかも受け入れると、不思議と体が軽くなって、すっきりした気分だ

一気に全てを受け入れるのが、ここまでとはな

「ねえ根本くん？」

「なんだ仲野宮？」

「友達になろう？」

仲野宮は笑顔で自分の手を俺に差し出した

今まで俺を汚いと、屑だと言ってきた連中とは違つて、仲野宮のその手に、偽りは感じられなかった

ただ純粹に、友達になろうとしているだけだ

同じ屑の仲間つてか？

「まったく、とんでもない奴だよお前は」

俺はその手を受け取り、立ち上がった

「じゃあよろしくね、恭二くん」

始めての本当の友達が、笑顔でそう言ってくれた



## 二十問 屑と敗者と友達（後書き）

いかがでしたか？

根本くんには雄二・明久コンビとちゃんと戦ってもらいました

負けましたけど（笑）

そして、まさかの主人公と友情成立。主人公の心境はあえて書きませんでした

次回の更新は…いつになるか分かりません

今月までに投稿したいです…

～睡眠～

## 二十一問 屑と喧嘩と異変（前書き）

またまた遅れてしまいました

不定期更新を早く脱したいです…

はあ…では二十一話です

### バカテスト

『日本の水泳のルーツはどこから来ましたか？』

姫路瑞希の答え

『元々は日本の武士が川を渡る際に使用した

泳ぎ方が伝わったことが、水泳の始まりと言われています。

それが現代まで伝わり、今の水泳に至ったと考えられています』

教師のコメント

『正解です。あまり知られてはいない豆知識なので、知っているのに先生は驚きました』

土屋康太の答え

『柴田亜衣』

教師のコメント

『確かに、柴田選手は日本の誇る水泳選手ですが、不正解です』

仲野宮浪都の答え

『 < ( ^ | ^ ) > 』

教師のコメント

『 テストの回答用紙を落書きに使わないでください 』

## 二十一問 屑と喧嘩と異変

『さあ始まりました召喚大会個人戦準決勝！ 一回戦、二回戦を勝ち抜いた強豪たちによる一騎打ちがまもなく開始します！』

恭二さんと友達になった次の日、やっと召喚大会準決勝が始まった  
ここからは少し厳しくなりそうだ

準決勝に出場してることとは、最低でも  
二連勝はしているってことだ

なら、それほど強力な人たちが出てくるってことだよ

『第一試合を開始します！ まずは赤コーナー！  
これまで二試合、我々の度肝を抜くような策略で勝利して  
きた最低クラスの生徒、二年Fクラス、仲野宮浪都！』

名前を呼ばれると、僕はフィールドへ上がる

そこまで驚くような策略だったかな？  
ちよつと頭を捻れば簡単に気付けるような  
作戦だったと思うけど…

『対する青コーナーは！ これまで圧倒的な点数と  
操作技術で快勝してきたまさに才女！ Fクラスの  
ダークホース相手にどう戦うのでしょうか！  
三年Aクラス、琴吹雪音！』

ッ…！

よりもよって琴吹先輩が相手かよ…

どこか威圧的な雰囲気を出し、

なにか決意を固めたような眼差しで

琴吹先輩はフィールドに上がってきた

いったい何を考えているのやら…

「一日ぶりだね先輩。なにかあったの？」

いつもより一段と増して凛々しい雰囲気だけど」

「あれから考えたんだよ」

「考えたのはなにか知らないけど、どうせ十分ぐらいだろ？」

そうならかなり短い Thinking time だね」

「なぜ浪都がこうなってしまったか、なぜ浪都

はここまで私たちを拒絶するのかを、考えたんだ」

先輩は僕の言葉を無視して続けた

せめてなにか反応ぐらい見せようぜ？

僕が虚しくなるからさ

「別に僕は先輩のことなんか拒絶してないさ。

いや、なんとも思っちゃ居ない。好きでもないし、

嫌いでもない。死んでほしいとも思ったことはないし、

生きて欲しいとも思ったことはない」

「ッ……！」

僕の発言に表情が歪んだ

自分の考えを正直に言ったのに、なんで  
そんなリアクションをとるのかな？

「……本当にそう思ってるのか？」

「はい？」

「本当に、私になにも感じないのか？」

「全然」

「ふざけるな！」

琴吹先輩の表情は怒り、いや、激怒に染まった  
表情で僕に怒鳴ってくる

気に障ることも言ったか？

「おいおい、僕に怒るのはお門違いだぜ？　だって、これは先輩が望んだことだろ？」

「望んでなんかいない！　浪都は勘違いをしてないか？」

「勘違いはそっちだろ？　君達はもしかして本当に僕がなんとも思っていないってことを信じられないのか？」

「それを勘違いだと言ってるんだよ！　私も、彩音も、誰も浪都がこうなることを望んでなんかいない！」

おいおい、僕を一人にした張本人がなにぬかしてんだよ？

君は忘れてるだろうけど、僕は覚えてるぜ？

琴吹先輩が僕に向かって、”消えろ”って言ったのを

「望んでないなら、あんな言葉は出ないはずだけど？　そもそも僕に消えろって言ったのは君達だぜ？　僕はお望み通り先輩たちに着いては行かなかったんだ。もし本当に先輩は僕と一緒に居たかったのなら、それは消えろって言った先輩の所為だ。つまり…」

『僕は悪くない』

無言になってしまふ先輩

どうやら思い出したようだね

あの日、先輩が僕に言ったこと

”消えろ”

あはは、今思えば、笑えてくるな

あの日からだっけ？ 僕にとっては、  
最初で最後の”悲しい”っていう感情は

「浪都…」

啞然とした先輩を他所に、僕は解説の人たちに向き合う

「空気を読んで待っててくれたのはありがたいけど、  
いい加減初めてくれないかな？ もう飽きてきたし」

『す、すみません。では科目を決定します』

さっきまで啞然として会話を止めなかった解説席がようやく  
巨大スクリーンのルーレットを回し始めた

観客の人もそろそろ待ちくたびれたと思うし、  
野次が飛ばされる前に始めないとね

僕は慣れてるけど、先輩は慣れてないから



色々面倒だし

先輩は耐えられるかな？

僕が十年間も味わってきた苦しみを

『科目は現代社会です！ それでは試召戦争、開始してください！』

ようやく僕の得意科目が出てきたか

基本、僕は科目が得意か、不得意なんだ

”よくも無く、悪くも無い”なんて科目は無い

All or nothing

翻訳すると”全て”か”なにも”だ

まさに僕の学力を表したことわざだ

「サモン」

「…サモン」

先輩のやる気のない声で、僕たちの勝負が  
幕を開けた

『三年Aクラス琴吹雪音 現代社会401点』

Aクラスなだけあって、点数はそこそこ高い

装備は、体が軽そうな簡単な武士の鎧に  
弓矢だ。これは先輩の男勝りな性格の所為かな？

『二年Fクラス仲野宮浪都 現代社会688点』

今回は勉強した甲斐があつて点数はいつもより  
少し高い。思つたより上がらなかつたけど

やっぱりずっと勉強してなかつたブランクは厳しかったかな？

「ッ……！ どれだけ変わつてもその出鱈目で  
理不尽な脳は変わらないんだな……」

「理不尽なんて失礼な、僕が偶々よく出来たんだから」

「偶々、ねえ。偶々そんな点数が  
取れるなんて浪都ぐらいだぞ？」

褒め言葉として受け取つておこつか

「でも、その方が私もやる気が出るし、ねッ！」

僕の返答も待たず、琴吹先輩は弓を放つてきた

おいおい、戦闘狂つて本当に居たのかよ？  
まったく……そういうのは週間少年ジャンプのバトル漫画  
だけにしたいなあ

「バトル・ジャンキーって実際に居ると引くね。気持ちわりい」

軽いノリを持ったまま僕はその弓矢を避けた

まだ本気ではないね、簡単にかわせるスピードだった

「お互いが遠距離系って、こういうところだけは何気に似てるんだね。

僕の方がまだ断然に近代的だけど」

お互いが長距離戦型だから派手さには欠ける

元々観客の人たちは少年漫画のような

正々堂々の殴り合いっぽい感じの戦いを期待してるだろうし

「それもそうだな。でも、浪都が銃を持ってるからって弓矢が負けるとは限らないぜ？」

すると、物凄いスピードで矢を弓に引っ掛け、

さっきとは比べ物にならないぐらいの速度で弓矢を放ってきた。やっと本気ってわけか？

はあ、僕としてはそのまま本気じゃないまま戦いたかったなあ

だって、相手が本気になると勝つのが難しいじゃないか

バトル漫画とかでは手加減して戦われると

屈辱的だ、って言うけど、手加減されてる方が

勝ち易くないか？ 勝ちには勝ちなんだから、そんな

綺麗言より勝利を喜ぼうぜ？

「避けなければ、受ければいい」

流石にあの速度はかわせないから、盾の後ろに素早く  
潜り込んでその一撃を防いだ

無理にかわす必要もないし、どちらかと言うと  
防ぐ方が安全だ

木で出来た矢が防弾の盾を貫くはずがないし、  
動作的にも素早いから確実にダメージを防げる

「矢を刺さったまま放置してもいいのか？」

微笑みながら琴吹先輩は言ってきた

どういう意味で…

「炸裂！」

先輩がそう言い放つ

すると、さっきまで盾に刺さった矢が突然爆発した

その衝撃で吹き飛ばされ、盾も壊される

『Fクラス仲野宮浪都 現代社会614点』

ちッ、腕輪の能力か

「驚いたか？」

「色んな意味で驚いたよ。まさか先輩の腕輪の能力が僕と同じなんて」

まさか、発動キーこそ違うけど、腕輪の能力自体は僕とほぼ同じだ。爆破させる物質が違っただけだ

いや、どちらかと言うと先輩の腕輪の能力の方が戦闘に向いていそうだ

弓矢だから速度は僕の小型爆弾よりあるし、なにより狙いを定められることはかなり大きい

正確に爆破させたい箇所を選べるから、僕の超小型爆弾より性質が悪い

でも、僕の超小型爆弾は奇襲こそ最大の武器なんだ

奇襲や奇策で相手の同様に誘って隙を作り、そこを攻めるなんとも嫌味な戦法だ

僕と先輩じゃ戦闘スタイル自体が違うみたいだ

「やってくれたね。でも、先輩だって油断できないぜ？ 爆破」

「！！」

すると、今度は先輩の方が爆破した

『Aクラス琴吹雪音 350点』

これで先輩の腕輪の能力は封じた

「何時の間に…」

何時の間につて、さっきだよ

何度も言うけど僕の爆弾はただの爆弾じゃない。  
目に見えない超小型爆弾だ

なら、気付かれず仕掛けることなんて造作でもないよ

「これで先輩は腕輪の能力は使えない。戦力半減だぜ？」

大きな武器を削ったのに先輩はまだ涼しい顔をしている

「そうでもないだよなあ〜これが」

僕の発言を無視し、先輩は弓矢を放ってきた

でも、なにかがおかしい

幾らなんでも弓の向かってくるスピードが遅すぎる

まるで子供が投げるバスケットボールみたいだ

それぐらいの超低速

「なにを考えてるんだ？」

「こっぴつことだよ。炸裂！」

すると、封じたはずの腕輪の能力が再び発動した

予想外のことに焦った僕はモロに攻撃を喰らってしまった

『Fクラス仲野宮浪都 現代社会439点』

ちッ、大ダメージか

「おいおい、400点切っても腕輪の能力が使えるって  
どういう意味だよ？ まさか反則？」

「私がそんなことするわけないだろ。ま、これは  
腕輪の能力の特徴の一つみたいなものだ。私はこの自分  
みたいなタイプの腕輪の能力を”永続腕輪能力”と呼んでいる」

永続腕輪能力？

「なんだそれ？ 僕はそんなの聞いたこともないけど」

「私が勝手に命名したんだから当たり前だろ。こっぴつ  
タイプの能力は、一度でもいいから点数を支払えば、その  
戦闘中は400点を切っても腕輪の能力が使用できるんだ」

『Aクラス琴吹雪音 現代社会250点』

おいおい、なんだよそのチート？

明らかに僕より使い勝手が良いじゃないか

まあ、そんな都合の良いだけの能力なんて存在しない

その証拠に使用するためには一気に百点も使用しなくちゃいけない

「本当に知らないのか？ 確か浪都の前回の  
対戦相手もそうだったと思うけど…」

前回の対戦相手？

…ああ！ あの物理得意のCクラスくんか！

名前は覚えてないけどね

彼も何気にそのタイプの能力だったんだね

「余計な情報は消去するようにしてるから。例えば  
君達の記憶とかをね」

「ッ…！ まだそんなことを言うのか…！」

人間の人権の中には”発言の自由”というものがあるんだよ

僕がなにを言おうが勝手なことだろ？

「それよりさっさと試合を続けようぜ？ こんな馬鹿馬鹿しい  
試召”戦争”は出来るだけ早く終わらせたいんだ」

「…相変わらず、お前は戦争が嫌いなんだな」



憎たらしい目で僕を睨んでくる先輩

おいおい、なんで僕が睨まれなくちゃいけないんだよ？

争いごとが嫌いなのは素晴らしいことって  
この前読んでた少年漫画に書いてあったけど

「悪いかな？」

「いや、ただ、滑稽だと思ってね」

滑稽？

「どつという意味だい？」

「浪都はいいい加減私にお前を元に戻すのを諦めろって、  
過去を何時までも引き摺るのは見つとも無いって言っただろ？」

「言っただけど、それが？」

「そついう浪都こそ、過去を悔やんでるじゃないか」

僕が…過去を悔やむ？

「私は知ってるぜ？ 浪都がこんな狂ってるのも、  
戦争が嫌いなのも、父さんと母さんの所為だって」

……

「あの二人が死んだ所為で、浪都はこんなにもぶっ壊れたんだろ？」

……

「でも、それは過去を引き摺るのと同じじゃないのか？」

……

「なのに、私には過去を引き摺るなど言ってるけど、言ってることとお前がやってることは矛盾してるぜ？」

……

「いつまで黙ってるつもりだよ？ 悪いが、今回は黙ってても逃がさないぜ？ 私はもう決意したんだよ。この試合に勝ってお前の目を覚まさせるって」

……

「だから、その考えをまずは直せよ？ 世界は浪都が思ってるほど醜くもないし、人間っていうのは美しい生き物だ」

視点― 無

琴吹雪音の発言に、仲野宮浪都は一言も返さない

地面に俯いたまま表情も見せず、

吐息すらしているのかが疑問なほど身動き一つとらない

石のごとく硬直した浪都に、雪音は意味が分からず  
不安を感じ、表情が少し強張っている

あくまで雪音は浪都を昔の浪都に戻すのが  
目的であり、この数多くの発言は自身の間違いを認識させるため  
であった

仲野宮浪都の一番大きな問題

それは”罪悪感の無さ”だった

自分は悪いとは思わず、罪悪感が一切ない

故に『僕は悪くない』という台詞が出てくる

そんな浪都に少しでも罪悪感を浮かばせようと、雪音は努力していた

「浪都がやっていることは全然論理的ではないし、  
正しいわけでもない。屁理屈を並べてるだけなんだよ。

正直、自分でも満足してるのか？ 今の浪都の立場を。

皆からは恐れられ、嫌われ、憎まれる。そんな自分の  
状況と立場に、お前は本当になにも感じないのか？

それだけじゃない。流歌ちゃんとも喧嘩してるんだろ？  
流歌ちゃんはお前にとっては唯一の親友なのに、なんで酷い

ことをするんだよ？

いい加減もう過去は引き摺るなよ。

父さんも母さんも海都兄ちゃんも」

「うるさい……」

次々と語る雪音に、ようやく浪都が口を開く

「そうやって事実を否定するなよ。大丈夫だって。私も彩音も、流歌ちゃんだって許してくれるから」

「…ま…れ」

なにかを呟いた

そして、ようやく浪都はその俯いた姿勢を正し、顔を雪音に向けた

「『うるせエって言ってんだよメエエエエ！……！……！……！』」

さきほどまで状況が分からず騒いでいた観客の全員を  
一瞬にして静寂にさせるほどの雄叫び

その瞳には憎しみと憎悪の塊が宿っていた

## 二十一問 屑と喧嘩と異変（後書き）

いかがでしたか？

今回は何度も別の日に書いたので、作風が所々違いかもしれませんが

そして、最後は主人公の激怒

中途半端な終わり方です…

（睡眠）

## 二十二問 屑と姉と嘔吐き（前書き）

本当に遅くなってすみません

文章では分からないでしょうが、自分は今土下座してます

ですが、やっと二十二問です

遅くなったのに今回は短めです

本当にすみませんでした

では、二十二話です

バカテスト

『武將、織田信長が明智光秀により暗殺された場所はどこでしょう？』

姫路瑞希の答え

『本能寺』

教師のコメント

『正解です』

吉井明久の答え

『寺』

教師のコメント

『君にしては頑張ったでしょう』

仲野宮浪都の答え

『地球』

教師のコメント

『その答えは卑怯です』



## 二十二問 屑と姉と嘔吐き

この会場を振るわせるほどの咆哮

怒り、憎しみ、悲しみ、苦しみ、  
あらゆる負の感情を掌握した表情

仲野宮浪都は、今までの醜態からは  
考えられないほどの人格へとなっていた

冷徹な屑の面影はなくなっていた

「てめエ、さっきから言わせてみりや全部僕がわりイとか  
言ってるけどなア！ そんな僕をこんな風にしたのは何処のどいつ  
だア？」

「何もかも人の所為にするな！ 自分の非も」

言い返す雪音を、浪都は遮りながら  
言葉を続けた

「僕が言いてエのはそんなことじゃねエんだ！ てめエは  
正論を言ってる気で居るかもしれねエだろうが、僕から言わせて  
みりア僕を全否定してなにもかも自分が正しいつつってる風に聞え  
るなア！」

子供のような、挑発するような口調はガラの荒い、  
まるで殺人鬼のような口調へと変わっていた

そこまで変わり果てた浪都を見て、雪音はただ啞然とするだけだった

「そもそもなァ！ 自分から消えろつつってんに  
またまた自分から戻ってこいっつうのは都合が良過ぎるん  
じゃねエのか、あァ？ 僕にとってアレがどれだけ深く  
突き刺さったのかてめエには分かるのか、えエ？」

「ッ……！」

言葉の連打に雪音は苦い表情を見せる

「だがまァ、それでも僕にだって非つつうのはある  
とは自覚してんだけどよオ。まァ、今は堪忍してやらァ」

そう言うと、浪都は自分の顔を手で覆った

しばらくすると、その手をどける

そこの残ったのは、いつも通りの  
幼い子供のような表情に戻った浪都だった

笑顔で雪音を見つめながら立っていた

「琴吹先輩のあの言葉は僕に深く突き刺さったんだぜ？  
自分が最も信頼して、尊敬して、好きだった姉に  
言われたあの言葉はね。

知ってる？ 言葉ってね

刃物より

拳銃より

爆弾より

炎より

地震より

自然災害より

人を簡単に殺すことが出来るんだぜ？」

元の口調に戻った浪都は、雪音に向かってそう言う

言葉の意味の強さ、怖さ、危険さを言い放つ

啞然とし、座り込んでしまう雪音にさらに畳み掛ける

「琴吹先輩と彩が叔父さんと一緒に行っちゃった後、僕は一人で考えたんだ。」

皆居なくなつた。大好きだつた家族がたつたの一ヶ月で全員居なくなつた。

それは僕の所為なのか？ 僕が悪いのか？

そしてたどり着いた結論は、”全てが悪い”  
”ってことだよ”

「全てが…悪い？」

浪都の導き出した答えを聞き、雪音は疑問符だった

殆ど思考が停止してしまい、思考すらままならない雪音だが

「そう。漫画によく出てくるような台詞だけど、事実さ。

父さんを殺したのは、爆弾を仕掛けたテロリスト、つまり戦争だ。

母さんを殺したのは、罵声を浴びさせた世間だ。

雪姉さんを僕と離れ離れにしたのは、勝手に死んでいった母さんだ。

彩を僕と離れ離れにしたのは、彩を連れて行った雪姉さんだ。

全部皆が悪いんだ。

だから

『僕は悪くない』」

止めと言わんばかり笑顔で言い放つ浪都

必死で言いかけた言葉がなんの意味も為さなかった  
事实に、雪音はただただ呆然としていた

地に座り込んでしまい、虚無の表情で浪都を見つめている

「どうしたの雪姉さん？ 僕の顔になにか付いているかい？」

そう問いかけるが答えは帰ってこない

「あはは、こりゃ駄目だ。すみませーん！ 琴吹雪音さんは  
もう棄権だそうでーす！」

浪都は解説席そう告げた

試合などもう続けられる状況じゃないと浪都は判断し、棄権させた

そんな状態の雪音に見せた、浪都の最後の優しさだった

『え？ あ、はい！ Aクラス琴吹雪音棄権！ よって勝者は  
Fクラスの仲野宮浪都です！』

「へーい！ じゃあ、行こうか雪姉さん」

浪都は雪音の座り込んでいる反対側の箇所まで  
行くと、肩を貸しながら雪音を立たせる

そのまま会場を出て行った

《おいおい、ふざけるなよ！》

《試合はどうしたんだよ、つまんねェな!》

《棄権するんなら最初っから来るんじゃないやねェよ!》

そんな二人に、観客席に居た観客が嵐のような  
クレームを浴びさせる

二人の姉弟に容赦なく放たれる罵声

そんな様子に、浪都はただただ笑顔で居るだけだった

視点― 仲野宮浪都

「…浪都は大丈夫なのか…あんなことずっと言われて…?」

会場から出た僕に雪姉さんは弱々しく問いかける

でも、その声に気は無い

元々容姿は結構良くて、かなりモテた  
雪姉さんには似合わないような声に、僕は  
少しキョトンとしてしまった

あの力強い口調からは想像も出来ないね

まあ、心を叩き折ったのは僕なんだけど

「愚問だぜ雪姉さん

思い通りにならなくても

負けても

勝てなくても

馬鹿でも

踏まれても蹴られても

悲しくても苦しくても貧しくても

痛くても辛くても弱くても

正しくなくとも卑しくても

それでもヘラヘラ笑ってるのが『僕』だ」

「…そうか…」

僕の答えに一言頷いてから無言に戻る雪姉さん

それから一言も喋らないまま歩く

「あ、長瀬！ 珍しく会いたかったよ」

自分の試合を待っていたのか会場に向かって  
歩いている長瀬を見かけた

僕の発言に少し顔を赤くしながらも、  
「紛らわしいことを言うな！」って怒られた

あはは、なにを勘違いしてるんだろう？

「ちょっとこの人頼めるかな？」

「この人？ って雪音さん！？」

肩に寄りかかるように歩いている雪姉さんを見て、  
長瀬は驚きの声を上げた

「うん。少し体調を崩しちゃってね。保健室にまで届けてくれないかな？」



「良いけど…なんでアンタがしないのよ？」

「僕はこれから少し用事があるんだ」

長瀬に雪姉さんを預けると、僕はとある待ち合わせ場所へと向かった

「あはは、ゴメンね恭二くん。遅くなつて」

僕は校舎の近くで待ち合わせしていた恭二くんにそう言った

まあ友達だし、伝えたいことはあつたからね

「おいおい、ある意味凄い展開だったな。お前、  
実はあんな性格なのかよ？」

「ああ、アレね。」

あれはただの仮面さ」

「は？」

僕の言葉の意味が分からないのか、恭二くんは  
疑問符にキョトンとした

「あんなのただの仮面被りさ。僕があんな荒い口調なはずがないだろ?」

「つまり、さつきのは全て嘘だと?」

「うーん…微妙かな? あのリアクションは完全にオーバーだし、あんな口調なんてとんでもない。でも、雪姉さんの心を叩き折るにはあれが一番効果的だと思うんだ」

「お前…ホント最低だな」

「あはは、承知してるさ。そもそも人類最低の僕たちはあんなことをしても無くすことなんてなにも無いんだよ。失うものがなにも無いんだから」

僕は悪くないしね

「ねえ恭二くん、チーム戦はどうなってる?」

「吉井と坂本が順調に勝ってるさ。アイツ等は何気に強敵だしな」

直に戦った恭二くんだからこそ分かるんだね

坂本くんの作戦と頭脳、そして吉井くんの機動力

この二人が揃えば恐らくは敵無しだ

だから僕は彼等と戦いたくないんだ

今回は勝たないと拙いしね

「やつぱりね、あの二人は所謂”主人公”

みたいな人たちだから、勿論強者さ。でもだからって、正々堂々戦わなくてもいいんだぜ？」

あの二人を倒す策ぐらい持つてる

それこそ、最も最低で屑で善悪だ

「正々堂々？」

「実は僕、ここの教頭に色々と依頼されてるの。

それをこなせば報酬はそれなりに貰える。無論することはかなり危険で犯罪染みているけどね」

「おいおい、そんなことやって大丈夫なのかよ？ 幾らお前でも…」

恭二くんは僕を心配したような目で見てくれる

「だいじょーぶ。僕を甘く見ないでくれよ？」

それに、たとえ捕まっても僕は失うものなんてなにも無いしね」

もう既に、僕の人生で大事なものはなにもかも無くなっているしね

「お前：改めて言うが最低な奴だな」

「最低で底辺で屑さ。でも、

それでも僕は悪くない。

悪いのは世界であって、僕じゃない

理不尽で、不条理で、不公平で、同じく最低なこの世界

腐った世の中のなにもかも受け入れ、  
認めるのが僕たちだぜ？」

戦争で溢れ、犯罪に囲まれ、偽悪に  
埋もれ、不平等に生きていく

それがこの世界さ

努力すればなんでもできる、これは綺麗言だ

努力なんて才能ある連中の言い訳に過ぎない

才能があるから努力して結果が出せる

才能があるから物事を成し遂げることが出来る

才能があるから成功することが出来る

それを自覚していない人間ほど性質たちの悪いものは無い

そんな不公平な世界を、僕は別に  
恨んじやいないさ

僕を見るとそう思うだろうけど、事実僕は

世界を憎いとなんて思ったことは無い

たとえ不平等だろうが、不条理だろうが、荒唐無稽だろうが、支離滅裂だろうが、自分勝手だろうが、僕はそれでもそんな世界は嫌いじゃない

負の側面全てを受け入れ、愛し、悲しむ

それこそ、僕たちであつて、『僕』でもある

狂ってるって言ってみなよ

なら返しにこう言つてあげるよ

こんな腐った世界で幸せそうに生きてる君たちの方こそ狂ってるさ

## 二十三問 屑と誘拐と決勝戦（前書き）

時間軸があまり分からなかったので、この

小説では作者の都合で進めさせてもらいました（泣

です。今話から誘拐事件が発生します

とは言っても主人公は楽観者になると思いますが…

では、二十三話です

バカテスト

『この文章の日本語訳を書きなさい

Today is my father's birthday』

姫路瑞希の答え

『今日は父の誕生日です』

教師のコメント

『正解です。簡単すぎましたね』

土屋康太の答え

『母』

教師のコメント

『 Birthday も訳せなかった貴方の常識に先生は驚きです。それと母ではなく父です』

仲野宮浪都の答え

『この文章の日本語訳』

教師のコメント

『後で職員室に来るように』

## 二十三問 屑と誘拐と決勝戦

「よっこいしょっと…」

暗い部屋の中でそんな独り言を呟く

手には一台のノートパソコン

僕はそれを無造作に開け、既にそこに  
保存しておいたデータを開く

そして、ポケットから一本のディスクを取り出すと、  
パソコンの中に入れ、一つの内容がスクリーンに飛び出す

《WARNING! THIS DISK CONTAINS A  
HARDWARE THAT MAY  
DAMAGE THE RECEIVER DO YOU STI  
LL WANT TO SEND THE MESSAGE?》

ここでYESとNOという選択肢が出てくる

僕は迷うことなくYESを選ぶ

すると、そこでさらに警告する文字が、  
今度は赤い字で、さらには大きく掲示される



《THIS MESSAGE IS CONTAMINATED  
WITH A COMPUTER VIRUS ,  
DO YOU STILL WISH TO CONTINUE?》

ここも同じく迷い無しにYESと答える

《MESSAGE SENT》

この二つの言葉を見ると、僕はホッと  
溜め息を吐いた

でも、ジツとしてられない

僕はすぐさまフォルダに入り、さっきのメッセージに  
関するデータを全て完全に消去した

通常、たとえデータを削除してもまだその切れ端などは  
パソコンに残っているんだ

だから、削除したデータをさらに消去しないといけない

パソコンを調べられたら一発でバレてしまう

もしバレたら僕は終わりだ

最後まで完全に消去したのを見届け、  
すぐさまその場所を出る

暗い部屋の出口である扉を開け、明るい  
表の世界へと足を踏み入れる

太陽の光がさっきまで暗い部屋の中に居た  
僕の目を眩しく照らす

被っていた帽子と黒のパーカーを脱ぎ、汗を拭く

なぜこんな怪しいことをしてるという

教頭の仕事さ

今までずっと忘れていた所為で教頭に怒られて、  
今日中に始めないと殺すぞ的なこと言われちゃった

…悪ふざけしたことを誤るよ

でも、そんな感じに怒られたから僕はやっと行動を起こした

なにをしたかは…まだ秘密だぜ？

まあ、さっきの警告の連打で丸分かりだと思っけど

「…仲野宮？ こんな所でなにしてるんだよ？」

突然声を掛けられ、思わず少し驚く

後ろを振り向くと、何故か汗がダラダラと流れていて  
焦りの表情を浮かべている代表が立っていた

「誰かと思えば代表じゃないか。まったく、脅かさないでよね」

「黙って俺の質問に答えろ！」

何故かツンツンしている

なにか気に食わないことでもあったのかな？

まあ、僕の知ったこっちゃないけど

「散歩さ」

「ちッ、見るからに怪しいがてめえのことだ。  
白状しそうにねえな」

疑うのも無理は無い

僕は手に真つ黒のパーカーに帽子、そして  
怪しげなノートパソコンを持っている

明らかに不信人物だけど、代表は諦めたような声を漏らす

「どうしたんだいそんなに慌てて？」

「誘拐だ！ てめえは知らねえと思うが、同じ  
クラスの姫路、島田、そしてあの島田妹が誘拐されてんだ！」

誘拐？

…やばい、心当たりがある

ていうか、僕が引き起こしたことじゃないか

まあ、そんなことを代表に言うほど僕は馬鹿じゃないけど

「へえ、それは大変だね」

「そんな軽いことじゃねえんだよ！ ムツツリー二に携帯電話のGPSを探知させようとしても電波が妨害されるって言ってるしよオ！ 俺には何がなんだか…」

電波が妨害されてる…か

大成功

「まあ、頑張つて。僕もなにか見たら君に報告するからさ」

「てめえも手伝えクソが！」

「物事の頼み方を学ぼうぜ？ 僕はこれから個人戦の決勝戦があるんだ、だからそんな時間は無い」

「試合どころじゃねえんだぞ！ 誘拐だぞ、犯罪だぞ！ てめえは犯罪が嫌いじゃねえのかよ！」

「でも、僕は善良な一般市民だぜ？ 僕になにをしろっていうんだよ？ こういうことは警察に任せて、一般人は引き下がってない」と

「警察に連絡できねえんだよ！ もししたらあの三人の安否が…」

まさに泥沼状態だね

彼の話によると現在は吉田くん、土屋くん、そして代表の三人で全力で探しているらしいんだ

ま、僕は手伝わないけどね

仲間を売るような行為を、僕がするわけないだろ？

「それならもうお手上げだね。最低限の覚悟はもった方が良い」

「ちッ、てめえは相変わらず役立たずの塵だな！」

代表は舌打ちをし、走り去っていく

あの二人の試合はまだまだ始まらないらしく、時間に余裕がある

でも、僕ら個人戦メンバーは最初の方に試合が始まる

だから僕には時間が無いんだよ

まあ、あの犯罪者どもの居場所を教えるなんて三秒も掛からないんだけどね

でも、代表達には協力しない

僕は僕のやり方であの連中を肅清する…

『召喚大会個人戦もいよいよ大詰めの時です！ 数多くの白熱した試合がありました、それも今日で終わりです！』

召喚大会個人戦、決勝戦を開催します！』

歓声が一気に上がる

会場には今までとは比べ物にならないほどの

人数が座っていて、それに比例しボリウム也大音量に

青空には色々と花火的なものが打ち上げられていて、まるでお祭りだ

それほどこの召喚大会が重要なんだね

『ちなみにもう一度言いますが、優勝者には

この特別の腕輪を差し上げます！』

解説が掲げたのは召喚獣の付ける腕輪では無く、

学生が付ける腕輪

元々は学園長の試験用の新型装置

僕の教頭に与えられた使命は、これを取って彼に渡すことだ

なんでもこの腕輪には欠点がある

その欠点を告発することで、まだ出来上がっていないような技術を  
提供する学園とレッテルを貼り、学園を滅茶苦茶にしようってわけだ  
教頭も中々悪いことをする

ま、僕は報酬さえもらえればいいんだけど

『ではまず赤コーナー！ 圧倒的な実力で  
今までの大戦相手に勝利してきた！』

二年Aクラス、長瀬流歌！』

階段を駆け上がり、フィールドに現れたのは  
いつもより凛々しい表情の長瀬

様子はいつもと違うようだけど、なにかあったのかな？

『対するは青コーナー！ 奇想天外な策略と点数で  
今まで我々の仰天する試合を見せてくれました！』

二年Fクラス、仲野宮浪都！』

名前を呼ばれ、僕は階段を上り、フィールドへと姿を現す

長瀬は僕に気付き、こっちを向く

いつもだどこで憎たらしい目で睨んでくるはずだ

なのに、今回は違った

なんというか、優しい表情というか、とにかく複雑そうな表情だ  
まるで、何かに哀れんでいるかのように

「長瀬〜！ 一日ぶり〜！」

笑顔で手を振るが、無言を返される

ちえ、せめて反応ぐらい見せてくれてもいいのに…

『ではこれより試験召喚戦争を始めたいと思います！  
まずは対戦科目から！ 今回の科目はルーレットでは無く、  
我々に決定させてもらいます！ 決勝戦ということもあります  
から、総合点数で勝負してもらいます！』

総合点数、ねえ

純粹な点数なら、まだ分からない

長瀬が本気でテストを受ければ軽く3000点以上は取れる

今回も僕との対戦もあって、多分かなり  
本気で受けたと思う

なら点数は高い3000点か、低い4000点…

それに対して、僕はそれほど真面目に受けていない



勉強こそしたけどそれほど本気では無かったし、一部の科目に至ってはテストすら受けていない

テストすら受けていない科目は三つぐらいだから…  
多分低い4000点が限界かな？

得意不得意も考慮し、不得意の場合を300～400点前後で得意を700～800点前後だとすると…それぐらいかな？

『では、開始してください！』

「「サモン！！」」

長瀬が僕に一言も話すことなく、勝負が始まった

『Aクラス長瀬流歌 総合点数4029点』

へえ、彼女にしては上出来だね

あの次席の久保田くん(?)を超えてるじゃないか

あれ、少し余計な字があるような…

まあいつか

彼とは殆ど会わないし

『Fクラス仲野宮浪都 総合点数4170点』

うげえ、低すぎるだろ…

4000点台か…恥だぜ

『な、なんということでしょう、点数がほぼ互角です!』

うるさいなあ解析の人…

僕は今とてもショックを受けているんだから

しかし、一部の科目でテストを受けないのは拙かったかな?

でも、流石に僕も総合科目じゃなくて総合点数が出てくるとは思わなかったんだよ

なんでこういう時に限って総合科目にしないんだよ…

今回はそれなりに出来たっていうのに…(総合科目5305点)

「随分調子が良かったみたいじゃないか。うん、かつては勉強を教えた有人としては鼻が高いよ!」

思いっきり嫌味を込めながら笑顔でそう告げる

でも、長瀬は無言のままなんの反応も見せない

一体どうしたんだろう?

僕が言えた台詞じゃないけど、今日の長瀬は少し気持ち悪いよ…

「…随分と”かつては”の部分強調するのね」

やっと長瀬は口を開いた

「事実を口にしてなにかいけないの？」

「いや、浪都は随分と執念深いよね、って思っただけよ」

「はい？」

彼女の言葉に僕は首を傾げる

「ほら、なにボケツとしてるのよ？」

「うわっと！」

彼女は僕が疑問符を浮かべてる隙に切りかかってきていた

いくらなんでも卑怯じゃないの？

僕だって人のことは言えないけど…

「不意打ちっていうのは当てないと意味が無いんだぜ？」

「分かってるわよ、そんなこと。別に攻撃が当てたかったわけじゃないし」

”フン”と鼻で笑い、首を逸らす長瀬

負け惜しみはダサイぜ？

「こっちからも行かせてもらうね！」

僕の召喚獣が銃を構え、長瀬の召喚獣に発砲する

だが長瀬は命中率が悪い僕の銃撃を難無く避けると、再び接近してきた

それを許さんとはかりに腕で払おうとするが、一瞬で逃げられる

『二年Aクラス長瀬流歌 総合点数3529点』

あれ、点数が減ってる？

僕の攻撃は当たってないのに…

なにもしていないのに点数が減っているってことはまさか…！

慌てて僕は辺りを搜索するが、別段変わった様子は無かった

僕の思い違い…か？

「なにキヨロキヨロ周りを見てるのよ？」

それを見た長瀬がそう言う

「大方私が腕輪の能力を使ったとしても  
思ってるんでしょ？でも、それは残念だったわね

もう既に手遅れよ」

「ッ……！」

緊張が走る

僕は彼女の腕輪の能力を知らない

前回戦った時でも彼女は腕輪の能力を使用しなかった

つまり、なんの検討も付かないんだよ

「足元を見てみたら？」

言われるがままに、召喚獣に足元を覗かせる

すると、僕は戦慄した

僕の召喚獣の周りには無数の黒い影が広がっていた

どれも金属で出来ているのか、怪しく輝いている

「それはなにか知ってる？」

急に長瀬の召喚獣が僕の召喚獣の目の前に来る

この状況の咄然としていた僕はまったく反応できない

吸い込まれるように長瀬の召喚獣は僕の  
召喚獣に蹴りを放つ

幸い防弾チョッキの所為でダメージは無かったけど、  
バランスを崩した僕の召喚獣は無造作に倒れる

そして、地面に着いた瞬間…

『Fクラス仲野宮浪都 総合点数3681点』

僕の召喚獣が大ダメージを受ける

「まきびし  
撒菱よ」

まきびし？

まきびしって、あの忍者がよく使う道具の…

「その物体一つ一つが刺さると大ダメージを与える  
撒菱で、一個につき十点を使用しないといけない。でも  
高額な分、効果は魅力的よ」

ちッ、まんまと罠に嵌ったってわけね

この僕が本当に長瀬に翻弄されるなんてね

それに、今日の長瀬は様子が違う

なんなんだろう、もし僕をこんな状況に追い詰められたなら、  
いつもなら優越感に浸りながら僕を見下し笑ってるはずなんだけど

今回は違う

彼女はまったく笑っていない

すごく悲しそうで、辛そう

「ちッ、面倒な腕輪だね」

「アンタに言われたくはないわよ。その腕輪の能力、相当応用が广いんだし」

「一応はね」

「使いなさいよ？」

「はい？」

一瞬彼女の問いの意味が分からなかった

「だから、その腕輪を使えって言うてんのよ」

彼女が自ら僕の腕輪の能力を使えって、なにを企んでいるんだ？

「嫌だね。絶対なにか企んでるでしょ？」

「なにも企んでないわよ。私はただ、もうアンタには負けないってことを見せ付けたいだけよ」

自信気にそう言う

へえ…

「そこまでお望みなら、いいよ！ 使ってやるよ！」

こうなったら自棄さ！

『Fクラス仲野宮浪都 総合点数2681点』

今回は特大の50個も使用した

もう自分でも自棄なのは自覚してる

でも、今回はなんか調子悪いんだよね

「なッ!？」

今まさに投げつけようとした時、予想外の自体が起こった

さっきまで数メートル離れていた彼女の召喚獣は、  
なんと僕の直ぐ目の前まで迫っていた

爆弾は確かに設置した

でも、突然の出来事の所為で半分ぐらいがこちらにも…！

「やってくれたじゃないか…！」

「こうなればお互い大きく点数を削られることになる。  
残存点数の少ないアンタにとっては悪いんじゃないの？」



「アンタの能力は封じた！」

しかも、彼女の召喚獣が僕にしがみついていた離れない

恐らく今爆弾を起爆させれば僕の被害だけでなく  
彼女の被害まで僕に降りかかる

それはあちらも同じだけど、この場合点数が少ないのは僕  
即死レベルでは無いにしろ、点数はかなり持って行かれるのは明白  
だった

つまり、彼女は僕の腕輪の能力を封じたつもりなんだろう  
でも…

「そこが甘いんだよ三下！」

僕は臆すことなくスイッチを押した

そしてその瞬間、辺りは大きな爆発音と煙に包まれた



## 二十三問 屑と誘拐と決勝戦（後書き）

いかがでしたか？

誘拐事件の時間軸が分からないので、決勝戦前という形にしました

ちなみに更新速度は少しずつ取り戻していくようにします

（睡眠）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1986v/>

---

屑と天才と戦争嫌い

2011年11月27日19時52分発行